

# F D

2019年度

北海道医療大学 F D研修報告書

〈基本編・テーマ編〉

学生を中心とした  
教育をすすめるために

北海道医療大学 全学F D委員会

## 目 次

---

### <基本編>

#### 北海道医療大学全学FD研修

学生を中心とした教育をすすめるために

-北海道医療大学のエンパティ・アクティビティについて考える-

はじめに	1
実施概要（趣旨など）	2
参加者名簿	4
講話	25
「医療系総合大学教員としての使命と目標 -新医療人育成の北の拠点を目指して-」 副学長 黒澤 隆夫	
レクチャー	34
「シラバス（授業計画）について」 講師：薬学部 泉 剛	
ワークショップ（プロダクトと感想）	
Aグループ	42
Bグループ	43
Cグループ	45
Dグループ	48
参加者感想	49
総合評価	56
FD委員感想	63
アルバム	67

## <テーマ編>

### 北海道医療大学全学FD研修

学生を中心とした教育をすすめるために

- IRを活用した学生支援の方法 -

はじめに	73
実施概要（趣旨など）	74
参加者名簿	76
レクチャー 「本学における教学   Rの整備・活動状況と今後について」   R推進センター長 安部 博史	82
話題提供 「各学部における学生支援の状況」 薬学部 木村 真一 歯学部 門 貴司 看護福祉学部 西 基 心理科学部 西郷 達雄 リハビリテーション科学部 宮崎 充功	84
ワークショップ・グループ名簿 WS1：オリエンテーション WS2：アイスブレイキング WS3：ワークショップのすすめ方 「   Rを活用した学生支援の方法を考える」	111
プロダクトと感想	
Aグループ	120,125
Bグループ	121,127
Cグループ	122,129
Dグループ	123,131
Eグループ	124,132

F D 委員感想	133
アンケート	138
アルバム	144

# 全学FD研修 [基本編]

「学生を中心とした

教育をすすめるために」

-北海道医療大学のユニバーシティ・アイデンティ  
ティについて考える-

期 日：2019年4月4日（木）

会 場：当別キャンパス中央講義棟

## はじめに

F D委員長 志渡 晃一

F D委員長・委員として参加させていただきました。滞りなく順調に研修を終えることができ、ほっとしております。全体としてなごやかで暖かみのある研修会になったことを企画・参加者の一人として嬉しく存じています。F D研修は他学部の先生と学部横断的に交流が持てる点が素晴らしいとあらためて思った次第です。長年勤務していても他学部の先生と関わる機会はなかなか得られないのが実情です。新任の先生方のアカデミックキャリアーを知り、ともに研究教育スキルを向上させる上でも非常に有意義と感じました。

学生を中心とした教育を促す方策として、ユニバーシティ・アイデンティティの側面からの種々の提案がなされたことは意義深く有益であったと思いました。今回のF Dの成果をもとに、8月のF D研修テーマ編でさらに検討を重ね、活用可能な知見を共有することが必要であると考えます。

基本編に参加された皆様がこれを機に、さらなる交流を重ねられ、連携が深まっていくことを楽しみにしております。

## 平成 31 年度 全学 F D 研修<基本編>

メインテーマ：「学生を中心とした教育をすすめるために」

\*サブテーマ：北海道医療大学のユニバーシティ・アイデンティティについて考える

主 催：北海道医療大学全学 F D 委員会

日 時：平成 3 1 年 4 月 4 日（木） 10：00～16：30(予定)

会 場：当別キャンパス C 5 2 講義室

参加者：2019 年度新規採用教員：22 名・2018 年度 中途採用教員：5 名 計 27 名

[別紙参照]

FD 委員長：看護福祉学部：志渡教授

FD 副委員長：薬学部：遠藤（泰）教授

FD 委員等：薬学部：泉教授 歯学部：會田教授、荒川教授 看護福祉学部：福井講師  
心理科学部：野田教授、西澤教授 リハビリテーション科学部：山口教授（、西澤教授）  
医療技術学部：藏満教授 全学教育推進センター：長谷川教授、鎌田准教授

事務担当：学務部 高見学務部長、三浦学務部次長、細川 I R 課員

講 師：黒澤副学長

### 【趣旨】

本学の教職員一人ひとりが自主性・創造性を発揮することにより「学生中心の教育」並びに「患者中心の医療」を推進しつつ、「21 世紀の新しい健康科学の構築」を追究することが本学の行動指針である。

その実現のために FD 研修会を開催し、教職員の自覚を促すとともに「教育力」を高めることを本研修会の趣旨とする。

### 【目標】

\*一般目標：GIO

アドミッション・ポリシーに沿って本学の特長を提示して学生の入学を促すとともに、時代や社会のニーズにあった医療人の育成のための教育手法を構築する。

\*行動目標：SBO s

1. 学修者中心の教育を説明する。
2. 学修者のレディネスを説明する。
3. 教育者の役割を説明する。
4. ユニバーシティ・アイデンティティについて説明する。
5. 医療・福祉の専門職として学生教育を実践する。

### 【研修形態】

- 1) 能動的体験型研修とする。
- 2) 肩書なしの対等な意見交換をする。
- 3) 建設的な意見交換から建設的対応策を生み出す。

## スケジュール概要

9:30	受付開始	
9:40	FD委員集合	
9:50	参加者集合	
10:00	開会	
10:00-10:10	《オリエンテーション》 ・研修の意義と進行内容の紹介	【進行:長谷川委員】 《志渡委員長》
10:10-11:00	《講話》 *医療系総合大学教員としての使命と目標 - 新医療人育成の北の拠点を目指して -	【進行:長谷川委員】 《黒澤副学長》
11:05-11:35	《レクチャー》 *シラバス(授業計画)について	【進行:長谷川委員】 《泉委員》
11:40-11:50	集合写真撮影	
11:50-12:40	昼食・休憩	
12:40-12:50	《全学FD委員の自己紹介》	【進行:長谷川委員】
12:50-13:35	《グループづくり》 *アイスブレイキング(参加者自己紹介)      《遠藤(泰)副委員長》 *役割分担(リーダー・記録・発表)      *グループ名の決定	
13:35-13:40	休憩	
13:40-15:30	《ワークショップ》 *ワークショップのすすめ方 *グループ討論(110分) 「北海道医療大学のユニバーシティ・アイデンティティについて考える」	【進行:長谷川委員】 《長谷川委員》
15:30-15:40	休憩	
15:40-16:00	発表(発表・質疑応答 5分×4グループ)	
16:00-16:30	全体討論	【進行:長谷川委員】
16:30-16:40	アンケート記入・修了証授与	
16:40	閉会	

## 2019年度 全学FD研修&lt;基本編(新任教員等)&gt; 参加者名簿

[敬称略]

職名	氏名	所属講座等	グループ
<b>薬学部</b>			
教授	西 剛秀	創薬化学(医薬化学)	A
教授	小島 弘幸	衛生薬学(環境衛生学)	B
教授	中川 宏治	薬学教育推進(薬学教育支援室)	C
准教授	中川 勉	薬剤学(製剤学)	D
講師	早坂 敬明	実務薬学(実務薬学教育研究)	A
講師	水野 夏実	薬理学(薬理学)	B
<b>歯学部</b>			
教授	永野 恵司	口腔生物学系(微生物学)	D
助教	高田 鮎子	口腔生物学系(生化学)	A
助教	森川 哲郎	生体機能・病態学系(臨床口腔病理学)	B
助教	山口 撰崇	口腔機能修復・再建学系(クラウンブリッジ・インプラント補綴学)	C
助教	櫻尾 治奈	口腔構造・機能発育学系(歯科矯正学)	D
<b>看護福祉学部</b>			
講師	下山 美由紀	臨床福祉学科(介護福祉学)	C
助教	高橋 啓太	看護学科(成人看護学)	A
助教	清水 博美	看護学科(成人看護学)	B
助教	南山 斗志世	看護学科(地域保健看護学・地域看護学)	D
<b>リハビリテーション科学部</b>			
講師	大須田 祐亮	理学療法学科	D
助教	多田 菊代	理学療法学科	A
助教	岩部 達也	理学療法学科	B
<b>医療技術学部</b>			
教授	遠藤 輝夫	臨床検査学科	B
教授	坊垣 暁之	臨床検査学科	C
講師	丸川 活司	臨床検査学科	A
講師	山崎 智拓	臨床検査学科	D
助教	小野 誠司	臨床検査学科	A
助教	沖野 久美子	臨床検査学科	C
<b>歯科衛生士専門学校</b>			
専任教員	山形 摩紗	歯科衛生科	B
専任教員	秋元 奈美	歯科衛生科	C
<b>認定看護師研修センター</b>			
専任教員	澤谷 啓行	感染管理分野	C

参加者計 27

講師(1)	副学長	黒澤 隆夫
FD委員長(1)	看護福祉学部	志渡 晃一
FD委員(11)	薬学部	遠藤 泰・泉 剛
	歯学部	會田 英紀・荒川 俊哉
	看護福祉学部	福井 純子
	心理科学部	野田 昌道・西澤 典子
	リハビリテーション科学部	山口 明彦
	医療技術学部	藏満 保宏
	全学教育推進センター	長谷川 敦司・鎌田 禎子
事務担当(3)	学務部	高見 裕勝・三浦 清志・細川 洋美

## 全学FD研修（基本編） グループ編成

グループ（名称）	氏 名 【所属学部等】			FD委員
A  ( )  7 名	西 剛秀 【薬】	高橋 啓太 【看護】	小野 誠司 【臨床検査】	泉委員 會田委員
	早坂 敬明 【薬】	多田 菊代 【理学】		
	高田 鮎子 【歯】	丸川 活司 【臨床検査】		
B  ( )  7 名	小島 弘幸 【薬】	清水 博美 【看護】	山形 摩紗 【歯衛生】	荒川委員 西澤委員
	水野 夏実 【薬】	岩部 達也 【理学】		
	森川 哲郎 【歯】	遠藤 輝夫 【臨床検査】		
C  ( )  7 名	中川 宏治 【薬】	坊垣 暁之 【臨床検査】	澤谷 啓行 【認看C】	野田委員 鎌田委員
	山口 撰崇 【歯】	沖野 久美子 【臨床検査】		
	下山 美由紀 【臨床福祉】	秋元 奈美 【歯衛生】		
D  ( )  6 名	中川 勉 【薬】	南山 斗志世 【看護】		山口委員 藏満委員
	永野 恵司 【歯】	大須田 祐亮 【理学】		
	樫尾 治奈 【歯】	山崎 智拡 【臨床検査】		

### グループの役割分担

- 【リーダー】 WS作業の進行をリード、ゴールを把握、進行スケジュールをデザインして、きめられた時間までに作業が完了するようにメンバーをリードする。
- 【記録係①】 作業進行に出てきた内容をメモ・記録し、プロダクト作成作業に役立てる。
- 【記録係②】 WSのプロダクトとなる発表内容を討論により修正された内容もいれて記録・作成して、FD報告書用の完成プロダクトの資料とする。（代表者として下記へ提出）
- 【発表者】 WSでのプロダクトを発表する。
- 【発表資料作成】 メンバーが協力して作成する。

### 報告書・ニュースレター等 原稿

- ① グループプロダクト      グループ発表資料
- ② 参加者感想(全員)      400字以内(ワード形式、フォント10.5、A4縦標準サイズ)
- ③ FD委員感想(全員)      400字以内(同様)
- ④ アンケート集計      事務局(学務部教務企画課)      提出期限:4月26日(金)  
提出先:学務部教務企画課      Fd-kensyu@hoku-iryo-u.ac.jp

## 2019年度 全学FD研修 〈基本編〉

### 学生を中心とした教育を 進めるために

北海道医療大学のユニバーシティ・  
アイデンティティについて考える



主催：全学FD委員会



2019年4月4日（木） 当別キャンパス 中央講義棟

## 2019年度 全学FD研修 〈基本編〉

# 「開会式」



全学FD委員会

## 研修会開催の趣旨

### 研修会開催の趣旨

本学の教職員一人ひとりが自主性・創造性を発揮することにより「学生中心の教育」並びに「患者中心の医療」を推進しつつ、「21世紀の新しい健康科学の構築」を追究することが本学の行動指針である。

その実現のためにFD研修会を開催し、教職員の自覚を促すとともに「教育力」を高めることを本研修会の趣旨とする。

### 研修のテーマと学習目標

テーマ：北海道医療大学の  
ユニバーシティ・アイデンティティについて考える

#### 一般目標G I O：

アドミッション・ポリシーに沿って本学の特長を提示して学生の入学を促すとともに、時代や社会のニーズにあった医療人の育成のための教育手法を構築する

### 研修のテーマと学習目標

#### 行動目標SBOs

1. 学修者中心の教育を説明する。
2. 学修者のレディネスを説明する。
3. 教育者の役割を説明する。
4. ユニバーシティ・アイデンティティについて説明する。
5. 医療の専門職として学生教育を実践する。

# 研修会スケジュール

## 研修会スケジュール

9:40	FD委員集合	
9:50	参加者集合	全体進行/長谷川委員
10:00	開会、オリエンテーション(スケジュール説明、テーマ説明、WSの進め方ほか)	志渡委員長
10:10	講話:「医療系総合大学教員としての使命と目標-新医療人育成の北の拠点を目標して-」	黒澤 隆夫 副学長
11:05	レクチャー:シラバス(授業計画について)	泉委員
11:40	集合写真撮影	
11:50	昼・食・休 憩	
12:40	全学FD委員の自己紹介(1分×11)	進行/長谷川委員
12:50	グループ作り、アイスブレイキング(参加者自己紹介)、役割分担(リーダー、記録、典拠)、グループ名	遠藤(泰) 副委員長
13:35	休 憩	
13:40	ワークショップの進め方 ワークショップ「北海道医療大学のユニバーシティ・アイデンティティについて考える」 グループ討議 110分	長谷川委員
15:30	休 憩	
15:40	発 表	
16:00	全体討議	
16:30	アンケート提出・修了証授与	
16:40	閉会	

# 研修会スタッフ

## 研修会スタッフ

副学長	黒澤 隆夫	
FD委員長	志渡 晃一	看護福祉学部教授
FD副委員長	遠藤 泰	薬学部教授
FD委員	泉 剛	薬学部教授
	會田 英紀	歯学部教授
	荊川 俊哉	歯学部教授
	福井 純子	看護福祉学部講師
	野田 昌道	心理科学部教授
	西澤 典子	心理科学部教授(リハビリテーション科学部兼任)
	山口 明彦	リハビリテーション科学部教授
	藏満 保宏	医療技術学部教授
	長谷川敦司	全学教育推進センター教授
	鎌田 禎子	全学教育推進センター准教授
事務局	高見 裕勝	学務部長
	三浦 清志	学務部次長
	細川 洋美	IP課

# 研修会参加者

## 2019年度全学FD研修(基本編) 参加者名簿

薬学部			リハビリテーション科学部		
教 授	西 剛秀	医薬化学 A	講 師	大須田祐亮	理学療法学科 D
教 授	小島弘幸	環境衛生学 B	助 教	多田篤代	理学療法学科 A
教 授	中川宏治	薬学教育支援室 C	助 教	岩部達也	理学療法学科 B
准教授	中川 勉	製剤学 D	医療技術学部		
講 師	早坂敬明	実務薬学教育研究 A	教 授	遠藤輝夫	臨床検査学科 B
講 師	水野夏実	薬理学 B	教 授	坊垣暁之	臨床検査学科 C
歯学部			講 師	丸川浩司	臨床検査学科 A
教 授	永野恵司	微生物学 D	講 師	山崎智弘	臨床検査学科 D
助 教	高田鮎子	生化学 A	助 教	小野誠司	臨床検査学科 A
助 教	森川哲郎	臨床口腔病理学 B	助 教	沖野久美子	臨床検査学科 C
助 教	山口摂崇	クワック リップ・イブアラト 補綴学 C	歯科衛生士専門学校		
助 教	櫻尾治奈	歯科矯正学 D	専任教員	山形摩紗	歯科衛生科 B
看護福祉学部			専任教員	秋元奈美	歯科衛生科 C
講 師	下山美由紀	介護福祉学 C	認定看護師研修センター		
助 教	高橋啓太	成人看護学 A	専任教員	澤谷啓行	感染管理分野 C
助 教	清水博英	成人看護学 B			
助 教	南山斗志世	地域看護学 D			

## 参加者のグループ分け

A	B	C	D
西 剛秀	小島弘幸	中川宏治	中川 勉
早坂敬明	水野夏実	山口拱崇	永野恵司
高田鮎子	森川哲郎	下山美由紀	檉尾治奈
高橋啓太	清水博美	坊垣暁之	南山斗志世
多田菊代	岩部達也	冲野久美子	大須田裕亮
丸川活司	遠藤輝夫	秋元奈美	山崎智広
小野誠司	山形摩紗	澤谷啓行	
グループ担当タスクフォース			
泉・倉田	荒川・西澤	野田・鎌田	山口・藏満

## 言葉の説明



### 入学者 受入方針

・アドミッション・ポリシーに盛り込むべきポイント

①各大学の強み、特色や社会的な役割を踏まえつつ、大学教育を通してどのような力を発展・向上させるのか。

②入学者に求める能力は何か。

③入学者選抜において、高等学校までに培ってきたどのような力を、どのように評価するのか。

(どのような要素に比重を置くのか、どのような評価方法を活用するのかなど)

文部科学省高等教育局大学振興課大学入試室資料より

### ユニバーシティ・アイデンティティ

「大学がイメージの統一を図り、その組織の存在を人々に印象付けて組織の内外ともに活性化を図るための行為」

ビジュアル・アイデンティティ (VI) : 大学が社会に送り出すあらゆるもの(研究・教育に関する情報と人、サービス、設備、広告、校章に至るまで)をシンボルやデザインによって統一性や計画的多様性を持たせる

マインド・アイデンティティ (MI) : 新たな教育理念の確認・確立、目標設定、長期的戦略計画の立案、内部資源の再評価・再編成などが行われる

ビヘイビア・アイデンティティ (BI) : 大学の理念、機能、役割を社会に向かって明確に示し、その存在理由を主張し、社会と組織内部の支持と理解を求める

その結果を踏まえた外部への情報発信を中心とするコミュニケーション活動で、実態とイメージの一体化をはかる統合された組織行動

日経広告研究所1994:17-18

## 講話

北海道医療大学 副学長

黒澤 隆夫

医療系総合大学教員としての使命と目標  
-新医療人育成の北の拠点を目指して-

## 北海道医療大学 医療系総合大学教員としての使命と目標 - 新医療人育成の北の拠点を目指して -



## 北海道医療大学の校章



二つのH: 北海道(Hokkaido)とHealth Sciences Univ. of Hokkaido  
 上昇するカーブ: 基礎から応用へ、星はそれを導く光



## 北海道医療大学の沿革

- 1972 学校法人東日本学園大学設立
- 1974 歯学部
- 1978 歯学部
- 1985 教養部校舎当別移転・統合



## 北海道医療大学キャンパス



- 1990 札幌医療福祉専門学校開設(2004 閉校)
- 1993 看護福祉学部開設
- 1994 東日本学園大学より北海道医療大学へ名称変更
- 2002 心理科学部開設
- 2019 カンパusbラン科学部
- 2019 医療技術学部

あいの里キャンパス  
 当別キャンパス

## 北海道医療大学の理念・目標

**建学の理念(1974)**  
 「知育・徳育・体育」の三位一体による  
 医療人としての全人格の完成

**教育理念(1993,1998)**  
 生命の尊重と個人の尊厳  
 保健・医療・福祉の連携統合  
 人間性豊かな専門職業人の養成  
 地域・国際社会への貢献

**教育目標(1993,1998)**  
 幅広い深い教養と豊かな人間性の涵養  
 確かな専門の知識及び技術の修得  
 自主性・創造性および協調性の確立  
 地域社会ならびに国際社会への貢献

## 各学部・学科の教育理念・目的・目標

**看護福祉学部・看護学科**

**<教育理念>**  
 本学の教育理念を基本として、看護と福祉の連携・統合をめざす創造的な教育を推進し、総合的なヒューマンケアを担う看護専門職業人を養成することにより、地域社会や人々の健康の向上に貢献することを看護学科の教育理念とする。

**教育目的**  
 人々の健康と福祉の向上のために、看護と福祉を総合的に履修した専門的知識・技術を修得し、人々の尊厳を守り、維持するための総合的ヒューマンケアを実践できる福祉専門職人を養成する。

**<教育目標>**

1. ヒューマンケアに関する深い教養および豊かな人間性の涵養
2. ヒューマンケアを基本とした看護専門職に必要な知識・技術の修得
3. 看護専門領域における自律的・創造的な実践力の涵養
4. ヒューマンケアに関連する領域の人々と連携できる協調性の確立
5. 地域社会や人々の多様性を甘受できる能力の涵養

**看護福祉学部・臨床福祉学科**

**<教育理念>**  
 本学の教育理念を基本として、看護と福祉の連携・統合をめざす創造的な教育を推進し、総合的なヒューマンケアを担う福祉専門職業人を養成することにより、地域社会や人々の健康の向上に貢献することを臨床福祉学科の教育理念とする。

**教育目的**  
 人々の健康と福祉の向上のために、看護と福祉を総合的に履修した専門的知識・技術を修得し、人々の尊厳を守り、維持するための総合的ヒューマンケアを実践できる福祉専門職人を養成する。

**<教育目標>**

1. ヒューマンケアに関する深い教養および豊かな人間性の涵養
2. ヒューマンケアを基本とした福祉専門職に必要な知識・技術の修得
3. 福祉専門領域における自律的・創造的な実践力の涵養
4. ヒューマンケアに関連する領域の人々と連携できる協調性の確立
5. 地域社会や人々の多様性を甘受できる能力の涵養

## 北海道医療大学の行動指針と三方針

**行動指針**

- ★ 21世紀の新しい健康科学の構築
- ★ 社会と共生・協働する開かれた大学
- ★ 組織として自律性・透明性を高め、構成員は自主性・創造性を発揮
- ★ 学生中心の教育と患者中心の医療

**教育に関わる三方針**

本学全体の教育の基本三方針を基に、各学部・学科で設定されている

- ★ 入学受け入れの方針(アドミッション・ポリシー)  
 本学の入学に必要な、学力、能力、意欲、意欲を有しているか
- ★ 教育課程編成・実施方針(カリキュラム・ポリシー)  
 理念・目標に基づいて編成される教育プログラム(カリキュラム)
- ★ 学位授与の方針(ディプロマ・ポリシー)  
 本学での学修を通じ、卒業時までには習得すべき能力

## 本学の教育に関わる三方針

### 入学者受入れの方針(アドミッション・ポリシー)

北海道医療大学は、「21世紀の新しい健康科学の構築」を追究し、社会の要請と期待に応えるため、保健と医療と福祉に関する高度の研究に裏打ちされた良質な教育を行います。その教育を通して、チーム医療をはじめ地域社会や国際社会に貢献できる自立した専門職業人を育成することを目標としています。

そのため、本学では次のような人材を広く求めています。

1. 入学後の修学に必要な基礎的学力を有していること。
2. 協同性や基礎的コミュニケーション能力を有していること。
3. 生命を尊重し、他者を大切に思う心があること。
4. 保健・医療・福祉に関心があがり、地域社会ならびに人類の幸福に貢献するという目的意識を持っていること。
5. 生涯にわたって学習を継続し、自己を高める意欲を持っていること。

### 教育課程編成・実施の方針(カリキュラム・ポリシー)

北海道医療大学は、「保健と医療と福祉の連携・融合」をめざす教育理念を基本として、広く社会に貢献できる豊かな知識・技能と幅広く深い教養を身につけた人間性豊かな専門職業人を育成するために、「全学教育科目」と各学部・学科の「専門教育科目」からなる学士課程教育を行っています。

### 学位授与の方針(ディプロマ・ポリシー)

北海道医療大学は、各学部・学科の教育理念・目標に即した学士課程の授業科目を履修し、保健・医療・福祉の志願者・専門化に達成しうる高い技能と知識、優れた判断力と教養を身につけ、かつ各学部が定める履修上の条件を満たした学生に対して「学士」の学位を授与します。



## 各学部・学科の教育の基本方針

### 教育の基本方針 薬学部・薬学科

#### 【学位授与の方針(ディプロマ・ポリシー)】

本学薬学部の教育理念・目的に即した教育目標の達成に向けて、薬学部卒業のために以下の条件を満たすことが求められる。これら条件には、履修制として設定されているもののほか、以下の要請も求められている。

1. 履修として求められる高い知識を修得し、意欲を燃やし、他者を見守り支える責任を有する。
2. 有難く安全な薬物治療の提供、責任にふさわしい倫理観に基づき行うべき社会における必要不可欠な職務を担う覚悟と責任を有している。
3. 多岐にわたる専門知識を身につけ、他者との協働が求められる状況に柔軟に対応し、必要に応じて他職種と連携し、チーム医療能力を有する。
4. 本学研究や実践的演習を通じて、医療の進歩に貢献できる高度な、臨床における問題意識を先見・解決する能力を有する。
5. 他者の幸福のため、かつ自己のために自ら研鑽し続ける意欲と意欲を有する。

#### 【教育課程編成・実施の方針(カリキュラム・ポリシー)】

本学薬学部は「学位授与の方針」の条件を参考に、1年次から2年次までを履修する科目ならびにグループ学習を多用したコミュニケーション教育科目を履修する。

1. 薬の専門教育へ向け、基礎的・応用的な専門知識を修得するために、基礎科目に即した総合的な薬学教育を行う。併せて、2年次までの学生の基礎的意欲を醸成し、後進の育成の責任を有する。
2. 薬の専門教育へ向け、基礎的・応用的な専門知識を修得するために、基礎科目に即した総合的な薬学教育を行う。併せて、2年次までの学生の基礎的意欲を醸成し、後進の育成の責任を有する。
3. 臨床現場での実践的意欲を醸成するために、基礎科目に即した総合的な薬学教育を行う。併せて、2年次までの学生の基礎的意欲を醸成し、後進の育成の責任を有する。
4. 4年次から6年次にかけて、薬学としての専門的意欲を醸成するために、基礎科目に即した総合的な薬学教育を行う。併せて、2年次までの学生の基礎的意欲を醸成し、後進の育成の責任を有する。
5. 6年次の修業は、知識・技能の修得に即しては、基礎科目に即した総合的な薬学教育を行う。併せて、2年次までの学生の基礎的意欲を醸成し、後進の育成の責任を有する。
6. 6年次の修業は、知識・技能の修得に即しては、基礎科目に即した総合的な薬学教育を行う。併せて、2年次までの学生の基礎的意欲を醸成し、後進の育成の責任を有する。

#### 【入学者受け入れの方針(アドミッション・ポリシー)】

本学薬学部は、「学位授与の方針」の条件を参考に、チーム医療を始める地域社会や国際社会に貢献できる自立した専門職業人を育成することを目標としています。そのため、本学では以下の条件を満たす学生を広く募集し、入学を希望する学生に対して以下の条件を満たす学生を広く募集します。

1. 入学後の修学に必要な基礎的学力を有していること。
2. 協同性や基礎的コミュニケーション能力を有していること。
3. 生命を尊重し、他者を大切に思う心があること。
4. 保健・医療・福祉に関心があがり、地域社会ならびに人類の幸福に貢献するという目的意識を持っていること。
5. 生涯にわたって学習を継続し、自己を高める意欲を持っていること。



## 北海道医療大学校歌について質問

本学の校歌の歌いたしは

見はるかす 海のかがやき  
紺青の世界の風に

.....

海はどれを指すのでしょうか

- 1 大平洋
- 2 日本海
- 3 オホーツク海
- 4 東シナ海
- 5 北極海

解 1

## 高等教育の変遷と現状

### 大学の危機的要因

1. 近過去(1960後半～): 学園紛争
2. 現在(2009～令和): 少子化、グローバル化
3. 現在～未来(～2040): 18歳人口の劇的な現象

入学者の確保  
高大接続・入試改革

### 大学進学率の変化

1. エリート型大学教育(～15%)
2. マス型大学教育(15～50%): 知識・技能の伝達
3. ユニバーサル型(50%～): 新規・広範な経験の提供

充実した教育  
プログラムの提供

### 大学の機能分化

- 1 世界的な研究・教育拠点
- 2 高度専門職業人の養成
- 3 幅広い職業人の養成
- 4 総合的な教養教育
- 5 特定の専門的分野(芸術・体育等)の教育・研究
- 6 地域の生産学習機会の拠点
- 7 社会貢献(地域貢献、産学官連携、国際交流等)

大学のミッションの明確化  
社会の中堅として地域社会  
を支え、活躍する職業人の養成

## 望まれる大学としての具体的なイメージ

### 特色のある大学

他大学にない特徴・魅力をもつ大学(外から見える形にして示す)

### 選ばれる大学

優秀な意欲をもつ教員がいる(内部での正しい評価を行うこと)  
社会に信頼される卒業生を送り出せる  
国家試験、資格試験の合格率高い  
社会貢献度が高い  
教育面、学生生活面などで親が安心してまかせられる  
補習教育、フォローアップ体制がある  
キャンパスバラスメント対策をもち、それが機能している  
アメニティが充実し、健康管理が行き届いている

## 大学改革

- ① 大学の質の向上、教育内容・教育方法の充実  
基準認定制度(educational accreditation)による大学評価  
教養教育(liberal arts)と専門教育の有機的な連携の確保
- ② 教員の自己評価と学生の評価 客観性のある学習意欲を促す評価  
有能な教員の確保  
学生評価への真摯な対応(GPA Grade Point Average 等の導入)
- ③ 大学間の競合と協調(大学の機能別分化)  
単なる競合ではなく、各大学の特殊性・特異性を認識した上で協調を  
図り、学生中心の教育を行い、社会に必要な人材(21世紀型市民)を育  
成する
- ④ 充実した学生生活の確保と学生の健康管理



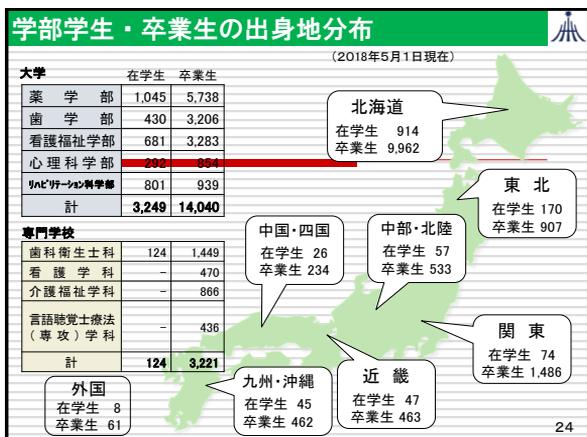
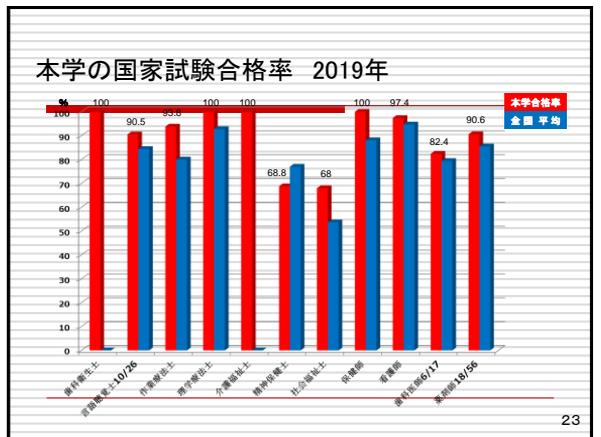




### 国家試験の合格率を上げる

- 入り口対策**
  - 入試の際、優秀な学生を集める。
  - 医療大学のブランド性を上昇させる。
  - 国試の合格率が高い。
  - 特別な教育体制を構築する。
  - 北海道だけでなく、全国から受験生を集める。
- 出口対策**
  - 国試対策をきめ細かく行う。
  - 優秀大学の教育システムを学び応用する。
  - 魅力的な授業を行う。

22



### 今年度の本学入学生

学部	入学定員	入学者(2019)	過去平均(3年間)
薬学部	160	165	170
歯学部	80	83	65
看護福祉学部	看護 福祉	100 80	116 40
心理科学部	75	75	69
リハビリテーション科学部	理学 作業 言語	80 40 60	95 49 64
小計	675	683	675
医療技術学部	60	72	-
計	735	755	-
歯科衛生士専門学校	50	20	32

25

## 本学通学環境に関する問題

本学の通学生は、概ね札幌市と当別町に居住しています。  
当別町に居住している学生はおおよそ何名でしょうか。

- 1 200 名
- 2 500 名
- 3 1000 名
- 4 1500 名
- 5 2000 名

解 3

JR 学園都市「札幌駅—北海道医療大学駅」の1日の往復便は何本でしょうか。

- 1 20 本
- 2 30 本
- 3 40 本
- 4 50 本
- 5 60 本

解 3  
(2020/3から66本)

26

## 学長よりの提言

— 新医療人育成の北の拠点を目指して —



27

## 新医療人育成のために備えるべき条件

(松田一郎 元学長より)

- (1) 専門医療職能人としての国家資格・認定資格の取得
- (2) 新時代にふさわしい教育
- (3) 新時代にふさわしい研究テーマ
- (4) 新しい視点に基づく医療実践力
- (5) 個体差健康科学に基づきチーム医療（多職種連携）を担う人材の養成

### 社会的使命に基づく教育方針の徹底

学生中心の教育  
学生多様化への対応  
本学ブランドの強化  
研究から教育・地域貢献へ  
アメニティの充実・改善

28

## より良き教育へ向けて

(新川詔夫 前学長)

- ・ 学生が教職員と接する機会を増やす
- ・ 学生間で協力して行う学習を支援する
- ・ 学生の主体的な学習を支援する
- ・ 学習の進み具合をふりかえらせる
- ・ 学習に専念する時間を大切にさせる
- ・ 学生に高い期待をよせる
- ・ 学生の多様性を尊重する

29

## 提案 1

浅香学長

### ◆ 学生が教職員と接する機会を増やす

教員の内へ向けて見なされるよりは、見上げて見なされるときの方が、学生は大学や授業に対する所属意識や学習に対する責任感を強く持つ傾向があります。

窓口に学生が来たらすすんで声をかける  
学生の名前をできるだけ覚えるようにする  
学生が立ち寄りやすい環境をととのえる  
講演会など学内のイベントに積極的に加わらせる  
学生や職員が集う会に、一緒に参加する  
キャンパスの構成員として積極的に学園祭に参加する

30

## 提案 2

浅香学長

### ◆ 学生間で協力して行う学習を支援する

仲間と協力して行う学習は、学習の意欲を高め、学習効果も高いといわれています。教室内外で学生同士で共に学習活動することができるように環境を整備しましょう。

学生がグループで学習できる場所と利用方法などを把握し、アドバイスする  
大学に現れなくなった学生に気付いたら、他の学生にさり気なく様子を尋ねてみる  
身近な学生による学習サークルを支援する  
普段から学内の教職員と連携し、さらに学外の教職員とも情報交換をする場をもつ

31

提案 3 浅香学長

◆ **学生の主体的な学習を支援する**

大学教育においては、主体的に学習する姿勢を身につけさせることが重要です。様々な一級学外活動も学生の主体的な学習活動の貴重な機会になります。こうした自主的な機会を持つことで、自立性、目的意識、倫理観などが培われます。

各種研究会、ボランティア活動などの情報を積極的に学生に伝える

学生から個別に受けた質問に適切に対処すると共に、普遍性の高いものについては、ガイダンスなどでの情報提供に活用する

窓口での対応などを通じて、学生に社会人・医療人としてのマナーを教える

32

提案 4 浅香学長

□ **学習の進み具合をふりかえらせる**

学生にとって学習目標に到達しているかどうかを確認することは、その後の学習を進める上で重要です。様々な方法で、学生の進捗状況を把握する機会を作り、学生にフィードバックする仕組みをつくりましょう。

単位取得状況の確認について、学生に自覚をうながす

学生の学習歴がわかるような資料を他の教員に提供する

学習に関する調査結果の反映方法について検討する

調査・分析方法に関する基本的な知識を習得する

33

提案 5

◆ **学習に専念する時間を大切にさせる**

時間を有効に活用することが、学生の学習成果を左右する重要な要素となります。効果的な学習時間の使い方を出来るだけ早く身につけさせるようにしましょう。

情報は要点を整理して提供する

公開研究会、休講情報などをカウンターの上などに貼り出すだけでなく、ネットや携帯電話で知らせる

授業時間外の学習に利用可能な学内施設の活用を促す

業務の進め方の事例集を作成して、職員間でも共有する

34

提案 6 浅香学長

◆ **学生に高い期待をよせる**

学生が期待しているよりも高い期待をよせることで、結果として学習効果は向上する可能性が高いのです。大学の構成員に互いにさわいし態度や行動を学生に求めましょう。

学生の勉学意欲や課外活動の努力に対し、応援の言葉をかける

学生の社会活動をサポートする

卒業生の活躍を積極的に学生に紹介する

学外の協力者に対する礼儀を学生に求める

35

提案 7 浅香学長

□ **学生の多様性を尊重する**

大学は様々な学習スタイルや個性をもった学生を受け入れることで活力を生み、こうした多様性を尊重することが求められます。個々の学生に対応する場合は、多様な立場を考慮しましょう。

窓口では個々の学生のおかれている立場や経験を考慮する

学生が抱える問題のないように応じて適切な機関や専門家を紹介する

留学生との異文化交流を希望する学生には、関連するプログラムやサークルなどを紹介する

社会人学生などの要望に対応できるように手続きや連絡方法を工夫する

様々な機会を捉えて、現在の学生の特徴や多様性を理解する

36

**学生に健康を守ることの大切さを教える**

□ 医療人になるためには健康の重要性をしっかりと認識する必要がある。そうでなければ他人の健康を守ることはできない。

□ 学生生活を健康に過ごせるよういくつかのアドバイスが必要。

□ バランスの取れた食生活、適度な運動、十分な睡眠が重要。

□ 喫煙は絶対に止めよう。

37



## 教職員の健康を守るために

- ❑ 北海道医療大学の保健センターは教職員の健康を守ります。
- ❑ 月曜日から金曜日まで毎日内科の医師が診療しています。
- ❑ 水曜日は心の健康についての診療を受けることができます。
- ❑ けがや骨折にも対応できます。
- ❑ 入院が必要な場合はすぐ対応できます。
- ❑ これだけの機能を持った保健センターは北海道医療大学のみです。



## レクチャー

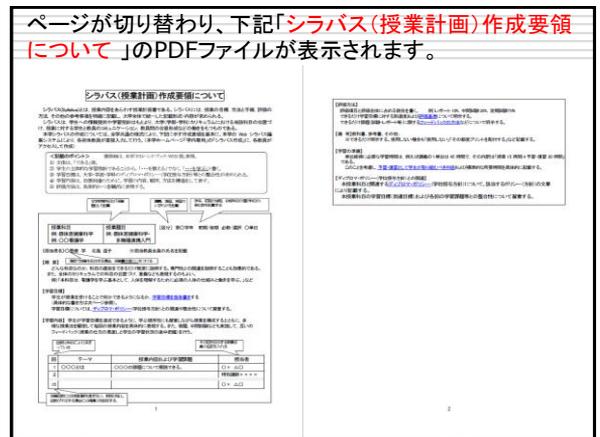
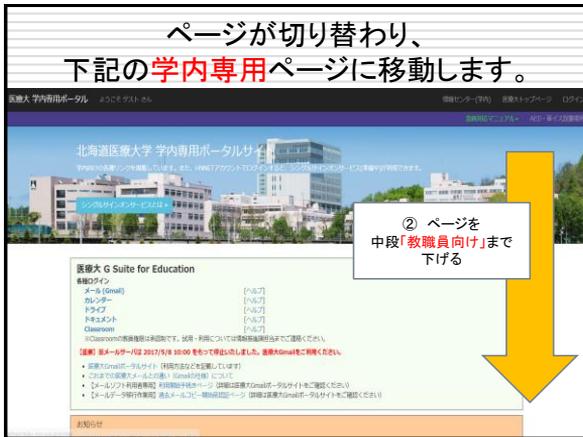
### 「シラバス（授業計画）について」

泉 剛  
北海道医療大学 薬学部教授

## FD支援サイトのご案内

---







## 授業計画(シラバス)の充実

学生に事前に提示する授業計画(シラバス)は、単なる講義概要(コースカタログ)にとどまることなく、学生が授業のため主体的に事前の準備や事後の展開などを行うことを可能にし、他の授業科目との関連性の説明などの記述を含み、授業の工程表として機能するよう作成されること。

文部科学省 中央教育審議会 答申(平成24年8月28日)

「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて

～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」(抜粋)

## ディプロマポリシー

各大学がその教育理念を踏まえ、どのような力を身に付ければ学位を授与するのかを定める基本的な方針であり、学生の学修成果の目標ともなるもの。

## カリキュラムポリシー

ディプロマ・ポリシーの達成のために、どのような教育課程を編成し、どのような教育内容・方法を実施するのかを定める基本的な方針

カリキュラム

シラバス

ディプロマポリシーを達成するために何を学び、どのような知識、技術を身につける必要があるか

## アドミッションポリシー

各大学が、当該大学・学部等の教育理念、ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシーに基づく教育内容等を踏まえ、入学者を受け入れるための基本的な方針であり、受け入れる学生に求める学習成果(学力の3要素※)を示すもの。  
※(1)知識・技能、(2)思考力・判断力、表現力等の能力、(3)主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度

## ディプロマポリシーとシラバス

- 当該授業科目が、ディプロマポリシーのどの部分を担うものであるかが明示され、それに従って当該授業科目の学習・到達目標が設定される。
  - 各授業回における学習内容ならびに学習・到達目標は、当該授業科目の学習・到達目標との関係において設定される。
  - 当該授業科目の評価項目は、その到達目標にもとづいて設定され、その評価は到達目標に対する到達度の測定にもとづき行われることを基本とする。
- ※学部のディプロマポリシーから授業科目の各回の学習目標等は系統立てて繋がっていなければならない

## 留意点

- ① 準備学習(予習・復習等)の具体的内容およびそれに必要な時間
- ② 授業における学修の到達目標および成績評価の方法・基準
- ③ ディプロマ・ポリシー(学位授与方針)と当該授業科目の関連
- ④ 課題(試験やレポート等)に対するフィードバックを行うこと

多職種連携	多職種連携
<p>【目的】</p> <p>本学が掲げる「社会貢献」の理念を践行し、地域社会の発展に貢献し、社会の持続可能な発展に貢献することを目指す。このために、本学が持つ「多職種連携」の力を活用し、社会の課題を解決し、社会の発展に貢献することを目指す。</p> <p>【内容】</p> <p>1. 地域社会の課題を把握し、その解決に向けた取り組みを行う。</p> <p>2. 地域社会の課題を解決するために、本学が持つ「多職種連携」の力を活用し、社会の課題を解決し、社会の発展に貢献することを目指す。</p> <p>3. 地域社会の課題を解決するために、本学が持つ「多職種連携」の力を活用し、社会の課題を解決し、社会の発展に貢献することを目指す。</p>	<p>【目的】</p> <p>本学が掲げる「社会貢献」の理念を践行し、地域社会の発展に貢献し、社会の持続可能な発展に貢献することを目指す。このために、本学が持つ「多職種連携」の力を活用し、社会の課題を解決し、社会の発展に貢献することを目指す。</p> <p>【内容】</p> <p>1. 地域社会の課題を把握し、その解決に向けた取り組みを行う。</p> <p>2. 地域社会の課題を解決するために、本学が持つ「多職種連携」の力を活用し、社会の課題を解決し、社会の発展に貢献することを目指す。</p> <p>3. 地域社会の課題を解決するために、本学が持つ「多職種連携」の力を活用し、社会の課題を解決し、社会の発展に貢献することを目指す。</p>

## 一般目標

### (General Instruction Objective:GIO)

- 1) 学習者を主語として書く。
- 2) 学習経験の結果、いかなることができるようになるかを表す動詞を含む文章で書く。
- 3) 知識、技能の学習がなぜ重要か＝それらが将来どのように利用されるか、それによって学習者のニーズがどのように満たされるかを明らかにする。(目的をいれる＝……するために)
- 4) 複雑な概念をもつ動詞、総括的な概念をもつ動詞をもちいて表す。  
動詞:知る 認識する 理解する 感ずる 判断する 価値を認める  
評価する 位置付ける 考察する 使用する 実施する 適用する  
示す 創造する 身につける
- 5) 必要な目標分類(認知・態度・技能)を総括的に含める
- 6) ……のためにを前文にまとめてよい。

## 一般目標で使う動詞

知る 認識する 理解する 感ずる 判断する  
 価値を認める 評価する 位置づける 示す  
 考察する 使用する 実施する 適用する  
 創造する 身につける

## 行動目標

### (Specific Behavioral Objectives: SBO)

学習単位の一般目標を達成するためにどのようなことができるとよいかを具体的な言葉で書く。

- 1) 学習者を主語として書く。
- 2) 動詞を含む文章とする。
- 3) 理解するのような概念的言葉でなく、観察可能な行動を具体的に表す。  
 試験(成績評価)を想定するとよい。
- 4) 一般目標と関連していること  
 ひとつの一般目標に対して、数個から10数個の行動目標が設定される。
- 5) 到達レベルを書く
- 6) 認知、態度、技能をわけて書く。全体がバランスよく含まれるようにする。

## 行動目標で使う動詞

### □ 認知領域 (知識の領域)

列記する 列挙する 述べる 具体的に述べる 説明する 分類する 比較する  
 対比する 類別する 関係づける 解釈する 予測する 選択する 同定する  
 弁別する 推論する 予測する 公式化する 一般化する 使用する 応用する  
 適用する 演繹する 結論する 批判する 評価する

### □ 情意領域 (態度・習慣の領域)

行う 尋ねる 助ける コミュニケートする 寄与する  
 協調する 示す 見せる 表現する 始める 相互に作用する 系統立てる  
 参加する 反応する 応える

### □ 精神運動領域 (技能の領域)

感ずる 始める 模倣する 熟練する 工夫する 実施する 行う 創造する 操作する  
 動かす 手術する 触れる 触診する 調べる 準備する 測定する

## 集合写真を撮ります！



## 昼食・休憩

お茶があります。



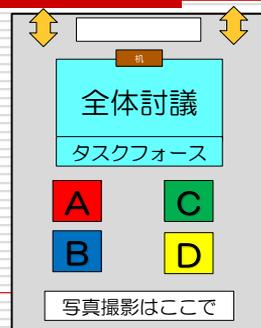
次のワークショップの開始 **12:40**  
 (時間厳守)

**12:35** までに、  
 お集まりください。

2019年度 全学FD研修 (基本編)  
 2019年4月4日 (木) 当別キャンパス 中央講義棟 C52 講義室  
 主催: 全学FD委員会

グループの場所にお座り下さい。

・お茶は自由でいいです



## セッションの流れ

進行/長谷川委員

- 12:40-12:50 全学FD委員の自己紹介  
(1分×11)
- 12:50-13:35 グループづくり  
アイスブレイキング(参加者自己紹介)  
役割分担、グループ名
- 13:35-13:40 休憩
- 13:40-15:30 ワークショップ  
...

# 作業解説



## アイスブレイキング

担当/遠藤(泰)副委員長

アイスブレイキングとは、初対面の人同士が会える時、その緊張(アイス)をとほぐす(ブレイキング)ための手法。

集まった人を和ませ、コミュニケーションをとりやすい雰囲気を作り、そこに集まった目的の達成に積極的に関わってもらえるよう働きかける技術を指す。

アイスブレイクは自己紹介をしたり、簡単なゲームをしたりすることが多く、いくつかのワークやゲームの活動時間全体を指すこともある。

(Wikipedia)

## ウソ?ホント?①

グループ単位で行います。  
配布したシートに、自分の所属学部・氏名と、自分について知ってもらいたいことを3つ記入して下さい。ただし、3つのうちの1つは全くのウソを書き入れて下さい。(3分)

(例) わたしはとてもきれい好きです。  
わたしは辛い食べ物が苦手です。  
わたしは15歳までハワイに住んでいました。

あまりシリアスなウソは避けましょう。

## ウソ?ホント?②

グループ内で一人ずつ自分の書いたものについて発表します。

他のメンバーは3つの中からウソだと思う内容を考えながら話を聞きます。その後自由に質問をして下さい(2分)。

講師が合図をしたら、メンバーはどれがウソだと思ったか話して下さい。全員の意見を聞き終わったら、発表者はどれがウソだったのを話します(2分)

一人ずつ順番に行います。

それでは今から3分間、自己紹介用シートを書く時間です。

発表順を決めましょう。

「自己紹介と質問タイム」です。こちらで合図をしたら始めて下さい(2分間)。

「正解タイム」に入りましょう。メンバー全員の意見を聞いた後、本人は正解を言って下さい。それではどうぞ!(2分間)

「ウソ?ホント?」の前と後で、メンバーの関係を比べてみましょう。

お互いの関係は変化しましたか?

休憩



ワークショップの開始 **13:40**

(時間厳守)

**13:38** までに、  
当会場へお集まりください。

13:40

## ワークショップ解説

## ワークショップのすすめ方

担当/長谷川委員

質問です。

ワークショップは初めて?

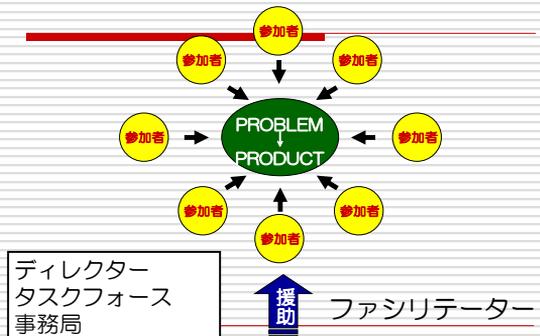


## ワークショップ



- 多人数を対象として参加者1人1人の参画意識を高めるために、小グループに分かれて討論と作業を行い、結論を出していく方式をいう。
- 一定の時間内にある成果(プロダクト)を生み出すという手段をとる。

## ワークショップとは?



## ワークショップの流れ



1. プレナリーセッション  
全体 : 課題提示・作業解説



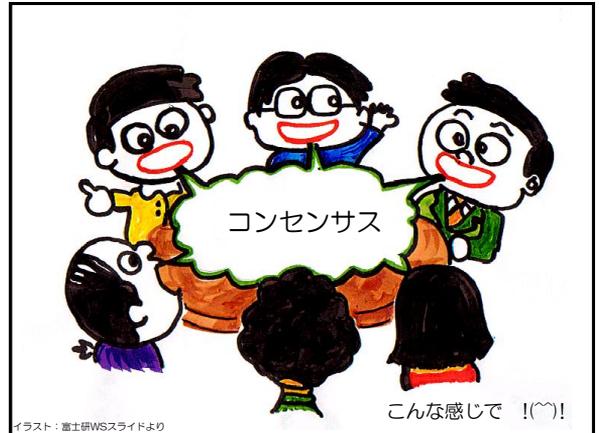
2. スモールグループディスカッション  
グループ : 課題について討論・プロダクト作成



3. プレゼンテーション  
全体 : 発表・討論

## ワークショップの要件

1. 全てのメンバーが積極的な参加者になる
2. 参加者全員が Resource Person
3. 積極的に建設的、前向きな意見を述べる
4. どんな質問でも無意味ではない
5. あらかじめ決まった正解はない
6. 先生はいない
7. 開始時刻、発表時間を守る



## 役割



- 司会
    - グループ討論時の司会進行を行う。
  - 書記・PC入力
    - グループ討論時の書記 (PC入力) を行う (プロダクト作成)
    - 作成したプロダクトはUSBに保存する。
  - 発表者
    - 全体発表時にグループプロダクトの発表を行う。
- 
- タスクフォース (TF)
    - グループ討論が効率的に討論・作業が進むように、サポートをする。
    - グループ討論のタイムキーパーも行う

## 役割分担をご確認ください。

セッション	司会	書記・PC	発表者
1	●●	▲▲	■■
2	■■	●●	▲▲
3	▲▲	■■	●●

# 作業解説



## ワークショップ:北海道医療大学の ユニバーシティ・アイデンティティについて考える

### 作業:大学をアピールできる材料を作成する

- ・高校生、あるいは新規入学者に、本学のユニバーシティ・アイデンティティとなるものを提示する。
- ・本学のアドミッション・ポリシーについてわかりやすく説明する。
- ・本学の良さ、特長をアピールする。

## ワークショップ:北海道医療大学の ユニバーシティ・アイデンティティについて考える

媒体はなんでも構いません。  
ポスター、ホームページ、パンフレットなど

大学のユニバーシティ・アイデンティティを  
アピールするために、自分は何をするのか、  
何をすべきなのかを考えて下さい。

記録は、USBのファイル（ワード）に

## ワークショップ:北海道医療大学の ユニバーシティ・アイデンティティについて考える

グループ討論 (SGD) 110分

休憩 15:30~15:40

全体発表 (15:40~16:00)  
20分 (発表・質疑 5分  
× 4グループ)

全体討論 30分

## 休憩



グループ発表の開始: **15:40**

(時間厳守)

**15:38** までに、  
当会場へお集まりください。

## グループ発表

ワークショップ:北海道医療大学の  
ユニバーシティ・アイデンティティについて考える

---

全体発表 (15:40~16:00)  
20分 (発表・質疑5分  
× 4グループ)

全体討論 30分

---

# アンケート

---

## 研修の評価

(総合ポストアンケート)

皆さんの感想をお聞かせください。  
書き終わった方は、手を上げてください。

---

2019年度 全学FD研修  
(基本編)

---

# 「閉会式」

修了証授与



全学FD委員会

## 講 話

医療系総合大学教員としての使命と目標

- 新医療人育成の北の拠点を目指して -

# 北海道医療大学

## 医療系総合大学教員としての使命と目標

- 新医療人育成の北の拠点を目指して -



## 北海道医療大学の校章



二つのH: 北海道(Hokkaido)とHealth Sciences Univ. of Hokkaido  
上昇するカーブ: 基礎から応用へ、星はそれを導く光



## 北海道医療大学の沿革

- 1972 学校法人東日本学園大学設立
- 1974 薬学部
- 1978 歯学部
- 1985 教養部校舎当別移転・統合



開設時の音別校舎

## 北海道医療大学キャンパス

- 1990 札幌医療福祉専門学校開設(2004 閉校)
- 1993 看護福祉学部開設
- 1994 東日本学園大学より北海道医療大学へ名称変更
- 2002 心理科学部開設
- 2013 リハビリテーション科学部
- 2019 医療技術学部



あいの里キャンパス

当別キャンパス

## 北海道医療大学の理念・目標

**建学の理念 (1974)**

「知育・徳育・体育」の三位一体による  
医療人としての全人格の完成

**教育理念 (1993, 1998)**

生命の尊重と個人の尊厳  
保健・医療・福祉の連携統合  
人間性豊かな専門職業人の養成  
地域・国際社会への貢献

**教育目標 (1993, 1998)**

幅広く深い教養と豊かな人間性の涵養  
確かな専門の知識及び技術の修得  
自主性・創造性および協調性の確立  
地域社会ならびに国際社会への貢献

各学部・学科の教育理念

↓

各学部・学科の教育目的

↓

各学部・学科の教育目標

## 各学部・学科の教育理念・目的・目標

**看護福祉学部・看護学科**

**<教育理念>**  
本学の教育理念を基本として、看護と福祉の連携・統合をめざす創造的な教育を推進し、総合的なヒューマンケアを担う看護専門職業人を養成することにより、地域社会や人々の健康の向上に貢献することを看護学科の教育理念とする。

**<教育目的>**  
人々の健康と福祉の向上のために、看護と福祉を総合的に俯瞰した専門的知識・技術を修得し、人々の尊厳を守り、維持するための総合的ヒューマンケアを実践できる看護専門職人を養成する。

**<教育目標>**

1. ヒューマンケアに関する深い教養および豊かな人間性の涵養
2. ヒューマンケアを基本とした看護専門職に必要な知識・技術の修得
3. 看護専門領域における自律的・創造的な実践力の涵養
4. ヒューマンサービスに関連する領域の人々と連携できる協調性の確立
5. 地域社会や人々の多様性を甘受できる能力の涵養

**看護福祉学部・臨床福祉学科**

**<教育理念>**  
本学の教育理念を基本として、看護と福祉の連携・統合をめざす創造的な教育を推進し、総合的なヒューマンケアを担う福祉専門職業人を養成することにより、地域社会や人々の健康の向上に貢献することを臨床福祉学科の教育理念とする。

**<教育目的>**  
人々の健康と福祉の向上のために、看護と福祉を総合的に俯瞰した専門的知識・技術を修得し、人々の尊厳を守り、維持するための総合的ヒューマンケアを実践できる福祉専門職人を養成する。

**<教育目標>**

1. ヒューマンケアに関する深い教養および豊かな人間性の涵養
2. ヒューマンケアを基本とした福祉専門職に必要な知識・技術の修得
3. 福祉専門領域における自律的・創造的な実践力の涵養
4. ヒューマンサービスに関連する領域の人々と連携できる協調性の確立
5. 地域社会や人々の多様性を甘受できる能力の涵養

# 北海道医療大学の行動指針と三方針

## 行動指針

### -21世紀の新しい健康科学の構築-

- ★ 社会と共生・協働する開かれた大学
- ★ 組織として自律性・透明性を高め、構成員は自主性・創造性を発揮
- ★ 学生中心の教育と患者中心の医療

## 教育に関わる三方針

本学全体の教育の基本三方針を基に、各学部・学科で設定されている

- ★ 入学者受け入れの方針 (アドミッション・ポリシー)  
本学の入学に必要な、学力、能力、意欲、意欲を有しているか
- ★ 教育課程編成・実施方針 (カリキュラム・ポリシー)  
理念・目標に基づいて編成される教育プログラム(カリキュラム)
- ★ 学位授与の方針 (ディプロマ・ポリシー)  
本学の学修を通じ、卒業時まで習得すべき能力

# 本学の教育に関わる三方針

## 入学者受け入れの方針 (アドミッション・ポリシー)

北海道医療大学は、「21世紀の新しい健康科学の構築」を追究し、社会の要請と期待に応えるため、保健と医療と福祉に関する高度の研究に裏打ちされた良質な教育を行います。その教育を通して、チーム医療をはじめ地域社会や国際社会に貢献できる自立した専門職業人を育成することを目標としています。

そのため、本学では次のような人材を広く求めています。

1. 入学後の修学に必要な基礎的学力を有していること。
2. 協調性や基礎的コミュニケーション能力を有していること。
3. 生命を尊重し、他者を大切に思う心があること。
4. 保健・医療・福祉に関心があり、地域社会ならびに人類の幸福に貢献するという目的意識を持っていること。
5. 生涯にわたって学習を継続し、自己を磨く意欲を持っていること。

## 教育課程編成・実施の方針 (カリキュラム・ポリシー)

北海道医療大学は、「保健と医療と福祉の連携・統合」めざす教育理念を基本として、広く社会に貢献できる確かな知識・技術と幅広く深い教養を身につけた人間性豊かな専門職業人を育成するために、「全学教育科目」と各学部・学科の「専門教育科目」からなる学士課程教育を編成しています。

## 学位授与の方針 (ディプロマ・ポリシー)

北海道医療大学は、各学部・学科の教育理念・目標に沿った学士課程の授業科目を履修し、保健・医療・福祉の高度化・専門化に対応する高い技術と知識、優れた判断力と教養を身につけ、かつ各学部が定める履修上の条件を満たした大学生に附して「学士」の学位を授与します。

# 各学部・学科の教育の基本方針

## 教育の基本方針 薬学部・薬学科

### 【入学資格の方針 (アドミッション・ポリシー)】

本学薬学部は保健系の方針に定める入学資格を基に、全学を貫いて、薬学部専攻のアドミッション・ポリシーに基づき、入学を志す学生に求めるべき条件を定めています。また、チーム医療の高度化を推進する教育プログラムを定めています。本学で専攻のアドミッション・ポリシーが定まるまでこのプログラムを参照します。その教育課程の編成・実施・評価の針を以下に示します。

1. 医師として求められる高い倫理観を有し、患者を思いやる豊かな人間性を有する。
2. 多職種が連携するチーム医療に貢献し、地域及び国際的視野を持つ国際としてふさわしい教養・知識・技能を有する。
3. 多職種連携の推進を推進し、医療の現場に必要とする知識と、チーム医療に貢献する知識・技能を有する。
4. 生涯学習の意欲をもち、生涯にわたって学び続ける姿勢と意欲を有する。

### 【教育課程編成・実施の方針 (カリキュラム・ポリシー)】

本学薬学部は保健系の方針に定める入学資格を基に、全学を貫いて、薬学部専攻のアドミッション・ポリシーに基づき、入学を志す学生に求めるべき条件を定めています。また、チーム医療の高度化を推進する教育プログラムを定めています。本学で専攻のアドミッション・ポリシーが定まるまでこのプログラムを参照します。その教育課程の編成・実施・評価の針を以下に示します。

1. 高い倫理観と豊かな人間性をもつ専門職業人を育成するため、倫理や法規制に関連する科目ならびにグループ学習を多用したコミュニケーション教育科目を履修する。
2. 薬学専門教育においての基礎的学力と専門性として本学プログラムを修得するに必要とする。また、基礎医学領域から社会医学領域、衛生学・疫学、薬理学領域へと横断的連携を促す目的で専攻であるよう、専門教育科目を中心とした教育プログラムを履修する。
3. 社会貢献の高度化を推進し、国際的視野を有する専門職業人を育成し、チーム医療の高度化を推進する。また、基礎医学教育を推進し、4年次までに修得した知識・技術・態度を基礎医学で実践し、基礎医学及び国際的視野を持つ国際として必要な基礎的・応用的能力を育成する。
4. 卒業から：卒業後における基礎的学力と専門性として本学プログラムを修得するに必要とする。また、基礎医学領域から社会医学領域、衛生学・疫学、薬理学領域へと横断的連携を促す目的で専攻であるよう、専門教育科目を中心とした教育プログラムを履修する。
5. 社会貢献の高度化を推進し、国際的視野を有する専門職業人を育成し、チーム医療の高度化を推進する。また、基礎医学教育を推進し、4年次までに修得した知識・技術・態度を基礎医学で実践し、基礎医学及び国際的視野を持つ国際として必要な基礎的・応用的能力を育成する。
6. 卒業後における基礎的学力と専門性として本学プログラムを修得するに必要とする。また、基礎医学領域から社会医学領域、衛生学・疫学、薬理学領域へと横断的連携を促す目的で専攻であるよう、専門教育科目を中心とした教育プログラムを履修する。

### 【学位授与の方針 (ディプロマ・ポリシー)】

本学薬学部は、「保健系の方針」の条件を参照し、チーム医療を推進する教育プログラムを定めています。本学で専攻のアドミッション・ポリシーが定まるまでこのプログラムを参照します。その教育課程の編成・実施・評価の針を以下に示します。

1. 倫理・法規・社会貢献に必要とする知識・技能を有する。
2. 生命を尊重し、他者を大切に思う心がある。
3. 多職種連携の推進を推進し、医療の現場に必要とする知識と、チーム医療に貢献する知識・技能を有する。
4. 生涯学習の意欲をもち、生涯にわたって学び続ける姿勢と意欲を有する。
5. 高い倫理観と豊かな人間性をもつ専門職業人を育成するため、倫理や法規制に関連する科目ならびにグループ学習を多用したコミュニケーション教育科目を履修する。
6. 薬学専門の領域に高い関心と意欲をもち、基礎的知識・技術を身に付けようとする人

# 北海道医療大学校歌について質問

本学の校歌の歌いだしは

見はるかす 海のかがやき  
紺青の世界の風に

海はどれを指すのでしょうか

- 1 大平洋
- 2 日本海
- 3 オホーツク海
- 4 東シナ海
- 5 北極海

# 高等教育の変遷と現状

## 大学の危機的要因

1. 近過去 (1960後半～) : 学園紛争
2. 現在 (2009～令和) : 少子化、グローバル化
3. 現在～未来 (～2040) : 18歳人口の劇的な減衰

入学者の確保  
高大接続・入試改革

## 大学進学率の変化

1. エリート型大学教育 (～15%)
2. マス型大学教育 (15～50%) : 知識・技能の伝達
3. ユニバーサル型 (50%～) : 新規、広範な経験の提供

充実した教育  
プログラムの提供

## 大学の機能分化

- 1 世界的な研究・教育拠点
- 2 高度専門職業人の養成
- 3 幅広い職業人の養成
- 4 総合的な教養教育
- 5 特定の専門的分野 (芸術・体育等) の教育・研究
- 6 地域の生涯学習推進の拠点
- 7 社会貢献 (地域貢献、産学官連携、国際交流等)

大学のミッションの明確化  
社会の中堅として地域社会  
を支え、活躍する職業人の養成

# 望まれる大学としての具体的なイメージ

## 特色のある大学

他大学にない特徴・魅力をもつ大学 (外から見える形にして示す)

## 選ばれる大学

優秀な意欲をもつ教員がいる (内部での正しい評価を行うこと)  
社会に信頼される卒業生を送り出せる  
国家試験、資格試験の合格率高い  
社会貢献度が高い  
教育面、学生生活面などで親が安心してまかせられる  
補習教育、フォローアップ体制がある  
キャンパスハラスメント対策をもち、それが機能している  
アメニティが充実し、健康管理が行き届いている

## 大学改革

- ① **大学の質の向上、教育内容・教育方法の充実**  
基準認定制度 (educational accreditation) による大学評価  
教養教育 (liberal arts) と専門教育の有機的な連携の確保
- ② **教員の自己評価と学生の評価 客観性のある学習意欲を促す評価**  
有能な教員の確保  
学生評価への真摯な対応 (GPA **Grade Point Average** 等の導入)
- ③ **大学間の競合と協調 (大学の機能別分化)**  
単なる競合ではなく、各大学の特殊性・特異性を認識した上で協調を  
図り、学生中心の教育を行い、社会に必要な人材 (21世紀型市民) を育  
成する
- ④ **充実した学生生活の確保と学生の健康管理**

13

## 大学評価 (認定) Educational Accreditation

— 我国における大学の質的向上、教育の質的保障を図る —

米国にあるDiploma MillやDegree Millなど学位販売組織との差別化  
(日本でも50大学? インターネットの普及によってより顕在化)

日本では、大学基準協会、高等教育評価機構による大学評価  
社会に対し、大学の質を保証し、さらなる教育の向上を促す制度

- 1 達成度評価と水準評価
- 2 専門分野別評価と全学的事項評価の総合的評価
- 3 改善報告書の評価 (中間評価)
- 4 同僚評価 (ピアレビュー) の重視




大学自己評価を基に上記団体の評価を受ける

教員評価  
教育力向上  
Faculty Development (FD) and Staff Development (SD)

本学では2018年度に4回目の評価を受け、適合認定を受けた  
(1997, 2004, 2011, 2018)

2004年より7年周期以内での認証評価が義務化されている

14

## 日本の大学の財政的問題

- ☆ ヨーロッパの高等教育機関はほとんどが国公(州)立  
アメリカでも約75%が州立
- ☆ 日本は80%が私立 (世界の中で特異) であり学納金への  
依存性(本学は67%)が先進諸国のなかで例外的に高い
- ☆ GNP比でみると、高等教育への公的(政府)支出は先  
進国の1/2以下 (天野郁夫: 大学改革の社会学)
- ☆ 学納金に見合った大学側の対応が必要 (学生中心の教育)  
大学の財政の健全化 (学納金、補助金\*、科研費・寄付金等)



学生満足度の高い教育の提供

\* 国立大学は、東大81.0億円、京大65.41億円、北海道大36.3億円と桁違いに多い。北海道教育大は6.5億円  
旭川医大でも5.4億円給付されている。本学は1.0億に満たない。

15

## 進学目的・入学後の学習意欲

### 進学動機

<b>将来目標型</b>	<b>48%</b>
一般教養を身につけたい	11%
専門知識を学びたい	57%
学問・研究による真理探究	19%
<b>近未来目標型</b>	<b>35%</b>
資格免許取得、就職に有利	51%
学歴	12%
<b>楽しみ・無目的型</b>	<b>18%</b>
とくに目的はない	12%
青春をエンジョイ	12%
スポーツ・文化活動	4%
友人を得る	4%

### 大学に入って学習意欲が高まったか?

<b>高まった</b>	<b>13%</b>
かなり高まった	3%
<b>低くなった</b>	<b>37%</b>
かなり低くなった	21%
<b>わからない</b>	<b>26%</b>

16

## 本学における学生教育活動への対応

- 1 **教育の質の向上と、教育内容・方法の充実**
  - 2007年4月 大学教育の総合的検討・立案・実行する「大学教育開発センター」(2019年より全学教育推進センターへ改組) 設置
- 2 **教員の自己評価と学生の評価**
  - 教員評価制度 (2007年から実施) と評価結果の利用
  - 学生による授業アンケート (1993年度から実施)
- 3 **大学間の協調と連携**
  - 日本体育大学、札幌医大との包括連携
  - 三大学連携 (2019年から実施 本学、千歳科学技術大学、札幌医大)
- 4 **充実した学生生活の確保**
  - Student Campus Presidents (SCP) の導入 (2008年度から実施)
  - 語学・文化研修 (カナダ アルバータ大学)

17

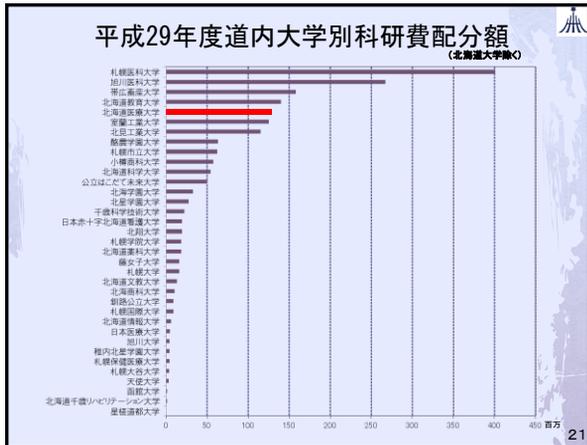
## 学生数と教員数

(2018年5月1日現在)

	学部	大学院	教員	S/T比
薬学部	1,045	13	66	15.8
歯学部	430	53	134	3.2
看護福祉学部	681	61	70	9.7
心理科学部	292	28	19	15.4
リハビリテーション科学部	801	15	53	15.1
医療技術学部 (設置準備室)	-	-	8	
<b>計</b>	<b>3,249</b>	<b>171</b>	<b>313</b>	<b>10.4</b>
予防医療科学センター				12
健康科学研究所				2
がん予防研究所				1
国際交流センター				1
認定看護師研修センター				4
客員教授				25
臨床・任期制助手/ 研修医				89
歯学部附属歯科衛生士専門学校	95			6
<b>合計</b>	<b>3,673</b>		<b>467</b>	

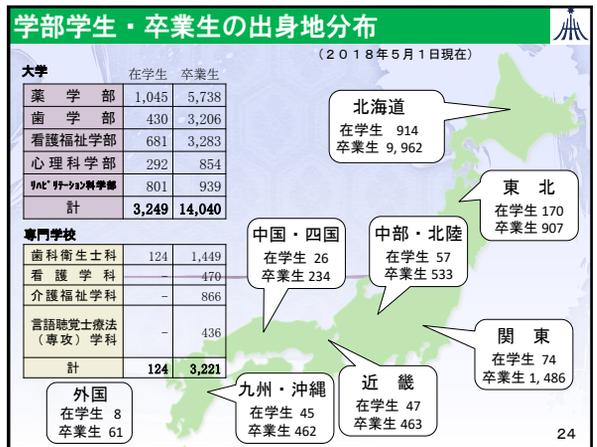
全国私立大学  
教員一人当たり  
学部学生数  
平均19.9名  
(2016学校基本調査)

18



### 国家試験の合格率を上げる

- ◆ 入り口対策
  - 入試の際、優秀な学生を集める。
  - 医療大学のブランド性を上昇させる。
  - 国試の合格率が高い。
  - 特別な教育体制を構築する。
  - 北海道だけでなく、全国から受験生を集める。
- ◆ 出口対策
  - 国試対策をきめ細かく行う。
  - 優秀大学の教育システムを学び応用する。
  - 魅力的な授業を行う。



## 今年度の本学入学生

学部	入学定員	入学者 (2019)	過去平均(3年間)
薬学部	160	165	170
歯学部	80	83	65
看護福祉学部	看護	100	120
	福祉	80	47
心理科学部	75	75	69
リハビリテーション科学部	理学	80	91
	作業	40	49
	言語	60	64
小計	675	683	675
医療技術学部	60	72	-
計	735	755	-
歯科衛生士専門学校	50	20	32

25

## 本学通学環境に関する問題

本学の通学生は、概ね札幌市と当別町に居住しています。  
当別町に居住している学生はおおよそ何名でしょうか。

- 1 200 名
- 2 500 名
- 3 1000 名
- 4 1500 名
- 5 2000 名

JR 学園都市「札幌駅—北海道医療大学駅」の1日の往復便は何本でしょうか。

- 1 20 本
- 2 30 本
- 3 40 本
- 4 50 本
- 5 60 本

26

## 学長よりの提言

— 新医療人育成の北の拠点を目指して —



27

## 新医療人育成のために備えるべき条件

(松田一郎 元学長より)

- (1) 専門医療職能人としての国家資格・認定資格の取得
- (2) 新時代にふさわしい教育
- (3) 新時代にふさわしい研究テーマ
- (4) 新しい視点に基づく医療実践力
- (5) 個体差健康科学に基づきチーム医療（多職種連携）を担う人材の養成

### 社会的使命に基づく教育方針の徹底

学生中心の教育  
学生多様化への対応  
本学ブランドの強化  
研究から教育・地域貢献へ  
アメニティの充実・改善

28

## より良き教育へ向けて

(新川詔夫 前学長)

- ・ 学生が教職員と接する機会を増やす
- ・ 学生間で協力して行う学習を支援する
- ・ 学生の主体的な学習を支援する
- ・ 学習の進み具合をふりかえらせる
- ・ 学習に専念する時間を大切にさせる
- ・ 学生に高い期待をよせる
- ・ 学生の多様性を尊重する

29

## 提案 1

浅香学長

### ◆ 学生が教職員と接する機会を増やす

集団の中の一人として見なされるよりも、個人として見なされるときの方が、学生は大学や授業に対する帰属意識や学習に対する責任感を強く持つ傾向があります。

窓口に学生が来たらすすんで声をかける  
学生の名前をできるだけ覚えるようにする  
学生が立ち寄りやすい環境をととのえる  
講演会など学内のイベントに積極的に加わらせる  
学生や職員が集う会に、一緒に参加する  
キャンパスの構成員として積極的に学園祭に参加する

30

**提案 2** 浅香学長

◆ **学生間で協力して行う学習を支援する**

**仲間と協力して行う学習は、学習の意欲を高め、学習効果も高いといわれています。教室内外で学生同士で共に学習活動することができるように環境を整備しましょう。**

学生がグループで学習できる場所と利用方法などを把握し、アドバイスする

大学に現れなくなった学生に気付いたら、他の学生にさり気なく様子を尋ねてみる

身近な学生による学習サークルを支援する

普段から学内の教職員と連携し、さらに学外の教職員とも情報交換をする場をもつ

31

**提案 3** 浅香学長

◆ **学生の主体的な学習を支援する**

**大学教育においては、主体的に学習する姿勢を身につけさせることが重要です。様々な教室外活動も学生の主体的な学習活動の貴重な機会になります。こうした自主的な機会を得つことで、自立性、目的意識、論理観などが培われます。**

各種研究会、ボランティア活動などの情報を積極的に学生に伝える

学生から個別に受けた質問に適切に対処すると共に、普遍性の高いものについては、ガイダンスなどの情報提供に活用する

窓口での対応などを通じて、学生に社会人・医療人としてのマナーを教える

32

**提案 4** 浅香学長

◆ **学習の進み具合をふりかえらせる**

**学生にとって学習目標に到達しているかどうかを確認することは、その後の学習を進める上で重要です。様々な方法で、学生の進捗状況を把握する機会を作り、学生にフィードバックする仕組みをつくりましょう。**

単位取得状況の確認について、学生に自覚をうながす

学生の学習歴がわかるような資料を他の教員に提供する

学習に関する調査結果の反映方法について検討する

調査・分析方法に関する基本的な知識を習得する

33

**提案 5**

◆ **学習に専念する時間を大切にさせる**

**時間を有効に活用することが、学生の学習成果を左右する重要な要素となります。効果的な学習時間の使い方を出来るだけ早く身につけさせるようにしましょう。**

情報は要点を整理して提供する

公開研究会、休講情報などをカウンターの上などに貼り出すだけでなく、ネットや携帯電話で知らせる

授業時間外の学習に利用可能な学内施設の活用を促す

業務の進め方の事例集を作成して、職員間でも共有する

34

**提案 6** 浅香学長

◆ **学生に高い期待をよせる**

**学生は期待されているとわかったら、学ぶ意欲を高め、結果として学習効果は向上する可能性が高いのです。大学の構成員にふさわしい態度や行動を学生に求めましょう。**

学生の勉強意欲や課外活動の努力に対し、応援の言葉をかける

学生の社会活動をサポートする

卒業生の活躍を積極的に学生に紹介する

学外の協力者に対する礼儀を学生に求める

35

**提案 7** 浅香学長

◆ **学生の多様性を尊重する**

**大学は様々な学習スタイルや属性をもった学生を受け入れることで活力を生み、こうした多様性を尊重することが求められます。個々の学生に対応する場合は、多様な立場を考慮しましょう。**

窓口では個々の学生のおかれている立場や経験を考慮する

学生が抱える問題のないように応じて適切な機関や専門家を紹介する

留学生との異文化交流を希望する学生には、関連するプログラムやサークルなどを紹介する

社会人学生などの要望に対応できるように手続きや連絡方法を工夫する

様々な機会を捉えて、現在の学生の特徴や多様性を理解する

36

## 学生に健康を守ることの大切さを教える

- ◆ 医療人になるためには健康の重要性をしっかりと認識する必要がある。そうでなければ他人の健康を守ることはできない。
- ◆ 学生生活を健康に過ごせるよういくつかのアドバイスが必要。
- ◆ バランスの取れた食生活、適度な運動、十分な睡眠が重要。
- ◆ 喫煙は絶対に止めよう。

37



38

## 教職員の健康を守るために

- ◆ 北海道医療大学の保健センターは教職員の健康を守ります。
- ◆ 月曜日から金曜日まで毎日内科の医師が診療しています。
- ◆ 水曜日は心の健康についての診療を受けることができます。
- ◆ けがや骨折にも対応できます。
- ◆ 入院が必要な場合はすぐ対応できます。
- ◆ これだけの機能を持った保健センターは北海道医療大学のみです。

39



40

《 ㄨ ㄉ 》

# レクチャー

シラバス（授業計画）について

レクチャー

---

「シラバス（授業計画）について」

泉 剛  
北海道医療大学 薬学部教授

FD支援サイトのご案内

---

① ページを一番下まで下げる

URL: <http://www.hoku-iryo->

北海道医療大学ホームページ最下部  
学内専用をクリック

ページが切り替わり、  
下記の学内専用ページに移動します。

② ページを中段「教職員向け」まで下げる

教職員向け

③「FD活動」をクリックする

ページが切り替わり、下記の「FD活動」のページに移動します。

北海道医療大学 FD活動

「シラバス(授業計画)作成要領について」をクリック

ページが切り替わり、下記「シラバス(授業計画)作成要領について」のPDFファイルが表示されます。

シラバス(授業計画)作成要領について

青字になっている部分をクリックすると、該当する項目の補足説明を見ることができます。

シラバス(授業計画)作成要領について

例:「学習目標を箇条書きする」をクリックすると

「【学習目標】の補足説明」のページに移動し、確認することができます。

シラバス(授業計画)作成要領についての補足説明

【学習目標】の補足説明

学生が何を学びたいと期待できるようにするために、「一般目標」と「行動目標」を箇条書きで表現する。従来の教育では、目標は教育学の種類に従って、「一般目標」と「行動目標」を含む。「一般目標」は、広い文脈での学習成果を指し、「行動目標」は、特定の学習成果を指す。「行動目標」は、学習を具体的な行動と結びつけることで、学習の成果を測定し、評価する。なお、一般目標・行動目標は、専門用語であるため、「学習目標」として、両者をあわせて表現する。

【学習目標】を記載する際は、次の原則を踏まえる。

- 1) 「学習」を主語として書くが、主語は省略する。
- 2) 学習の結果を明らかにするために、「～のために、」を記載する。
- 3) 3の「一般目標」、いくつかの「行動目標」の順に記載する。

「一般目標」では、基礎的な概念を含む動詞を用いて表す(下表参照)。「行動目標」では、「理解する」のような概念的動詞でなく、学習によって得られる成果や観察可能な行動を具体的に表す。知識(成績評価)を想定するよう、以下に示す観察可能な動詞で、「知識」「態度・習慣」「技能」をバランスよく含めながら、到達レベルを表現する。

知	知る	認識する	理解する	感ずる	判断する	価値を認める	評価する	位置づける	示す	表現する	使用する	適用する	適用する
情	認識する	身に付ける											
行													
動													
目													
標													

# シラバス（授業計画） syllabus

## シラバスとは？

- 授業計画書  
授業という商品の説明をするカタログのようなもの  
何を買うか(受講するか)の選択基準
- 授業の目標、方法と手順、評価の方法を明記
- 学習指針、カリキュラムにおける科目の位置づけ、授業に対する学生と教員のコミュニケーション、教員同士の合意形成などの働き  
⇒全学で統一した記載方法

## 教育課程の体系化

大学、学部、学科の教育課程が全体としてどのような能力を育成し、どのような知識、技術、技能を修得させようとしているか、そのために個々の授業科目がどのように連携し関連し合うかが、あらかじめ明示されること。なお、大学として学位授与の方針に対して授業科目が過多であったり、科目の内容が過度に重なっている場合は、精選の上、体系化が行われる必要がある。〔後略〕

文部科学省 中央教育審議会 答申(平成24年8月28日)  
「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて  
～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」〔抜粋〕

## 授業計画(シラバス)の充実

学生に事前に提示する授業計画(シラバス)は、単なる講義概要(コースカタログ)にとどまることなく、学生が授業のため主体的に事前の準備や事後の展開などを行うことを可能にし、他の授業科目との関連性の説明などの記述を含み、授業の工程表として機能するよう作成されること。

文部科学省 中央教育審議会 答申(平成24年8月28日)  
「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて  
～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」〔抜粋〕

### ディプロマポリシー

各大学がその教育理念を踏まえ、どのような力を身に付ければ学位を授与するのかを定める基本的な方針であり、学生の学修成果の目標ともなるもの。

### カリキュラムポリシー

ディプロマ・ポリシーの達成のために、どのような教育課程を編成し、どのような教育内容・方法を実施するのかを定める基本的な方針

### カリキュラム

### シラバス

ディプロマポリシーを達成するために何を学び、どのような知識、技術を身につける必要があるか

### アドミッションポリシー

各大学が、当該大学・学部等の教育理念、ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシーに基づく教育内容等を踏まえ、入学者を受け入れるための基本的な方針であり、受け入れる学生に求める学習成果(学力の3要素※)を示すもの。

※(1)知識・技能、(2)思考力・判断力、表現力等の能力、(3)主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度

## ディプロマポリシーとシラバス

- 当該授業科目が、ディプロマポリシーのどの部分を担うものであるのかが明示され、それによって当該授業科目の学習・到達目標が設定される。
  - 各授業回における学習内容ならびに学習・到達目標は、当該授業科目の学習・到達目標との関係において設定される。
  - 当該授業科目の評価項目は、その到達目標にもとづいて設定され、その評価は到達目標に対する到達度の測定にもとづき行われることを基本とする。
- ※学部のディプロマポリシーから授業科目の各回の学習目標等は系統立てて繋がっていないといけない

## 留意点

- ① 準備学習(予習・復習等)の具体的な内容およびそれに必要な時間
- ② 授業における学修の到達目標および成績評価の方法・基準
- ③ ディプロマ・ポリシー(学位授与方針)と当該授業科目の関連
- ④ 課題(試験やレポート等)に対するフィードバックを行うこと

多職種連携 多職種連携

【講義】 講義 実習 演習 実習 演習

【目的】 本講義の目的は、多職種連携の重要性を認識し、各職種の役割を理解し、チームワークを構築することである。具体的には、多職種連携の意義、目的、方法、評価について学習し、実践的なスキルを習得することを目指す。

【到達目標】 本講義を修了した学生は、以下の目標を達成できると期待される。

1. 多職種連携の意義と目的を理解し、その重要性を認識できる。
2. 各職種の役割と責任を理解し、チームワークを構築できる。
3. 多職種連携の方法と評価方法を理解し、実践できる。
4. 多職種連携の課題を認識し、解決策を提案できる。

【授業内容】 本講義の授業内容は、以下の通りである。

授業内容	到達目標との関係	評価方法
1. 多職種連携の意義と目的	目標1の達成に貢献する。	授業参加、小テスト
2. 各職種の役割と責任	目標2の達成に貢献する。	グループワーク、ディスカッション
3. 多職種連携の方法と評価	目標3の達成に貢献する。	ケーススタディ、ロールプレイ
4. 多職種連携の課題と解決策	目標4の達成に貢献する。	グループワーク、ディスカッション

【参考文献】 本講義の参考文献は、以下の通りである。

【お問い合わせ】 本講義に関するお問い合わせは、以下の連絡先までお願いいたします。

## 一般目標

### (General Instruction Objective:GIO)

- 1) 学習者を主語として書く。
- 2) 学習経験の結果、いかなることができるようになるかを表す動詞を含む文章で書く。
- 3) 知識、技能の学習がなぜ重要か＝それらが将来どのように利用されるか それによって学習者のニーズがどのように満たされるかを明らかにする。(目的をいれる＝……するために)
- 4) 複雑な概念をもつ動詞、総括的な概念をもつ動詞をもちいて表す。  
動詞:知る 認識する 理解する 感ずる 判断する 価値を認める  
評価する 位置付ける 考察する 使用する 実施する 適用する  
示す 創造する 身につける
- 5) 必要な目標分類(認知・態度・技能)を総括的に含める
- 6) ……のために を前文にまとめてよい。

## 一般目標で使う動詞

知る 認識する 理解する 感ずる 判断する  
価値を認める 評価する 位置づける 示す  
考察する 使用する 実施する 適用する  
創造する 身につける

## 行動目標

### (Specific Behavioral Objectives: SBO)

学習単位の一般目標を達成するために どのようなことができるとよいかを具体的な言葉で書く。

- 1) 学習者を主語として書く。
- 2) 動詞を含む文章とする。
- 3) 理解する のような概念的言葉でなく、観察可能な行動を具体的に表す。  
試験(成績評価)を想定するとよい。
- 4) 一般目標と関連していること  
ひとつの一般目標に対して、数個から10数個の行動目標が設定される。
- 5) 到達レベルを書く
- 6) 認知、態度、技能をわけて書く。全体がバランスよく含まれるようにする。

## 行動目標で使う動詞

- 認知領域(知識の領域)  
列記する 列挙する 述べる 具体的に述べる 説明する 分類する 比較する  
対比する 類別する 関係づける 解釈する 予測する 選択する 同定する  
弁別する 推論する 予測する 公式化する一般化する 使用する 応用する  
適用する 演繹する 結論する 批判する 評価する
- 情意領域(態度・習慣の領域)  
行う 尋ねる 助ける コミュニケートする 寄与する  
協調する 示す 見せる 表現する 始める 相互に作用する 系統立てる  
参加する 反応する 応える
- 精神運動領域(技能の領域)  
感ずる 始める 模倣する 熟練する 工夫する 実施する 行う 創造する 操作する 動かす 手術する 触れる 触診する 調べる 準備する 測定する

# ワークショップ

北海道医療大学のユニバーシティ・アイデンティティについて考える

《 ㄨ ㄟ 》

ワークショップ  
プロダクト・感想

## A班の発表 高橋 啓太

### ユニバーシティ・アイデンティティ

- 多職種取り組みなどで医療全般にわたる学習可能
- キャンパス内部の紹介
- 国家試験合格率
- 教育リソースランキング
- 地域密着 医療大学の取り組んでいる事業
- 学生にとって住みよい環境の紹介
  
- 積極的な魅力の分析
  
- 宣伝の充実 (HP上で強調・電車の中吊り・飛行機・TVCM)

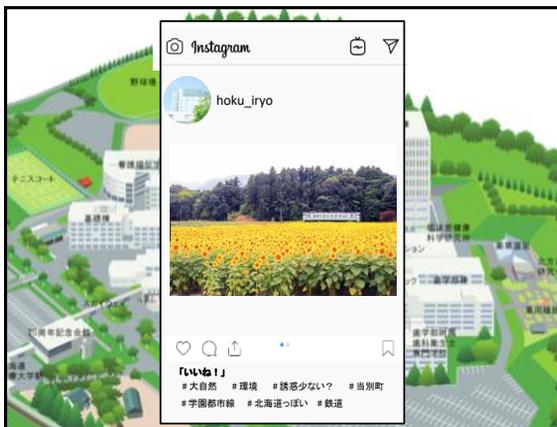
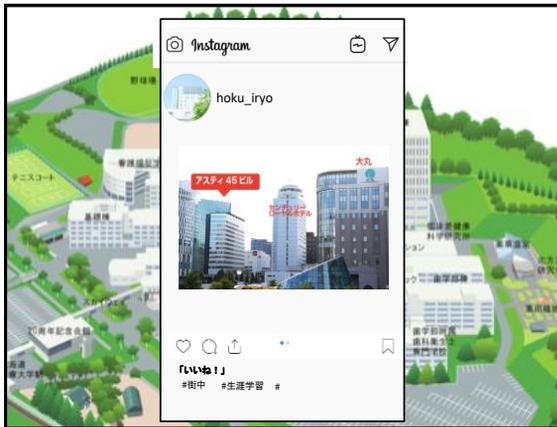
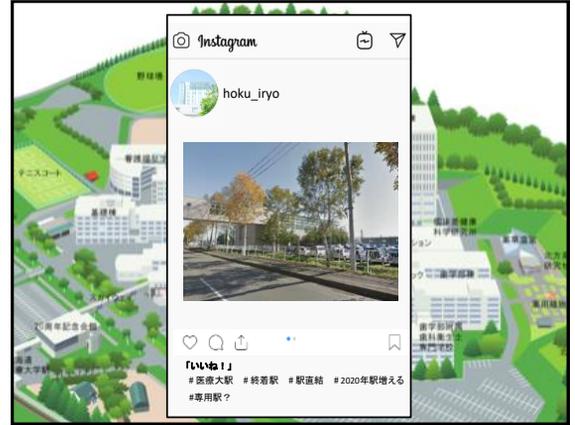
### アドミッション・ポリシー伝達方法

- HP閲覧を考慮し、もっと充実したHP作成
- 募集要項の充実
- 若い人の関心を引く手段を利用。(You Tube、動画作成でHPにリンク)
  
- オープンキャンパス
- 高校訪問

### 大学の良さをアピールする

- 学内での学生生活紹介
- クラブ活動
- 除雪のボランティア活動
- 植樹
- 親へのアピール
- 大学の取り組み、良さ紹介(夢つなぎ、編学)
  
- 学生からの発信を促す。(賞を贈呈)フォロワー数でランキング

B





## 北海道医療大学の ユニバーシティ・アイデンティティ について考える

Cグループ

対象・伝達方法

<説明対象者>

高校生(新規入学者)

<媒体>

1. ホームページ
2. SNS(YouTube・アプリ)
3. ラジオ

本学のアドミッション・ポリシー

1. 基礎学力がある
2. コミュニケーション能力・協調性がある
3. 生命を大切にし、他者に思いやりがある
4. 医療に関心があり、医療職につくことによってやりがいのある職に就くことができ、社会貢献ができる
5. 生涯勉強し、自分を成長させることができる

Cグループが考える  
ユニバーシティ・アイデンティティ

**医療系総合大学である**

アピールポイント

- 多職種連携を学べる
- 学部を越えた全学行事などの楽しさがある
- 教育体制がしっかりしている
- 合格率が高い
- 就職率が高い

まとめ

伝統に裏打ちされた医療系総合大学として、  
入学から卒業までの総合的な  
サポートが充実しています

## <アピールできること>

- **合格率が高い**
- 職種連携がとれる 情報をとりやすい 多く深く学べる
- **就職率が高い**
- **教育体制がしっかりしている** 色々学べる 他の大学より優れている
- 教育リソースが高い
- 自然が豊か 学びやすい環境←とおい？（マイナスかな？）
- 学際
- **学部を越えた全学で行う行事・部活動**
- **医療系総合大学**
- 色々な奨学金制度がある（夢つなぎ入試制度）
- 多職種連携について学ぶことができる
- 先輩に就職した後のことを聞ける
- 専門的視覚が取れる
- 伝統がある
- 居住環境（寮からバスが出ている）  
（1000人くらい当別町に住んでいる）
- 学部を越えて色々な友達ができる
- 海外留学ができる制度がある（語学研修等）単位が取得できる
- 国際交流
- 教育がしっかりしている  
合格率アップのための対策を各々がとっている
- 職業についてのアピール、イメージアップ
- 北の医療人を育む
- 医療技術部—4年生大学は初めて（学位がとれる）
- 歯学部—合格率が高い
- リハビリテーション—機器がそろっている
- 薬学部—教育熱心
- カフェがある

## <アピールする対象>

- 進路指導者（高校）
- 高校生

## <高校生が求めるもの、きにすること>

- 楽しさ
- お金（経済面）
- 就職率
- 合格率（国試対策のプロがいる）

<アドミッション・ポリシーをわかりやすく>

- やる気がある人をサポートする
- 医療人になりたい人をサポートする→他の学校より教員がいる

1. 基礎学力がある人
2. 協調性があるコミュニケーション能力
3. 他者に思いやりがある人
4. 医療人に関心があり、社会貢献ができる人
5. 生涯学習し自己を磨ける人

<媒体>

- CM
- ラジオ
- SNS
- YouTube

## 北海道医療大学の ユニバーシティ・アイデンティティ について考える



## ユニバーシティ・アイデンティティ

1. 総合的に医療を学ぼう！
  - ・ 医療系の学部が多い
  - ・ 多職種連携が充実
  - ・ 総合病院を有する
  - ・ 優れた実習プログラム
2. 充実した学生生活を送ろう！
  - ・ 教員の手厚いサポート
  - ・ 学部を越えたクラブ活動
  - ・ 食堂、カフェ、ジムが充実

## アドミッション・ポリシーをわかりやすく説明

幸せな暮らしを支える医療を学びたい人

いろいろな人と交流したい人

## 良さ・特徴

1. 勉学に集中できる
2. 交通の便が良い
3. 高い国家試験合格率
4. 高い就職率
5. 保護者へのサポート
6. 奨学金制度の充実

## アピール方法 ー道外に向けてー

学生にSNSで情報発信を依頼  
実習の感想など（食ベログなど）  
学生には何らかの報酬を与える

学生に聞いてみる

最初は初対面で遠慮もあったが、「ウソ？ホント？」で各人の個性が出てきて和やかな雰囲気となった。医療大学の良さを皆で考え再認識するには、短時間ながら効果的な研修内容だったと思う。

Bグループは、ブレインストーミング形式で各人から北海道医療大学のユニバーシティ・アイデンティティについて考えを紙に書き連ね、共通項でまとめて意見を集約した。話の流れから、インスタを意識した発表形式を採用することになり、スマホを友としている若い先生方が躍動しはじめた。担当のFD研修委員の先生方もインスタ発表に挑む我々を後押しする姿が印象的であった。

いざ発表となったわけであるが、インスタに夢中になり何を聴衆者に伝えるべきかを良く整理できなかつたのが悔やまれる。折角仲良くなれたのに名残惜しさを感じつつも各人に別れの挨拶をした。多部連携の交流は色々な意味で時々あった方が良いかもしれない。

最後に、FD研修委員の先生方、大変お疲れ様でした。

薬学部 小島 弘幸

講話やシラバスの説明は、非常に理解しやすかったですし、時間も適当だったかと思えます。グループを作り、ワークショップ形式で討論するのは今後も継続していただければと思いますが、全学の連携を深める意味に於いては、特に新任に限定する必要はなく、色々な階層別や目的別で、数年毎に全職員が交代でFD研究を受けたほうが効果は上がると思えました。

参加した皆さんは、ユニバーシティ・アイデンティティの認識が高まり、大学のイメージが一層向上することを望んでいると思いますので、グループ討議で挙がってきた面白いアイデアを是非、具現化して欲しいと思いました。最後の発表のコメントで挙がっていた白鳥と校舎の背景など、学会発表等の際に、スライドやポスターに全学的な統一感があれば、ユニバーシティ・アイデンティティの機運はさらに高まっていくと思いました。

薬学部 西 剛秀

私は本学を平成2年に卒業したが、同窓会や研究生として関わりを持ち、また、薬学部や歯学部の先輩・後輩との交流から他施設とのコミュニケーションがスムーズに行えるなど本学を卒業してよかったと感じる機会が多くあった。

立場が変わり教員となったが、まだ不明な点多々あった。しかし、FD研修を受け、大学としての入学者受け入れ方針(アドミッション・ポリシー)やシラバス、ユニバーシティ・アイデンティティなどの言葉や定義を理解するとともに、本学が学生、地域に貢献しなければならない責任や重要性を深く感じた。さらに、今回のグループワークで他の学部の方とともにプロダクトをまとめたことで、学部間で協力することで他大学では行えない講義や実

習を行うことが可能であると感じた。

今後は自ら積極的に様々な学部の教員とコミュニケーションをとり、本学の強みであるチーム医療に精通した医療人を育成出来るように精進したいと思った。

薬学部 早坂 敬明

今回、全学 FD 研修<基本編>に参加させていただき、大変有意義な時間を過ごさせて頂きました。黒澤先生の講話をお聞きして、北海道医療大学の歴史や現状、そして、教員としての使命と目標について理解することができました。また、泉先生によるレクチャーでは、シラバスの作成という今後の教育活動に直接生かせるお話を伺い、大変勉強になりました。

さらに、午後に行われたワークショップでは、他学部の先生方とのディスカッションを通じて、色々な考えに触れることができ、また、本学のユニバーシティ・アイデンティティやこれからの大学としての有り方について深く考える機会を得ることができました。

今後は、本 FD 研修で学んだことを生かし、本学における教育・研究に励んで参りたいと思います。

薬学部 中川 宏治

午前中に黒澤副学長より本学の歴史、教育理念などとともに、大学のブランド力の指標となるいくつかのデータにおいて本学が私立大学の中で上位に位置していることを説明していただき、今後も伝統を継承しながら、道外の学生からも志望してもらえるブランドに高めていくことが重要だと感じました。また、入学後に学習意欲が低下しているというデータから、在校生が医療大学“愛”を持って充実した学生生活を送ってもらうことが大学の活性化につながり、ブランド力を高める 1 番の方法であると感じました。

午後からのグループディスカッションは、国家試験の合格率以外に何がアピールできるのか、本学の強みを考えるととても良い機会になりました。他学部の先生方からの意見はとても新鮮で興味深く、医療系総合大学である本学の特徴を生かした部局横断的な取り組み（教育）が学生にとっても視野を広げる貴重な機会になり得ると実感できました。

薬学部 中川 勉

まず、今回の研修の趣旨、講話の聴講によって、参加前までの私自身の本学に対する知ろうという意識の低さを感じました。着任後すぐの時期ということもあり、わからないことへの羞恥心が少ないこと、また、第三者的な感覚を持って本学について考えることができたと思います。

ワークショップでは、私たちのグループでは、本学の「良さ」「特徴」を出し合う事に最

も時間をかけました。私は本学の卒業生ですが、在学時には「悪い点」だと思っていたこと、「当たり前」だと思っていたことが、実はアピールポイントに成り得るということが最も驚いた点でした。

今回の研修での懸念点としては、教職員の立場でのみの考えに偏っているというところだと思います。実際の在学学生はどのように過ごしているのかを知ることは、現在のユニバーシティ・アイデンティティを考える上では最も重要なことだと思います。

薬学部 水野 夏実

本学の歴史や理念、あるいは現状や問題などを知ることができ、有意義であった。また、ワークショップでは、普段あまり交流する機会のない他学部の先生方と交流することができ、刺激となった。時間は、やや長かったが、内容が充実していたので、疲労感は少なかった。

ところで、ワークショップの趣旨にあった、「学生中心の教育」を掲げつつ、「21世紀の新しい健康科学の構築」を追求すること、つまり、研究活動を推進することは、困難であると思った。具体的にどのように取り組むべきなのか、自分なりに考えてみたいと思った。

歯学部 永野 恵司

FD講習会に初めて参加いたしました。長丁場でしたが、飽きることなく充実した研修内容だったと思います。副学長のお話は興味深く、自校についての学長の考えも初めて知ることができました。会う機会もほとんどなく直接話を聞く機会もないため、貴重だったと思います。できれば学長本人からお話が聞ければなお良かったと思いました。

ワークショップについては初めのうちはなかなか役割、進行の仕方に多少混乱しましたが、自分のグループも含め発表はそれぞれ個性が出ており内容も全て良いものであったと感じました。他学部の教員とこのようなワークをすることも初めてでしたので新鮮でした。

これまでお互いほとんど他学部の事情はわからなかったもので少しの時間ではありましたが、雑談等も含め楽しい時間を過ごせました。今後この研修を活かせるような教育活動を行なっていきたいと思っています。

歯学部 生化学 高田 鮎子

今回新任教職員FD研修会を受講して、本学の沿革から現状と目指す方向性、シラバス作成等の実務をご教示いただき、本学のアウトラインを把握することができた。

ワークショップでは課題設定が曖昧で議論が散逸してしまったのが残念であった。議論

の核となるユニバーシティ・アイデンティティについて前任の大学での取り組み等を紹介できれば、本学との比較から、より具体性を持った議論ができ、議論に一貫性を持たせることが出来たのではないかと思う。そのため、あらかじめ課題や課題シートを提示してもらい、予習してからワークショップに臨みたかった。

一方で、この取り組みは新任教員が主体的に本学のことを知り、考察し、その上で求められている職責をいかに全うするかを考える良い契機になったと思う。

また他学部の教員との交流が持てたことが非常に有意義であった。今後も学部を超えた研究・教育連携を推進していけるような取り組みをしていただきたい。

歯学部 山口 撰崇

入職してまもなく FD 研修の案内を頂いた時には「FD とはなんだろう」という疑問から始まりました。大学の概要からアドミッションポリシーに至るまで丁寧に説明して頂き、さらにワークショップで自分自身もユニバーシティ・アイデンティティについて考えることで理解を深めることができたと感じました。研修での学びを通して在学生在が本大学に入って良かったと思えるよう、医療を志す多くの人が本学に興味をもってもらえるよう行動するよう努めたいと思います。そして自分自身も本学での教育・研究を充実できるよう努力してまいります。

看護福祉学部 南山 斗志世

アイスブレイキングにより一気に和気あいあいムードとなり、ワークショップでは、座席場所から司会を任命され不安になりましたが、このグループなら何とかなるという気持ちになりました。そして、メンバーの皆さんやファシリテーターに導かれ、自由に多様性を取り入れて、楽しみ動きながら、一つの目標に向かってクループで一丸となり本学の良さや特徴について考え他者の意見を取り入れながら進めることができました。

そのため、最終発表も本学の良さを伝えるため多職種連携し、Instagram という媒介方法で行うことができました。質問もいただき本当に考え行動に移す FD 研修になったと思いました。更に、この場だけで留まらず、今後の行動計画や目標をアンケートに記載すること、この感想も含め、初めの雰囲気作りからこの一連の流れがまさに授業設計だと感じ、たくさんの学びを得ました。

今回色々な大役を経験し同期入職員の仲間意識ができた今回の FD 研修に感謝申し上げます。

看護福祉学部 清水 博美

「学生を中心とした教育をすすめるために」をテーマとしたFD研修に参加した。午前の講話では、本学の理念や教育方針とそこから組み立てられる授業計画の内容、また大学教育の課題を再認識することができた。

午後のワークショップでは、ユニバーシティ・アイデンティティを考え、アピールする方法を検討した。私はいままで教育経験がなく、ユニバーシティ・アイデンティティの概念も今回の研修で初めて認識したが、昨今の大学改革や少子化に伴う入学者の減少、財政問題等を考えると大学の個性を一人一人が認識し、組織の活性化を図っていく重要性を学ぶことができた。

またワークショップで様々な先生方の考えに触れることができ、改めて多学部がある本学の良さを実感した。医療の臨床現場でも多職種によるチーム医療がうたわれている中、医療系総合大学としての強みを考えながら今後の教育にあたっていきたい。

看護福祉学部 高橋 啓太

新任教員として研修に参加させて頂き、本学について理解を深めることが出来ました。私は、今まで看護職として臨床（病院）で勤務しておりました。そのため、大学・教育については、理解できていない部分が多くあります。

今回の研修で本学のアドミッションポリシー、ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシーについて理解することが出来ました。また、午後のワークショップでは「ユニバーシティ・アイデンティティ」について考え、他学部の方と意見交換することができ他の学部についての理解も深まりました。

本学を理解する中で、在学中から多職種連携について学ぶことが出来る環境があることを素晴らしいと思いました。また、教育体制も整っており、学生へのサポートも厚く学ぶ環境が整っていると感じました。

今回の研修に参加し、改めて教員としての責任を実感しました。この学びを今後の教育・研究活動に活かしながら実践していきたいと考えます。

看護福祉学部 下山 美由紀

本FD研修は、「北海道医療大学のユニバーシティ・アイデンティティについて考える」というテーマでした。私にとって聞きなれない単語でしたが、イメージの統一化を図り、組織の存在を周囲に印象付けるという発想は、企業のブランディングに近いものであると認識しました。

ワークショップでは高校生やその保護者に当学をアピールするためのプロダクトの作成に取り組みました。グループ教員は、当学の卒業生や、道内他大学を経験されたベテラン教員などバラエティに富んでおり、発散思考のstepでは地域性や歴史を活かしたアピール素

材が集まりました。印象的だったのは、それらの素材をプロダクトにする際に若者に受け入れられやすい媒体（Instagram）を用いて作成したことです。

この研修を通して、今の時代に合わせるために、これまでの大学の歩みや特徴を変える必要はなく、伝えるツールや環境をその時代に即したものにしていくことが大学のアイデンティティの形成に大切だと感じました。

リハビリテーション科学部 岩部 達也

「手を携え共有している夢の実現を」

新任教員対象の全学 FD 研修が行われ学びの機会を頂いた。本研修における目標は、AP に沿った学生の入学促進に向けた視点や DP を基盤とした教育実現への教育手法の構築であった。ワークショップは、本学のユニバーシティ・アイデンティティのアピール方法と、そのために自身は何ができるかを話し合った。年齢も経歴も専門領域も異なるメンバーで構成されたグループでの話し合いは、多くの新しい視点を吸収できた。多様な意見の一方で共通している点もあった。メンバーの意見は学修者が主体的に学び、積極的に学生生活を楽しむことを実現するために、教育者側がどんな仕掛けづくりができるかという観点に立脚している点である。これはまさに、中教審が示す 2040 年に向けた高等教育のグランドデザインで強調されているところである。

学部や専門領域の枠を超え、大学運営に教員も手を携え共有する夢の実現に向けた取り組みができることを期待できた有意義な研修となった。

リハビリテーション科学部 多田 菊代

私はこれまで一般病院に勤務していたため、ユニバーシティ・アイデンティティというものになじみがなかった。北海道医療大学から実習生の受け入れなども行ってきたが、大学はどのような理念を持って学生を指導し、どのような医療人を育てようとしているのかということについて考えることがなかった。しかし、今回の FD 研修を通じて医療大の教員となるにあたり、これらの事柄について考えることがいかに重要なのかを実感できた。

大学進学者減少が予測される将来において、医療大のアピールポイントはどこにあるかということや他の養成校に比べて優越性がある点はどこかなどを様々な学部の教員間でディスカッションできたことで、自分だけでは気づけなかった医療大の魅力を知ることができたと思う。

ここで話し合ったポイントを踏まえて社会に対しても広報し、医療大の理念に賛同する学生や教員が集う組織になると素晴らしいと感じた。

リハビリテーション科学部 大須田 祐亮

新任者として本学 FD に参加しました。黒澤副学長からの講話で、本学の歴史的背景、現在および将来の問題点、これから目指す方向性につき学ぶことができ、事情を全く知らない新任者の私にとって本学の概略を知る貴重な機会となりました。少子化による学生数減少のため私立大学の存続が危ぶまれることはニュースなどで情報としては持ち合わせていたましたが、厳しい状況をうかがい知ることができました。

グループ討論の題目であるユニバーシティ・アイデンティティですが、参加者が新任者のみあり、私を含めてこれまで本学と関わりの薄いメンバーもいたことから、討論の際に参考にできる本学の基礎的な資料があると良かったと思いました。

医療技術学部 坊垣 暁之

4月4日開催のFD研修に参加いたしました。医療技術学部臨床検査学科助教の小野誠司です。過日はFD研修において本学の歴史、経緯に触れることができ、本学で今後教員として勤めていく上で必要な情報にたくさん触れる機会をいただきありがとうございました。それにつづくワークショップでも本学のいろいろな職種の人たちと一つのテーブルを囲み、意見を出しあったり、普段の業務ではなかなか取り組めない経験をさせていただき、今後の自分の職務にも生かせることがあるなあとしみじみ感じました。本学で学び社会に出ていく若者たちへ様々な意見を導き出したり、する方法などに関しても提案できるように思います。当日の企画、運営に当たられました職員の皆様、貴重な時間を提供いただきありがとうございました。以上が私からの感想となります。

医療技術学部 小野 誠司

# 総 合 評 価

# 総合評価

1. 今回の新任教員研修における次の各テーマについて、習得度を自己評価してください。

	充分理解 できなかった	だいたい理解 できた	充分に理解 が得られた
1) 医療系総合大学教員としての使命と目標	—	—	—
2) 多職種連携教育について考える	—	—	—

2. 今回のワークショップについて評価してください。

(1) 内容についてどう評価しますか。

価値なし	いくらか 価値あり	かなり 価値あり	きわめて 価値あり
—	—	—	—

(2) 内容に対する時間量はいかがでしたか。

多すぎる	適当	やや少ない	足りない
—	—	—	—

(3) 内容の難易をどう感じましたか。

きわめて難しい	適当	少し易しい	易しすぎ
—	—	—	—

(4) このようなワークショップ形式についてどう思いましたか。

効果なし	ある程度効果的	かなり効果的	きわめて効果的
—	—	—	—

(5) このワークショップの内容はあなたの興味に対して適切でしたか。

全く不適切	ある程度適切	かなり適切	きわめて適切
—	—	—	—

3. 今回のワークショップ全体にわたり、とても良かったと思われる点

4. 今回のワークショップ全体にわたり、良くなかったと思われる点（改善点）

5. 今後ともこのようなワークショップの実施についてどう思いますか。

実施しなくて もよい	どちらでも よい	実施しても よい	ぜひ実施すべき である
—	—	—	—

6. このワークショップの成果に関連して、今後1年の間に実施したいと考えていることを簡条書きにしてください。

7. 全体を通して、今回の新任教員研修に対するご意見を記入してください。

所属学部等

お名前

---

## 総合評価

\* 参加者：26 名 ・ 回答者：26 名 ・ 回収率：100%

1. 今回の新任教員研修における次の各テーマについて、習得度を自己評価してください。

	充分理解できなかった	だいたい理解できた	充分に理解が得られた	無回答
1) 医療系総合大学教員としての使命と目標	2	11	13	0
2) 多職種連携教育について考える	2	10	12	2

2. 今回のワークショップについて評価してください。

(1) 内容についてどう評価しますか。

価値なし	いくらか価値あり	かなり価値あり	きわめて価値あり	無回答
0	2	19	5	0

(2) 内容に対する時間量はいかがでしたか。

多すぎる	適当	やや少ない	足りない	無回答
0	24	2	0	0

(3) 内容の難易をどう感じましたか。

きわめて難しい	適当	少し易しい	易しすぎ	その他
1	22	3	0	0

(4) このようなワークショップ形式についてどう思いましたか。

効果なし	ある程度効果的	かなり効果的	きわめて効果的	無回答
0	11	12	3	0

(5) このワークショップの内容はあなたの興味に対して適切でしたか。

全く不適切	ある程度適切	かなり適切	きわめて適切	無回答
0	13	10	3	0

### 3. 今回のワークショップ全体にわたり、とても良かったと思われる点

- ・他学部の先生方と交流を持てたこと。(4件)
- ・TFの先生が適切なアドバイスをしてくれたこと。
- ・自分の知らない多くの意見を得ることができた。
- ・資料がよくまとまっていた。
- ・グループ討論。
- ・複数学科、職位の異なる教員間で自由に発言できたこと。
- ・多職種の先生方と交流することができた。
- ・いろいろな人の意見を聞いて有益でした。
- ・本学のことを学ぶことができた。理解を深めることができた。
- ・自身の卒業大学について、改めてじっくり考えることができて良い機会だと感じた。
- ・多職種連携。
- ・本学状況を知る。知ろうとする端緒となった点。
- ・研修時間が適切であったとおもいます。医療大のアイデンティティを考えることができた。
- ・他学部の先生方とディスカッションできた点。
- ・大学の魅力を考える機会になりました。
- ・自分の働く大学の良い点をとことん考えることが出来た。
- ・職位、学部を越えての交流、本学のアピールポイントの気づきを得られた。
- ・アイスブレイキングが良かった。
- ・他学部の先生方との交流ができてよかった。
- ・医療大学の良さについて考えるととても良い機会になりました。
- ・着任して4日目にも関わらず、本学の良さをアピールするというテーマに驚きましたが、考えていく上で知らない事等を確認でき、私自身が本学について学ぶことができてとても有意義なワークショップとなりました。
- ・新任者に大学の現状を考えるきっかけとなりました。
- ・肩書や年齢、学部を越えてつながりを持てる機会となり、とても感謝しています。
- ・アドミッションポリシーを知るだけでなく、理解するレベルまで落とし込めたと思いました。
- ・テーマがFDの内容に適していた。
- ・Bグループはみんな協力的で、積極的でとても勉強になりました。

### 4. 今回のワークショップ全体にわたり、良くなかったと思われる点(改善点)

- ・テーマが大きく、また結論を出すことが難しいものであった。そのため、議論がわき道にそれることが多かった。
- ・新任直後で良いところを考えてみても表面的なところしかわからなかった。
- ・研修の目標について“教育手法を学ぶ”という点については、達成できたか疑問です。行動目標5の達成にむけて出来たことが少なかったと思います。
- ・ディスカッション、発表するテーマや内容をもう少し明確にして頂けるとより深くディスカッションできたかと思います。
- ・タスクフォースの先生にもう少し質問に対する的確な回答をお願いしたかったです。
- ・チューターの方が時々助言して下さることが流れに乗るのに大切だと感じた。
- ・討論時間が少し短かったように思います。
- ・WS発表形式がグループごとで違う→最終討論の活発化に影響?→もう少し詳細に進行があれば良い。
- ・もう少し発表するうえで、課題が明確だと良かった。
- ・必要な項目をもっと具体的にわかりやすく教えていただきたかった。
- ・グループディスカッションでKJ法の説明をした方が良いかもしれない。
- ・作業内容の支持が今一つ分かりにくかった点。

- ・タスクフォースがワークショップの論点をしっかり把握していない。質問をしても明確な回答がえられなかった。
- ・テーマが漠然としており、グループワークが非常にあいまいであった点。
- ・ワークショップ作業の要点が少しわかりにくかったです。
- ・タイムキーパー。
- ・全グループのタスクフォース間で、統一見解がなされていなかった。

5. 今後ともこのようなワークショップの実施についてどう思いますか。

実施しなくてもよい	どちらでもよい	実施してもよい	ぜひ実施すべきである	無回答
0	4	14	8	0

6. このワークショップの成果に関連して、今後1年の間に実施したいと考えていることを箇条書きにしてください。

- ・大学のPRポイントを見つける。
- ・コミュニケーション。
- ・医療技術学部の中でもFD研修を行ってみたい。
- ・魅力を発信できる人間になればと思った。
- ・教員として今後学ぶことが多いので、本日学んだことを活かして学生にかかわっていきたいと思います。
- ・オープンキャンパスや学園祭等、学生や入学生と直接ふれあう機会を増やして意見をききたい。
- ・本学の良さをアピールしたい、学生に愛情を持って接したい。
- ・今日知り合えた他学部の先生と協働した仕事をしたい（研究・実習など）
- ・大学の特徴を学外でアピールしていきたい。
- ・北海道医療大学のアピールポイントを学生さんや機会があれば社会一般に伝達したいと思っている。
- ・本学の強みを学生の面接時に伝えたい。
- ・相談会、学校訪問に活かしていきたいです。
- ・対外的に発表するなどを行うことがあれば、所属している医療大の紹介を、今日の内容を踏まえて活かそうと思う。
- ・学生と話をする。本学に入ってよかったこと、悪かったことを一緒に考えたい。
- ・学生に当大学の良さを伝達していく、入学する学生にも、教員・インストラクターにも本日の大学の良さを伝えていく。
- ・学生に対して本校の良さをアピール。
- ・学生になぜ医療大学を選んだのか聞いてみたいと思います。（3件）
- ・入学した学生に本学の良いところを伝えていくことはしていきたいと思いました。
- ・現状を理解する、本学教員としての資質を高める。
- ・今回学ぶことができたアドミッションポリシー、ユニバーシティ・アイデンティティを教育に活かしたいと思います。また、SNSなど、ネットエチケットについての学生への伝達は重要と考えているため、伝えていきたいと思います。
- ・他学部との交流。

## 7. 全体を通して、今回の新任教員研修に対するご意見を記入してください。

- ・全体的には、充実した時間を持てた。本学の理念などの理解が深まった。
- ・初めて会う人と話をするのは難しいなと思った。
- ・ハラスメントの注意喚起のお話の際、笑い声が聞こえたのが悲しかったです。だから、ハラスメント事案が多いのだと思います。
- ・このような機会を与えていただきありがとうございました。とても有意義で楽しかったです。
- ・はじめは乗り気ではなかったが、参加してみると意外に良いものでした。
- ・状況を全く知らなかったので、考える良いきっかけをいただきました。他学部の先生方とお話できたことも良かったです。
- ・ワークショップの大切さを知ることができた。ありがとうございました。
- ・新任の時は、まだ大学に関する情報を持っていないので、着任後すぐ（4月）ではなく、1年後などに開催しても良いのではないかと思います。FD委員の先生方が考える大学のアピールポイントも聞いてみたいと思いました。
- ・大学の話が中心で、DH校は孤独に感じましたが、グループワークをしていてDH校に対しての熱い意見、アドバイスをもらえて大学附属のDH校のアピールをしたいと改めて感じました。
- ・他学部の先生とコミュニケーションがとれてとても良かった。
- ・とてもあたたかい雰囲気、GWも発表もできました。それが本学の良さだと感じました。
- ・着任してすぐに平日、というタイミングはありがたい。グループ以外の先生ともコミュニケーションをとれる時間が欲しいです。ありがとうございました。
- ・入職前から考えていたことが伝えられてよかった。（画像コンテンツの件）
- ・チーム医療に対して、本学の大きな強みであると思います。そのため、教員同士のフランクなコミュニケーションの時間がこれ以外でもあれば大学が活性化すると思います。
- ・色々なご意見に触れる機会を得ることができて、とても有益だと思いました。
- ・初めて教員になりましたので、難しい部分も多かったですが、大学のことを考える、知る、いい機会となりました。
- ・今回、本学のことを知り、考え、人脈も広げることができて有意義な研修でした。欲を言えば、他のグループの先生方とも交流できる場を設けて欲しかったです。（懇親会等）
- ・多職種で考えると色々な発見が得られる。
- ・少し長い時間でしたが、沢山の学部の先生方と話せて楽しかったです。
- ・教員としてのミッションを理解することができた。他学部の先生と交流を持つことができて良かった。
- ・もう少し短時間だとありがたかった。
- ・これからの教育に役立ったと思います。
- ・他学部の先生を知れてよかった。
- ・今日の成果内容が、広報活動等に反映されると良いなと思います。ありがとうございました。

# F D 委員感想



今回の基本編では、今までのアンケート結果より、会場が札幌市内のサテライトキャンパスから当別キャンパスで平日に行くこととなった。平日の当別キャンパス開催ということで便利になったが、一方では講義や会議と重なり終日の参加が難しくなるなどの問題が生じたように思う。私自身も午後からの参加となった。

テーマが「学生を中心とした教育をすすめるために」-北海道医療大学のユニバーシティ・アイデンティティについて考える-ということで、午後から1グループ6名のSGDを行った。アイスブレイキングからはじまり、本学のアピールポイントとその手段、また自分はそれに対して何ができるかというプロダクトを作成した。どのグループも活発な討論が行われ、新任教員ならではの奇抜なアイデアも多くみられて素晴らしいプロダクトが出来上がったように感じた。FD委員もタスクフォースとしてあらかじめ決められたグループに張り付き討議をファシリテートしていてスムーズな進行が行われていたと思う。

(薬学部 遠藤 泰)

今回のFD研修では、「本学のユニバーシティ・アイデンティティを高校生、新入生にアピールするにはどのような取組みを行ったらよいか」というテーマでワークショップが行われた。4グループに分かれて熱心な討論と作業が行われた。最後に全体討論が行われ、本学の教育の特色を「医療人の養成と多職種連携教育」であると位置づける結論で一致したが、本学を対外的にアピールするためには、「学生生活や大学のアメニティの充実」、「大学と地域とのつながり」、「奨学金制度」など学業以外の情報についても積極的に発信してゆくべきであるという意見が出された。

また、情報を発信する媒体としては、インターネットのほか、インスタグラムやツイッターなど SNS を活用してゆくべきであるという意見が多く出された。本日のワークショップの結果をふまえ、今後、大学のホームページ等の更なる充実を期待したい。

(薬学部 泉 剛)

4月4日に開催された、新採用教員FD研修にBグループのタスクフォースとして参加させていただきました。私が本学に赴任したときは新人FD研修がありませんでしたので、私もFD研修を受けるような気持ちでの参加でした。他の大学や職場から本学に赴任した直後は、その違いを強く意識させられます。そのような気持ちの中でディスカッションすると、新しい発想がぞくぞく生まれます。今回のFDのサブテーマである「北海道医療大学のユニバーシティ・アイデンティティについて考える」にもその効果が十分に活かされておりました。

また、それを伝える媒体には「インスタグラム」を使うなど、若い教員ならではの旧態依然とは異なる視点がふんだんに取り入れられました。受験生に本学の魅力を伝えるには、彼らに寄り添った手段が不可欠です。今回はその一端を示していただき、大変勉強になりました。こうして誕生した今回のプロダクトはすぐにでも入試広報で採用できます。来年

度の受験を検討し始める今夏までには、このインスタグラムのアレンジ版が登場していることでしょう。

(歯学部 荒川 俊哉)

このたびFD委員として参加しましたが、実は私自身、これまで新任教員を対象にしたFD研修への参加経験がありませんでした！故意にさぼったわけでも仲間はずれにされたわけでもありませんが、たまたま所用と重なり、そのままズルズルと時日を経ることになっておりました。ですから、今回は「隠れ新任教員」として紛れ込み、新任教員目線で楽しませていただきました。赴任して3年目になりますが、白鳥の飛来や校歌の謎(?)など、恥ずかしながらこれまで知らなかった話を聞かせていただき、得した気分です。もちろん、大学の建学理念、教育理念などもあらためて確認できました！

午後のワークショップでは、「隠れ新任教員」と言うよりも「とうの立った新任教員」と化し、参加された皆さまの新鮮な視点や発想に感心しておりました。

というわけで、私にとっては、遅ればせながらやっと最初の関門を通過したといった感の研修でした。皆さま、ありがとうございました。

(心理科学部 野田 昌道)

本学に新たに雇用された教員に対して、前回同様「学生を中心とした教育をすすめるためにー北海道医療大学のユニバーシティ・アイデンティティについて考えるー」が主題となった。ワークショップにおいて私はBグループのサポートについたのでその感想を述べる。

短時間における共同作業として皆さんよく協力して行っておられたと思う。また、ワークショップの目標としては 何らかの媒体を用いた大学アピールの材料を作ることであったが、媒体をInstagramとして、原案から完成させるところまで行きつけたのはBグループだけであった。

後半はSMSの構成に習熟したメンバーを中心に全員が一丸となり、ファシリテーターは作業の進行を見守るのみとなった。頼もしい限りである。

(リハビリテーション科学部 西澤 典子)

今年度の北海道医療大学全学FD研修<基本編>のテーマは、「学生を中心とした教育をすすめるためにー北海道医療大学のユニバーシティ・アイデンティティについて考えるー」でした。午前中は副学長から現状の北海道医療大学と目指すべき教育についての提言があり、午後のワークショップにつながる良い情報提供となっていたと感じました。ワークショップでは、新任教員の参加者がグループに分かれて、本学がアピールし得るユニバーシティ・アイデンティティとは何か、どうアピールするかについて活発な討論が行われていました。

研修を通して参加者は、北海道医療大学を考える良い機会となっていたとともに、学部

横断的に共同作業を行う貴重な交流の場になっていたと感じました。新任教員からみた本大学の特長は外部からみた北海道医療大学の特長でもあるので、今回の研修は私自身としても北海道医療大学を再認識する良い機会となりました。

(全学教育推進センター 山口 明彦)

本学の全体像を示す副学長の講話をふまえて「ユニバーシティ・アイデンティティを考える」という作業は、私自身にも新しい視点を与えてくれるものでした。新任の先生方は、本学のことをよくご存知ない方も多い中で、非常に熱心に協力し合い、短時間で成果をまとめてくださいました。ワークショップの作業については、事前の理解と実際の内容が異なっており、現場で混乱を招いたことをお詫び申し上げたいと思います。

テーマが広いこと、発表形式の完全な自由さなどは、改善点であり得るでしょうが、それによって考えや成果が非常に多彩に広げられている様を見ると、長所でもあると感じました。さらに参加者が達成感を得るためには、自由な発想と実現性の間の、ちょうどいい点に目標を定めていくことが必要なのでしょう。

(全学教育推進センター 鎌田 禎子)

テーマは良かったように思われる。参加者に卒業生もいたが、外部から入ってきた方の新鮮な視点で大学の良い点、悪い点が挙げられたことで、今後の大学の広報などに参考になるのではないかと思います。まる一日の研修は少し長いように感じられた。参加者の集中力などを考えると半日くらいに短縮して、効率的に行うことも今後検討したほうが良いと思われる。午前中の講演を一つにして、ワークショップももう少し短くするのがよいのではないかと思います。

また、FDの参加者の感想文は今後の運営のためであってもよいと思うが、主催する側の感想文は必要なく、研修後のFD委員会などで意見、感想を聞く形でよいのではないかと思います。

(全学教育推進センター 長谷川 敦司)

# ア ル バ ム



## アルバム



開会式



講 話

「医療系総合大学教員としての使命と目標  
-新医療人育成の北の拠点を目指して- 」



レクチャー

「シラバス（授業計画）について」

ワークショップ① アイスブレイキング（グループづくり）



Bグループ



Dグループ

ワークショップ② ワークショップ



Aグループ



Bグループ



Cグループ



Dグループ

ワークショップ③ グループ発表・質疑応答・全体討論



質疑応答が沢山あり、活気のある発表会でした



閉会式

FD研修会（基本編）  
記念撮影



# 全学FD研修[テーマ編]

「学生を中心とした  
教育をすすめるために」  
- IRを活用した学生支援の方法 -

期 日：2019年8月9日（金）

会 場：当別キャンパス中央講義棟

## はじめに

FD委員長 志渡 晃一

令和元年度FD研修<テーマ編>を8月9日(金)午前9時30分から午後4時45分まで、本学キャンパス中央講義棟にてIR委員会と共催のかたちで実施しました。研修のメインテーマを「学生を中心とした教育をすすめるために」、サブテーマを「IRを活用した学生支援の方法」としました。

メインテーマは本年4月に開催されたFD研修<基本編>と同一であり、「ボトム・アップ型相互研修」という形態も踏襲しました。藏満委員からの全体のオリエンテーションに引き続き浅香正博学長からご挨拶を賜りました。その後30分間に亘りIR推進センター長である安部博史教授から「本学における教学IRの整備・活動状況と今後について」講義をして頂きました。学部ごとに、「学生支援」の現状を報告し、それらを全体として共有し、各組織における実効性のある取り組みを具現化することを目指しました。

ワークショップでは、「IRを活用した学生支援の方法を考える」というテーマで、以下の領域ごとに討論を重ねました。

- A 卒業試験・国家試験合格率を上げるためのIRの活用
- B 留年・退学・休学を減らすためのIRの活用
- C 初年次教育をアジャストするためのIRの活用
- D 全学教育から専門教育へスムーズに移行を図るためのIRの活用
- E 臨床教育へのスムーズに移行を図るためのIRの活用

ワークショップの成果として印象的だったことのひとつは「学生支援に関する暗黙知を見える化し経験知を共有し深化させていく」という方針が共有されたことでした。「エビデンスに基づいた対策」を推し進める上でIRの活用が突破口となるという予感を持ちました。その他、得られた成果を報告書として纏めさせていただきます。ご照覧下されば幸いです。

今回の研修では、全学FD委員を含めて総勢60名弱の多数の参加を得ました。主催者の一人として、研修を無事に終えることができたことを嬉しく存じています。他学部の先生方や事務の方々と関わる機会はなかなか得られないものです。たとえ短い間でも互に向かい合える機会がもてたことは幸甚でした。学部横断的に交流が持てることは素晴らしいことであることを実感した次第です。

開会の初頭には浅香正博学長から貴重な訓示を頂きました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。新設の医療技術学部からは3名の先生方のご参加でした。お疲れ様でした、また、ありがとうございました。「学生を中心とした教育をすすめる対策の構築」に向けて、多数の方々から現場の経験を踏まえた貴重な提言をいただきました。あらためて御礼を申し上げます。さらに事務方の三浦部次長、細川洋美さんからはいつもと変わらぬ支援をいただきました。この場を借りて深謝申し上げます。

## 2019年度 全学FD研修〈テーマ編〉実施概要

メインテーマ：「学生を中心とした教育をすすめるために」

サブテーマ：「IRを活用した学生支援の方法」

主催：全学FD委員会

開催日：2019年8月9日（金） 9：30～16：45

開催場所：当別キャンパス 中央講義棟 C31 講義室[全体会]／C109 演習室[WS]

ディレクタ：志渡 晃一（全学FD委員長）

### 1. スケジュール

	【担当】	【会場】
9:30 参加者集合	全体進行 藏満委員	C 3 1
9:40 開会 委員長挨拶	志渡委員長	↓
9:45 オリエンテーション (テーマ説明、日程説明ほか)	藏満委員	
9:50 学長挨拶	浅香学長	
10:00 レクチャー 「本学における教学IRの整備・活動状況と今後について」 IR推進センター長 安部博史 教授		
10:50 話題提供：各学部における学生支援の状況		
① 薬学部	木村准教授	
11:05 ② 歯学部	門准教授	
11:20 ③ 看護福祉学部	西教授	
11:35 ④ 心理科学部	西郷助教	
11:50 ⑤ リハビリテーション科学部	宮崎准教授	
12:05 休憩 昼食		
13:00 ワークショップ WS①：オリエンテーション FD委員自己紹介 WS②：オリエンテーション アイスブレイキング（グループづくり）	荒川委員  會田委員	C 1 0 9 ↓

13:40	休憩		
13:45	WS③： ワークショップのすすめ方 ワークショップ「IRを活用した学生支援の方法を考える」 A 卒業試験・国家試験合格率を上げるためのIRの活用 B 留年・退学・休学を減らすためのIRの活用 C 初年次教育をアジャストするためのIRの活用 D 全学教育から専門教育へスムーズに移行を図るためのIRの活用 E 臨床教育へのスムーズに移行を図るためのIRの活用  グループワーク（110分）		C109 ↓
15:35	休憩		
15:45	WS④：グループ発表・質疑応答 全体討論	野田委員	
16:40	アンケート提出・修了証授与	志渡委員長	
16:45	閉会		

## 2. 共催

\* IR推進センターの共催

## 3. 会場

\*集合からオリエンテーション、学長挨拶、レクチャー、話題提供、昼食（休憩）までは、C31講義室で行う。

\*ワークショップ（オリエンテーション、グループワーク、発表・全体討論）は、C109演習室で行う。

## 4. FD委員の役割

FD委員はグループのファシリテーターとして適宜参加してアドバイスする。

・グループ作業の方法      ・グループ作業の進行      ・時間の進行      など

## 5. 研修参加者

2019年度 全学FD研修〈テーマ編〉 参加者名簿

[敬称略]

職名	氏名	所属学科・講座等	グループ
<b>薬学部</b>			
教授	柳川 芳毅	薬理学 (薬理学)	A
准教授	高上馬 希重	創薬化学 (生薬学)	C
准教授	小林 大祐	衛生薬学 (衛生化学)	B
准教授	町田 拓自	薬理学 (病態生理学)	D
助教	藤崎 博子	実務薬学 (病院薬学)	E
<b>歯学部</b>			
教授	長澤 敏行	総合教育学系 (臨床教育管理運営)	E
教授	石井 久淑	口腔生物学系 (生理学)	D
准教授	門 貴司	総合教育学系 (歯学教育開発学)	A
講師	加藤 幸紀	口腔機能修復・再建学系 (歯周歯内治療学)	B
講師	礪部 太一	全学教育推進センター (人文社会科学分野)	C
講師	中野 諭人	全学教育推進センター (物質・情報分野)	C
<b>看護福祉学部</b>			
教授	西 基	看護学科 (生命基礎科学)	A
教授	工藤 禎子	看護学科 (地域保健看護学/地域看護学)	B
教授	竹生 礼子	看護学科 (地域保健看護学/地域看護学)	C
講師	唐津 ふさ	看護学科 (成人看護学)	D
講師	加藤 依子	看護学科 (母子看護学/小児看護学)	E
講師	福岡 麻紀	臨床福祉学科 (社会福祉学)	B
講師	下山 美由紀	臨床福祉学科 (介護福祉学)	A
助教	松本 望	臨床福祉学科 (社会福祉学)	A
<b>心理科学部</b>			
講師	今井 常晶	臨床心理学科	B
助教	西郷 達雄	臨床心理学科	B
<b>リハビリテーション科学部</b>			
准教授	宮崎 充功	理学療法学科	A
講師	長谷川 純子	理学療法学科	E
准教授	坂上 哲可	作業療法学科	B
助教	児玉 壮志	作業療法学科	D
教授	下村 敦司	言語聴覚療法学科	D
講師	小林 健史	言語聴覚療法学科	E
講師	西出 真也	全学教育推進センター (生物・運動科学分野)	C
<b>医療技術学部</b>			
教授	吉田 繁	臨床検査学科	D
講師	江本 美穂	臨床検査学科	E
講師	白鳥 亜矢子	全学教育推進センター (言語文化分野)	C
<b>アドバイザー</b>			
教授	遠藤 一彦	歯学部教務部長	
教授	坂倉 康則	(前) 歯学部学力向上委員会委員長	
教授	安部 博史	I R 推進センター長	
准教授	木村 真一	I R 推進センター運営委員	

参加者計 35

## 6. 研修スタッフ

	学長	浅香 正博
レクチャー	I R 推進センター長	安部 博史
話題提供者	薬学部	木村 真一
	歯学部	門 貴司
	看護福祉学部	西 基
	心理科学部	西郷 達雄
	リハビリテーション科学部	宮崎 充功
全学FD委員長	看護福祉学部	志渡 晃一
全学FD委員	薬学部	遠藤 泰
		泉 剛
	歯学部	會田 英紀
		荒川 俊哉
	心理科学部	野田 昌道
		森 伸幸
	リハビリテーション科学部	山口 明彦
	医療技術学部	藏満 保宏
		坊垣 暁之
	全学教育推進センター	長谷川 敦司
		鎌田 禎子
事務担当	学務部教務企画課	三浦 清志
	学務部 I R 課	細川 洋美

## 8. 提出物について（報告書の作成）

### 報告書等 原稿

- ① グループプロダクト WSについて、「まとめの表」（様式指定）及び成果（任意様式）についてまとめてください。  
ボリューム（分量）などに特に制約はありません。
- ② グループ代表の感想 WSについての感想を、400字程度でまとめてください。
- ③ 全学FD委員の感想 FD委員としての感想を、400字程度でまとめてください。

・提出期限：9月9日（月）

・提出先：学務部教務企画課 FD研修担当

・fd-kensyu@hoku-iryu-u.ac.jp

2019年度  
全学FD研修 <テーマ編>

学生を中心とした教育を  
すすめるために

- IRを活用した学生支援の方法 -



主催：全学FD委員会

共催：IR推進センター



2019年8月9日（金） 当別キャンパス 中央講義棟

2019年度  
全学FD研修 <テーマ編>

# 「開会式」



全学FD委員会

## 研修会開催の趣旨

### 研修会開催の趣旨

本学の教職員一人ひとりが自主性・創造性を発揮することにより「学生中心の教育」並びに「患者中心の医療」を推進しつつ、「21世紀の新しい健康科学の構築」を追究することが本学の行動指針である。

その実現のためにFD研修会を開催し、教職員の自覚を促すとともに「教育力」を高めることを本研修会の趣旨とする。

## 研修会スケジュール

### 研修スケジュール

- 9:40 開会（C31講義室）  
委員長あいさつ
- 9:45 オリエンテーション（テーマ説明、スケジュール説明ほか）
- 9:50 学長挨拶 浅香 正博 学長
- 10:00 レクチャー  
「本学における教学IRの整備・活動状況と今後について」 IR推進センター長 安部 博史 教授
- 10:50 話題提供 「各学部における学生支援の状況」  
①薬学部 ②歯学部 ③看護福祉学部 ④心理科学部 ⑤リハビリテーション科学部
- 12:05 昼食・休憩
- 13:00 ワークショップ（C109演習室）  
WS① オリエンテーション WS② アイスブレーキング（グループ作り、自己紹介など）
- 13:40 休憩
- 13:45 WS③ ワークショップのすすめ方  
グループワーク「IRを活用した学生支援の方法を考える」
- 15:35 休憩
- 15:45 グループ発表・質疑応答、全体討論
- 16:40 アンケート提出、修了証授与
- 16:45 閉会

# 研修参加者

**研修参加者**

所属	職位	氏名	グループ	所属	職位	氏名	グループ
薬学部	教授	福川 亮毅	A	心理科学部	助教	西郷 達雄	B
薬学部	准教授	高上馬 希聖	C	91C 91D 91E 91F 91G 91H 91I 91J 91K 91L 91M 91N 91O 91P 91Q 91R 91S 91T 91U 91V 91W 91X 91Y 91Z	准教授	宮崎 亮功	A
薬学部	准教授	小林 大祐	B	91C 91D 91E 91F 91G 91H 91I 91J 91K 91L 91M 91N 91O 91P 91Q 91R 91S 91T 91U 91V 91W 91X 91Y 91Z	講師	長谷川 純子	E
薬学部	准教授	町田 氏白	D	91C 91D 91E 91F 91G 91H 91I 91J 91K 91L 91M 91N 91O 91P 91Q 91R 91S 91T 91U 91V 91W 91X 91Y 91Z	准教授	坂上 哲司	B
薬学部	助教	藤崎 博子	E	91C 91D 91E 91F 91G 91H 91I 91J 91K 91L 91M 91N 91O 91P 91Q 91R 91S 91T 91U 91V 91W 91X 91Y 91Z	助教	児玉 壮志	D
薬学部	教授	長澤 敏行	E	91C 91D 91E 91F 91G 91H 91I 91J 91K 91L 91M 91N 91O 91P 91Q 91R 91S 91T 91U 91V 91W 91X 91Y 91Z	教授	下村 敦司	D
薬学部	教授	石井 久雄	D	91C 91D 91E 91F 91G 91H 91I 91J 91K 91L 91M 91N 91O 91P 91Q 91R 91S 91T 91U 91V 91W 91X 91Y 91Z	講師	小林 健史	E
薬学部	准教授	門 典寿	A	医療技術学部	教授	西田 繁	D
薬学部	講師	加藤 幸紀	B	医療技術学部	講師	江本 英穂	E
看護福祉学部	教授	西 基	A	全学教育推進センター	講師	樋部 太一	C
看護福祉学部	教授	工藤 祐子	B	全学教育推進センター	講師	中野 謙人	C
看護福祉学部	教授	竹生 丸子	C	全学教育推進センター	講師	西出 真也	C
看護福祉学部	講師	徳津 心広	D	全学教育推進センター	講師	白鳥 亜天子	C
看護福祉学部	講師	加藤 依子	E	薬学部	教授	通藤 一彦	7F 8F 9F
看護福祉学部	講師	福岡 政紀	B	薬学部	教授	坂倉 康則	7F 8F 9F
看護福祉学部	講師	下山 菜由紀	A	全学教育推進センター	教授	安部 博史	7F 8F 9F
看護福祉学部	助教	松本 望	A	薬学部	准教授	本村 真一	7F 8F 9F
心理科学部	講師	今井 雅哉	B	-	-	-	-

(所属別) 31名/アドバイザー 4名

## 学長挨拶

北海道医療大学 学長



浅香 正博

## レクチャー

本学における  
**教学 | Rの整備・活動状況と  
 今後について**

IR推進センター長・心理科学部  
**安部 博史 教授**

## 話題提供

「各学部における学生支援の状況」

## 昼食・休憩



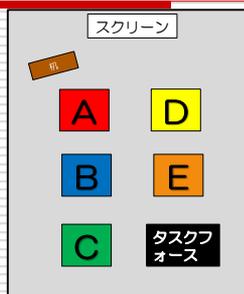
次のワークショップの開始：**13:00**  
 (時間厳守)

**12:58** までに、  
 C109演習室(中央講義棟 10F)に  
 お集まりください。

2019年度 全学FD研修（テーマ編）  
2019年8月9日（金） 当別キャンパス

各グループの場所にお座り下さい。

・お茶・お菓子は  
自由にお持ち下さい



主催：全学FD委員会

2019年度  
全学FD研修（テーマ編）

ワークショップ

IRを活用した  
学生支援の方法を考える



主催：全学FD委員会  
共催：IR推進センター



2019年8月9日（金） 当別キャンパス

IRを活用した学生支援の方法を考える

- A. 卒業試験・国家試験合格率を上げるためのIRの活用
- B. 留年・退学・休学を減らすためのIRの活用
- C. 初年次教育をアシヤストするためのIRの活用
- D. 全学教育から専門教育へスムーズに移行を図るためのIRの活用
- E. 臨床教育へのスムーズな移行を図るためのIRの活用

休憩



休憩時間 13:40~13:45

（時間厳守でお願いします）

**13:45** までに、

当会場へお集まりください。

ワークショップ解説

作業解説



## 休憩



休憩時間 15:35~15:45

(時間厳守でお願いします)

**15:43** までに、

当会場へお集まりください。

## グループ発表

## アンケート

### 研修の評価

(総合ポストアンケート)

皆さんの感想をお聞かせください。  
書き終わった方は、手を上げてください。

## 提出物について

- グループプロダクト
  - WSについて、「まとめの表」(様式指定)及び成果(任意様式)についてまとめてください。  
ボリューム(分量)などに特に制約はありません。
- グループ代表の感想
  - WSについての感想を、400字程度でまとめてください。
- 全学FD委員の感想
  - 全学FD委員としての感想を、400字程度でまとめてください。
- 提出期限・提出先
  - 提出期限：9月9日(月)
  - 提出先：学務部教務企画課 FD研修担当  
\* fd-kensyu@hoku-iryo-u.ac.jp

2019年度  
全学FD研修(テーマ編)

## 「閉会式」

修了証授与



全学FD委員会

2019年度  
全学FD研修(テーマ編)

## お疲れさまでした

ネームホルダーをお返し下さい。

忘れ物はないですか?



## レクチャー

本学における教学 | Rの整備・

活動状況と今後について

レクチャー

「本学における教学 I R の整備・活動状況と今後について」

I R 推進センター長 安部 博史

《メモ》

話題提供

## 各学部における学生支援の状況

レクチャー

「本学における教学 I R の整備・活動状況と今後について」

I R 推進センター長 安部 博史

《メモ》

話題提供

「各学部における学生支援の状況」

《メモ》

①薬学部 木村 真一

②歯学部 門 貴司

③看護福祉学部 西 基

④心理科学部 西郷 達雄

⑤リハビリテーション科学部 宮崎 充功

# 薬学教育支援室とIR

2019.8.9 (金)

薬学部 教育推進講座・薬学教育支援室  
木村 真一



近年、大学生の学力低下がいわれている。  
本学薬学部においても学生の基礎学力の低下および  
成績上位層と下位層の差が広がり、問題となっている。

本学ではその対策の一つとして個別または少人数制  
の学修支援を目的とした**薬学教育支援室**を  
2011年10月に設置した。

### 薬学教育支援室とは？ 設立の目的

**低学力の学生の学修支援（リメディアル教育）**  
特に低学年  
少人数の補講、個別指導

**4年時 CBTの支援 CBTと国家試験のコーディネート**  
少人数の補講、個別指導

### 教育支援室に専任の教員を配置

2011年：吉村教授、木村（真）の2名体制でスタート  
2019.現 3名体制

吉村教授：2011-2014
豊田教授：2015-2016
田原講師：2013-2017

小田教授：有機化学全般  
中川教授（2019.4赴任）：生化学全般  
木村：薬物療法全般（薬理・病態）

### 薬学教育支援室

薬学棟 3F 学生実習室の向かい  
開室時間  
月曜～金曜 9：30-19：00

**教員室・個別指導スペース**

### 学習室-B

PC6台設置（CBT用）  
教科書、参考書など

### 薬学部に関わるIR（教育関連データ）

入学試験関連（入試の種類：推薦、一般、センター）  
国家試験関連、ストレート合格率（本学、全国）  
卒業試験関連  
共用試験関連（4年時 CBT, オスキー）  
定期試験、再試験、模擬試験（学年・科目毎）

**プレースメントテスト、学力到達度試験**

留年、休学、退学、出席率 他

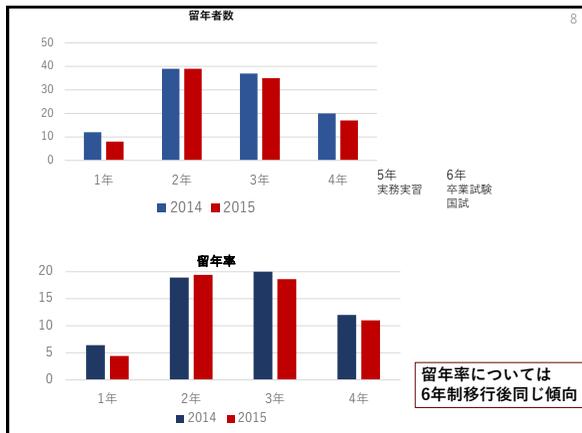
## 支援室設立当初（設立以前）から活用しているデータの一部

各学年の留年者数（留年率）

各学年の科目毎の試験結果（定期試験、再試験）

**対象学生（力を入れるべき）はどの学年？**

**学生の苦手な科目は？**



留年率については薬学部6年制移行後同じ傾向  
(2011年～2015年頃)

2006年：6年制課程  
2012年：6年制課程国家試験

低学力の学生の学修支援

**特に2,3年を中心とした個別指導**

薬学教育支援室とは？ 設立の目的

低学力の学生の学修支援（リメディアル教育）

**特に低学年**

少人数の補講、個別指導

4年時 CBTの支援 CBTと国家試験のコーディネート

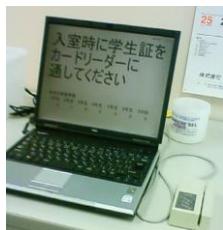
少人数の補講、個別指導

2,3年生を中心に学修支援（指導）をすべき！？

**実際に支援室を利用している学生は？**

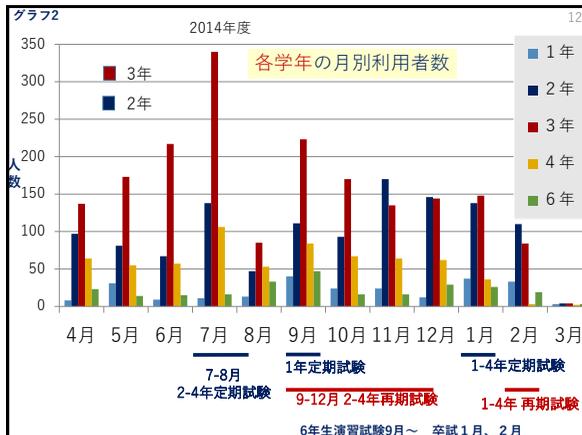
学生の支援室の利用状況を利用者数から解析

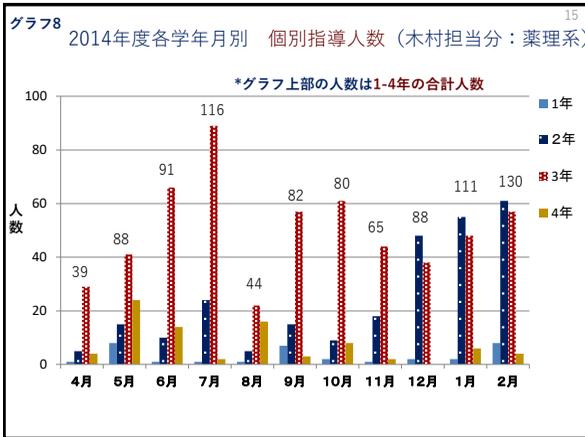
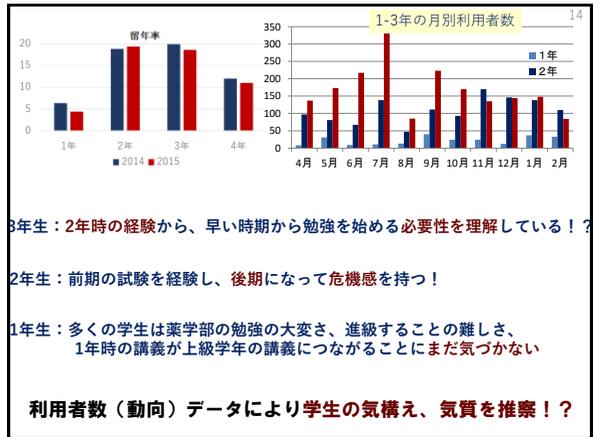
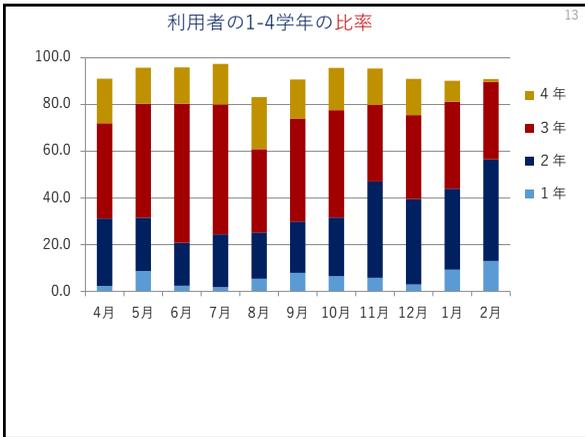
学生に支援室利用時に学生証をカードリーダーに通してもらおう



1日一回、入室時、退室時でも可  
学生証不携帯の際は  
入室カードを記入

利用者記入用紙	
月日	月 日
学生番号	
学年	1 2 3 4 5 6





16

支援室開室から数年間、支援室を利用する学生の動向は同じ傾向

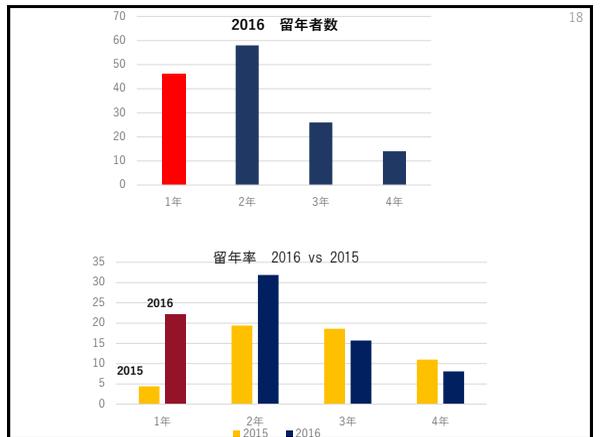
同じ傾向だが年々少しずつ**変化の印象**

質問、学修相談に来るタイミング、時期が後ろにシフト？  
 定期試験前に来る学生は比較的成绩が良い学生が増加？  
**再試験直前に来る学生が増加？**

ここ数年で支援室利用学生の動向に**明らかな変化の印象**  
 (利用者、質問、相談に来る学生のタイミングなど)

17

2016年度に  
 大きな変化が**数値**として...



2016年度 第1学年から薬学コアカリキュラム改定

旧カリキュラムで開講されていた講義の一部が  
下級学年(1年時)へ移行

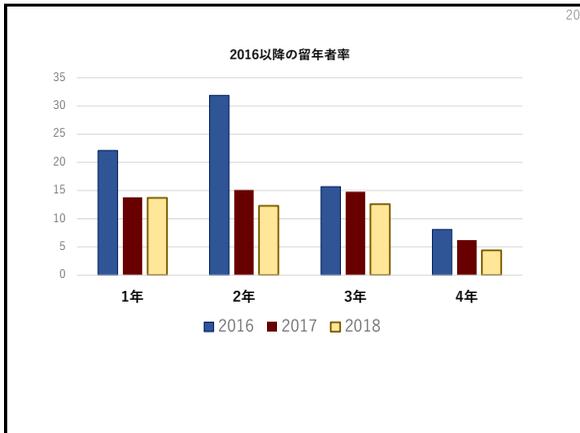
薬学部6年制課程設置(2006年)から徐々に学生の学力低下  
2015年、2016年あたりで一度底をつく(?)

入学試験の実質倍率も2015年から低下



カリキュラムの改定?  
学生の学力の低下が顕著  
入試難易度が低下

?



2016以降の留年者率は改善されているが、、、

依然、1年時での留年者多数

複数科目の未修得者増加 (ギリギリかろうじて進級)

学力低下に加え、学生の気質の変化? 多様化?

積極的に教員(支援室および各科目教員)に相談、  
質問に来る学生が以前より減少?

近年の学生に対応すべくさらなる支援室の対応  
および学部全体での対応が必要

支援室主催 講習会

\*支援室主催の講習会は設立当初から開催

年度	開催月	回数	受講者数	学年
2017年度	7月	2回	175	2年生
	10月	1回	51	3年生
	11月	2回	116	3年生
	12月	4回	207	1、2年生
	1月	4回	336	1年生
	受講学生 計			889名
2018年度	7月	1回	140	2年
	11月	1回	38	3年
	12月	3回	120名、110名、53名	283 1,2年
	2月	2回	130名、110名	240 2年
	受講者計			701

2017年度から小田先生(1年後期基礎有機化学担当)が支援室へ  
有機化学の個別指導は試験日近くは土曜日でも対応

複数科目の試験不合格者  
未修得者増加

留年者に加え、進級したが未修得科目  
が複数(3-5科目)ある学生が増加

平成30年度					平成31年度				
受験者数	合格者数	不合格者数	合格率 (%)	平均点	受験者数	合格者数	不合格者数	合格率 (%)	平均点
182	89	93	48.9%	53.7	184	119	75	61.3%	63.0
183	115	68	62.8%	57.3	194	78	116	40.2%	44.3
183	142	41	77.6%	72.1	193	92	101	47.7%	56.5
183	167	16	91.3%	82.1	192	157	35	81.8%	72.1
183	59	124	32.2%	50.1	194	98	96	50.0%	54.8
183	92	91	50.3%	60.4	194	164	30	84.5%	73.2
183	90	93	49.2%	59.9	194	164	30	84.5%	72.6
183	95	88	51.9%	56.4	193	111	82	57.6%	56.5
177	91	86	51.4%	58.4	193	127	66	65.8%	67.6
183	110	73	60.1%	59.7	194	57	137	29.3%	48.4
183	157	26	85.6%	72.7	194	133	61	68.6%	66.5

## 科目担当教員（支援室教員以外） による支援室での個別指導



科目担当教員による支援室での個別指導  
(支援室教員以外)



### 薬学教育支援室からのお知らせ

学生への掲示

6/25(月)から各科目の担当教員が支援室内中央の教員室(薬3F)において  
教科毎の質問などを受け付けます。(講義内容、問題の解き方、勉強方法など)是非ご利用下さい。

0月	月 25	火 26	水 27	木 28	金 29
	土田先生 15:30-17:00		村井先生 15:30-17:00	吉村先生 14:30-18:00	佐藤先生 15:30-18:00
7月	2	3	4	5	6
	浜上先生 15:30-18:00	吉村先生 15:30-18:00	村井先生 15:30-17:00	吉村先生 15:30-18:00	青木先生 14:30-18:00
	9	10	11	12	13
	浜上先生 14:00-16:00	青木先生 13:30-16:00	鈴木(一)先生 13:00-18:00	佐藤先生 15:30-18:00	鈴木(一)先生 13:00-16:00
	土田先生 16:00-18:00				

青木先生 基礎生化学、解剖生理学IIII、分子細胞生物学の青木先生担当範囲  
吉村先生 物理化学I、分析化学  
村井先生 分析化学『数値計算とグラフの描き方』  
鈴木(一)先生 化学全般、有機化学、分析化学、物理化学  
浜上先生 解剖生理学IIII、基礎生化学の浜上先生担当範囲  
佐藤先生 機微分析化学  
土田先生 基礎生化学の土田先生担当範囲

7,8月初旬 2-4年定期試験、  
未修得試験  
8下旬,9月初旬 1年定期試験

### 8-9月(主に1年生の定期試験に対応)

8月	月	火	水	木	金
	20	21 鈴木(一)先生 13:00-18:00	22 鈴木(一)先生 13:00-18:00	23 原田先生 13:00-16:00	24 長谷川先生 14:00-17:00
	27 原田先生 13:00-16:00	28 鈴木(一)先生 13:00-18:00	29 基礎生物薬(調) 数学試験	30 長谷川先生 14:00-17:00	31 近藤先生 13:00-16:00
9月	月	火	水	木	金
	3 物理学試験	4 生物学試験	5 基礎薬学概論 オーフェンブリッシュ 新岡先生 14:00-16:00	6 運動科学 基礎生理試験	7 化学通論試験
	10	11	12	13	14

### 2018年度 科目担当教員(支援室教員以外)による支援室での個別指導

開催月	対象学年	担当教員数	開催日数	
6,7月	2-3年	15	14	前期定期
8,9月	1年	16	10	
10月	1-3年	13	6	前期再試
11月	1-3年	10	9	
12月	1-3年	7	3	前期再試 後期定期
2月	1-3年	25	13	
計		86名	55日	後期再試

### 今後

支援室のみならず学部全体で学習支援を考え、実行。

教員間(支援室教員と科目担当教員も含む)の情報の共有  
特に試験結果(合否のみならず素点も)、未修得科目数の数、  
講義出席率等のIRデータのさらなる活用

学生の気質にある程度、柔軟に対応が必要  
講習会、勉強会、補講などの開催を増やす。

**薬学部における学修支援とIR、取り組みが  
他学部ならびに本学全体の教学に関して  
なにかの参考になれば幸いです。**

また、今後、薬学教育支援室におよび薬学部の学修支援  
になにかご教示、suggestionいただけますと幸いです

**ご清聴ありがとうございました**

歯学部資料は個人情報を含む内容があるため未掲載

## 男子看護学生の卒業率の推定

著者	西 基
雑誌名	北海道医療大学看護福祉学部学会誌
巻	10
号	1
ページ	3-7
発行年	2014-03-31
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1145/00010381/">http://id.nii.ac.jp/1145/00010381/</a>

[原 著]

## 男子看護学生の卒業率の推定

西 基

北海道医療大学看護福祉学部看護学科生命基礎科学講座

## 要 旨

看護学を学ぶ男子学生は、しばしば学生生活上の困難を経験することから、「政府統計の窓口」に公表されている資料を元に、最近数年間の大学・短期大学3年課程・看護師3年課程それぞれにおいて、入学者がストレートで卒業する割合などを、男女別に推定した。いずれにおいても、卒業生およびストレートで卒業した者における男子学生の割合は有意に少なく、卒業延期者や前年度卒業延期者においては、男子学生の割合は有意に多かった。男子学生のストレート卒業率は、大学で87.1%、短期大学3年課程では79.3%、看護師3年課程では77.7%で、いずれも女子学生より有意に低かった。男子学生に対しては、教員や職員の様々な支援が必要であると考えられた。

## キーワード

看護学校、政府統計の窓口、卒業、男子。

## 緒言

男性と女性の労働や社会における役割の平等化を目指して、1985年には男女雇用機会均等法が、1999年には男女共同参画社会基本法がそれぞれ制定されたが、この流れを受けて保健師助産師看護師法も改正され、2002年3月からは性別に関係なく「看護師」との名称が用いられるようになった。このような社会改革の効果もあって、従来、女性がほとんどであった看護の場において、男性看護師が活躍する場面は拡大しつつあり、各種の学校において看護学を学ぶ男性は従来よりは多くなっている。

ところが、現在に至るまで、大学においても専門学校においても、看護学生の大部分は女性であって、男性の看護学生（以下、男子学生）は、そのような中で、他の学科や学部などでは見られないような困難な状況に置かれていることが少なくなく<sup>1-3)</sup>、そのことが学業を完遂し得ない事態を招く場合すら見受けられる。

本論文においては、政府が公表している資料から、大学・短期大学3年課程・看護師3年課程の3種類の養成所において、4年間または3年間で卒業する割合などを男女別に検討した。

## 資料および方法

インターネット上の「政府統計の窓口」の中の「看護師等学校養成所入学状況及び卒業生就業状況調査」

## &lt;連絡先&gt;

西 基

〒061-0293 北海道石狩郡当別町金沢1757

北海道医療大学看護福祉学部看護学科生命基礎科学講座

TEL：0133-23-1211 内線 3642

<http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?lid=000001102798>によった。ここには2007年度から2012年度までの資料がエクセルの形式で示されている。このため今回の計算はすべてエクセルにより行った。この資料のうち、「入学者数」「卒業生数」「卒業延期者数」「前年度卒業延期者数」の数字を使用し、「大学」、「短期大学3年課程」および「看護師3年課程」について検討した。

この資料において、「2012年度」の卒業として表示されているのは、調査が4月から6月にかけて行われ、かつ「2012年度の資料」として2012年11月14日に公表されていることから、2012年3月に卒業した者のことである。「2008年度」の入学として表示されているのは、同様の理由により、2008年4月に入学した者のことである。

大学については、例えば2012年度に卒業した者に対しては、2008年度の入学者数と2010年度の編入入学数を合計した数を、短期大学3年課程および看護師3年課程については、例えば2012年度卒業に対しては2009年度の入学者数を、それぞれ対応させた。また、元の資料には、総数と男子の数が示されているので、女子の数はこれらの差とした。

大学では4年間で、短期大学3年課程および看護師3年課程では3年で卒業（ストレート卒業）した者の、当初の入学者数における割合を求め、これをストレートで卒業した数の、入学者数に対する割合とした。

例えば、2012年度の前年度卒業延期者数と2011年度の卒業延期者数との差は、2011年度の卒業延期者のうち、2012年度に卒業した者の数を表している。短期大学3年課程の、2011年度の卒業延期者数は201人、2012年度の前年度卒業延期者数は166人であったから、こ

の差の35人は2012年度に卒業したと見なした（現実には、この35人の中には、退学した者がいる可能性があるが、その数はそれほど多いとは考えられないため、今回は無視した）。この数を2012年度の卒業生数1947人から差し引いたものを、ストレートで卒業した人数（1912人）とした。この値を2008年度入学者数2261人で割った84.6%を、2008年度に短期大学3年課程に入学した者がストレートで卒業した割合（ストレート卒業率）とした。

このようにして算出した数字を、大学では2011・2012年度の2年間の卒業につき、短期大学3年課程および看護師3年課程では、2010・2011・2012年度の3年間の卒業につき、それぞれ通算した。 $\chi^2$ 検定を使用して、男女の差を検討した。

**結果**

**1. 男女を合わせた全体の中で男子学生が占める割合を指標とする検討**

表1・2・3に大学・短期大学3年課程・看護師3年課程の結果をそれぞれ示す。入学時に男子学生の占める割合は、それぞれ10.2%、9.6%、12.0%であった。もし、男女の間において、卒業までに差が生じなかったとすれば、卒業生、卒業延期者、前年度卒業延期者、卒業延期から次年度に卒業した者の中において男子学生が占める割合は、入学時と同じとなるはずである。例えば、表1の「大学」において、入学者に占

める男子の割合は10.2%であったから、その1行下にある卒業生数の総数27509に、10.2%を掛けて得られる2793.2が男子の期待値となる。実際の卒業生数は2622であったから、期待値と実測値を使用して、 $\chi^2$ 検定を行うと、 $\chi^2$ 値は10.5となる。他の項目についても、また、短期大学3年課程・看護師3年課程についても同様の計算を行ったが、いずれの養成所においても、卒業生およびストレートで卒業した者における男子学生の割合は有意に少なく、卒業延期者、前年度卒業延期者および卒業延期から次年度に卒業した者においては、男子学生の割合は有意に多かった（すべて $P < 0.01$ ）。

**2. ストレート卒業率**

次に、男子・女子それぞれの中においてストレート卒業率を算出したところ、男子学生のストレート卒業率は、大学では87.1%であったが、短期大学3年課程では79.3%、看護師3年課程では77.7%と、8割を切っていた。これに対し、女子学生は、大学・短期大学3年課程・看護師3年課程の順にストレート卒業率は低下したものの、いずれも9割前後の数字であった。男子学生より差は小さかった。いずれの学校においても、男子学生のストレート卒業率は、女子学生より有意に低かった（すべて $P < 0.01$ ）。

**表1. 2011～2012年度卒業の通算結果, 大学**

	総数	男子	女子	男子の割合 (%)
2007～2008年度入学者数+2009～2010年度編入入学者数	29280	2973	26307	10.2
2011～2012年度卒業生数	27509	2622	24887	9.5 -*
2010～2011年度卒業延期者数	1544	348	1196	22.5 +*
2011～2012年度前年度卒業延期者数	1441	315	1126	21.9 +*
2010～2011年度卒業延期から2011～2012年度に卒業した者の数	103	33	70	32.0 +*
2011～2012年度卒業生のうち4年で卒業した者の数	27406	2589	24817	9.4 -*
2007～2008年度入学者数に占める割合 (%)	93.6	87.1	94.3 -*	

+\* :  $P < 0.01$ ,  $\chi^2$  検定, 男子が有意に多い  
 -\* :  $P < 0.01$ ,  $\chi^2$  検定, 男子が有意に少ない

**表2. 2010～2012年度卒業の通算結果, 短期大学3年課程.**

	総数	男子	女子	男子の割合 (%)
2007～2009年度入学者数	6528	629	5899	9.6
2010～2012年度卒業生数	5768	512	5256	8.9 -*
2009～2011年度卒業延期者数	512	84	428	16.4 +*
2010～2012年度前年度卒業延期者数	450	71	379	15.8 +*
2009～2011年度卒業延期から2010～2012年度に卒業した者の数	62	13	49	21.0 +*
2010～2012年度卒業生のうち3年で卒業した者の数	5706	499	5207	8.7 -*
2007～2009年度入学者数に占める割合 (%)	87.4	79.3	88.3 -*	

+\* :  $P < 0.01$ ,  $\chi^2$  検定, 男子が有意に多い  
 -\* :  $P < 0.01$ ,  $\chi^2$  検定, 男子が有意に少ない

表 3. 2010～2012年度卒業の通算結果, 看護師 3 年課程.

	総数	男子	女子	男子の割合 (%)
2007～2009年度入学者数	70477	8480	61997	12.0
2010～2012年度卒業生数	61286	6726	54560	11.0 -*
2009～2011年度卒業延期者数	5708	1045	4663	18.3 +*
2010～2012年度前年度卒業延期者数	5101	912	4189	17.9 +*
2009～2011年度卒業延期から2010～2012年度に卒業した者の数	607	133	474	21.9 +*
2010～2012年度卒業生のうち3年で卒業した者の数	60679	6593	54086	10.9 -*
2007～2009年度入学者数に占める割合 (%)	86.1	77.7	87.2 -*	

+\* : P<0.01,  $\chi^2$  検定, 男子が有意に多い  
 -\* : P<0.01,  $\chi^2$  検定, 男子が有意に少ない

3. 2007～2012年度入学者の年齢分布

表 4 に2007～2012年度入学者の年齢分布を示す。大学・短期大学3年課程・看護師3年課程いずれにおいても、男子学生は20歳代および30歳代が有意に多かった。

考察

この方法には、最終学年以前に留年した者の数が考慮されていないが、元となった資料からは、この数字を推定できない（各年の在学者数の数字があれば、各年の入学者数は掲載されているため、推定は可能であるが、この数字もない）。従って、実際のストレート卒業率は、今回の方法で算出した数字より数%低いと考えられる。

大学において、編入生単独の卒業数が示されていないため、今回は一般入学生と編入生を合計したが、入学した編入生は1837人であって、全体の約6%しかいないため、比較的留年や退学が比較的少ないと考えられる編入生が、今回の結果に及ぼす影響は小さいと考えられる。

今回の検討は、男女を合わせた全体の中で男子学生が占める割合についてのもの（横断的な検討）と、入学した男子・女子それぞれの集団のどれほどがストレートで卒業したか（コホート調査的な検討）、の2つの方向で行ったが、いずれの検討においても、男子学生が女子学生より進級や卒業が遅れがちであること

が示された。

松田ら<sup>4)</sup>は、男子看護学生の経験として、「女子学生との交流に困惑する」「常に寂しさや孤独感を感じる」「女子学生とは異なる配慮や待遇を受ける」など、ネガティブな経験が少なくないことを指摘している。また、飯高・多喜田<sup>1)</sup>は、8名の男子学生に対し面接を行って、男子学生は「少人数のために肩身が狭いと感じた」「演習や実習では性差を意識する場面が多く…不安や葛藤を体験した」と報告している。この研究の対象となった8名の男子学生は大学の4年生であったから、それまでに退学などを経験せずに4年まで進級できた、いわば「それまでの淘汰の試練に耐えて生き残った」者であるため、精神的に強い者のみが選択されたというバイアスが存在すると考えられる。にも拘わらず、相当な困難を感じているという結果が得られたことから、当初入学してきた男子学生の集団全体として考えると、つまり「淘汰の試練に耐えられなかった」者までを含む集団として考えると、大多数の男子学生が入学後に大きな困難を感じるものと判断される。実際、百田<sup>5)</sup>は、自身の経験として、「男子学生のために…さまざまな配慮をしていただいたと思います。しかしながら私は、相変わらず看護には興味を持って…成績は散々でした」と述べている。その後、百田は、卒業研究への取り組みや指導教官からの後押しなどを通じて積極的姿勢に転換した、と述べているが、実際には、男子学生においては、姿勢を積極的な

表 4. 2007～2012年度入学者の年齢分布 (%)。

		20歳未満	20～29歳	30～39歳	40歳以上	計
男子	大学	88.0 -*	10.1 +*	1.6 +*	0.3	100
	短期大学3年課程	72.2 -*	21.0 +*	5.8 +*	1.1 +*	100
	看護師3年課程	56.4 -*	32.0 +*	10.9 +*	0.7 -*	100
女子	大学	95.8	3.3	0.7	0.2	100
	短期大学3年課程	90.0	7.0	2.4	0.7	100
	看護師3年課程	77.3	14.7	7.0	1.0	100

+\* : P<0.01,  $\chi^2$  検定, 男子が有意に多い  
 -\* : P<0.01,  $\chi^2$  検定, 男子が有意に少ない

ものへ逆転させることは容易ではないであろう。

大学・短期大学3年課程・看護師3年課程のストレート率を見ると、特に男子学生ではこの順に低下が著しかった。これが何に起因するのかは今回の研究では明らかにはできない。例えば、入学者の年齢分布は、3つの養成所いずれにおいても男子が「高齢」であったが、このことがストレート卒業率にどれほど寄与するのかを推定することは、限られたデータの中では不可能であった。男子の20歳未満の率は、3種類の養成所の間で最大約32ポイント、女子では最大約18ポイントも差があるが、ストレート卒業率の差は男子で最大約10ポイント、女子で約7ポイントであって、少なくとも年齢分布の違いがダイレクトにストレート卒業率の差に反映されてはいない。20～30歳代の学生が多くなると、彼らの中に連帯意識が生まれ、かえって精神的には好都合な状態となる可能性も考えられる。

堤・河村<sup>6)</sup>は、大学と専門学校の男子学生に調査を行った結果を報告しており、「授業・演習での女子学生との協力が困難が伴わない」とした割合は、大学で92.3%だったのに対し、専門学校では87.5%と低く、専門学校の男子学生がより困難を感じている結果となっていた。また、「他の男子学生とよくコミュニケーションを取っている」とした割合は大学で100%だったのに対し、専門学校では62.5%と低く、かつこれはかなり大きな差と考えられる。

ところが、飯高・多喜田<sup>1)</sup>の調査の対象は大学生、豊嶋ら<sup>2)</sup>および高橋ら<sup>3)</sup>の対象は専門学校生であったが、これらの報告を見る限り、男子学生が感じる困難については、大学も専門学校も、例えば「女子学生が多いため居場所がないと感じる」ことなど、両者の間に本質的な差は見出せない。また、短期大学3年課程と看護師3年課程とは同じ修業年限であるにも拘わらず、両者の間にも差があったことから、修業年限はあまり関係していないと考えられる。さらに、入学時の男子学生の割合は、看護師3年課程が、3者の中では最高の12%であって、男子の「マイノリティ」の程度は最も弱いことになることから、「同学年における男子学生の割合」が大きく関係しているとは言えない。従って、今回、大学・短期大学3年課程・看護師3年課程の間において、ストレート卒業率に差を生じたことは、学校の支援態勢などの差に基づいている可能性もある。ストレート卒業を阻害する要因が何であろうと、看護学科の男子学生に対しては、教員や職員の強力な支援が必要であると考えられた。

## 文献

- 1) 飯高直也, 多喜田恵子. 男子看護学生が大学生活で遭遇する困難な経験. 日本看護学会論文集. 精神看護 2011; 41: 155-158.
- 2) 豊嶋三枝子, 半田直子, 南雲美代子, 沼澤さとみ,

寺島美紀子, 高橋直美. 看護専門学校における男子看護学生の学生生活上の困難とメリット. 日本看護学会論文集. 看護教育2013; 43: 110-113.

- 3) 高橋順子, 高野みち子, 雑賀美智子. 女子看護学生との比較からとらえる男子看護学生が感じている学習上の困難. 四国大学紀要2010; (A)33: 161-168.
- 4) 松田安弘, 亀岡智美, 山下暢子, 鈴木美和, 野本百合子, 舟島なをみ. 看護における性の異なる少数者の経験. 看護研究 2004; 37(3); 253-262.
- 5) 百田武司. 男性看護師に期待される役割は変わったか. 看護教育 2011; 52(4); 279-283.
- 6) 堤かおり, 河村圭子. 男子看護学生が抱える女子看護学生間におけるストレス. 日本看護学教育学会誌 2007; 17: 247.

受付: 2013年11月1日

受理: 2014年3月6日

## Estimation of graduation rates of male students from nursing schools

Motoi Nishi

Department of Fundamental Health Sciences  
Health Sciences University of Hokkaido

### Summary

It is said that male students in a nursing school have various difficulties on leading their school life. Using the data on the internet published by the Japanese Government, graduation rates of male students from 3 kinds of nursing school (university, junior college of 3-year course, and vocational school of 3-year course). In all of these schools, rates of male students within graduates and within those who graduated in 3 (or 4) years were significantly low. Rates of male students within those who could not graduate and within those who could not graduate in the previous year were significantly high. 87.1% of male students graduated from a university in 4 years, 79.3%, from a junior college in 3 years, and 77.7% from a vocation school in 3 years. All of these rates were significantly lower than those of female students. Various supports to male students from professors and staffs are necessary.

Key words : graduation, governmental data, male, nursing school.

- ◎2001年看護学科入学生の2005年2月の看護師・保健師国家試験について  
 ○入試科目と保健師国家試験合格率（前期・センター前期・後期・センター後期のみ）  
 受験科目として選択したものを拾ったため、重複あり。

---

受験科目                      保健師国家試験合格率

---

化学+(n=16)	87.5%
生物+(n=36)	83.3%
国語-(n=29)	82.8%
数学-(n=31)	80.6%
数学+(n=33)	78.8%
化学-(n=48)	77.1%
国語+(n=35)	77.1%
生物-(n=28)	75.0%

---

化学・生物を選択した者は、国家試験合格率が高い。

- 合格発表前（卒業式の日）にアンケートした結果
- 

	看護師		保健師	
準備開始時期	合格	不合格	合格	不合格
4年1学期以前	58	17	40	10
夏休み以降	8	3	26	10
相対危険度	1.28		1.54	
<b>問題集（平均冊数）</b>				
購入数	3.6	3.1	1.8	1.7
やり通した数	2.9	2.4	1.2	0.8

---

準備開始時期・解いた問題集数で合格率に差が生じている。

◎2015年入学生の4学年における(2018年7月)「医教」看護師模試の結果

判定	得点率 (%)		
	解剖生理	社会医学	小児科
A(n=2)	87.5	70.8	61.1
B(n=34)	56.1	48.8	57.8
C(n=19)	48.2	45.2	55.0
D(n=34)	40.4	33.8	45.8

基礎科目(1・2年生で履修)の得点率の差は大きい。

臨床科目(3年生で履修)の得点率の差は小さい。

◎ほしいデータ(学科別, 過去20年, コホートとして)

- 各年度入学生の国家試験合格率
- 各年度入学生のストレート卒業率
- 各年度入学生の留年率
- 各年度入学生の退学率
- 各年度入学生の入学者数
- 各年度入学生の仮進級者数

◎IRで分析してほしい項目(学科別, 過去20年, コホートとして)

1. 入試関係

- 入試形態(一般, センター, AOなど)と
- 国家試験合格率, ストレート卒業率, 仮進級者率
- 受験科目と
- 国家試験合格率, ストレート卒業率, 仮進級者率

2. 第1学年での履修科目(特に化学・生物)

- 第1学年での化学・生物の履修の有無と
- 国家試験合格率, ストレート卒業率, 仮進級者率

3. 仮進級経験者と留年経験者

- 仮進級経験者の国家試験合格率
- 留年経験者の国家試験合格率

(20190809 看護福祉 西)



2019年8月9日 (金)

### 2019年度全学FD研修

「学生を中心とした教育をすすめるために」  
「IRを活用した学生支援の方法」  
～臨床心理学科における学生支援の状況と  
今後のIRの取り組みについて～

北海道医療大学 臨床心理学科  
助教 西郷 達雄

1

## アジェンダ

1. 現在の学生支援体制とIR
2. 休退学予防研究について
3. 臨床心理学科における休退学予防を目的としたIRの利用

2

### 現状の学生支援体制とIR①

#### (1) 担任制度

- ・教員1名につき10～15名程度の担任制度を敷いている。
- ・1年次「基礎ゼミナール（Fresher's講座）」にて面談あるいは交流を持つシステムとなっている。
- ・3年次になった段階で、担任へ引き継ぎを行う。

#### (2) キャリア形成支援

- ・キャリア・プランニングI～IVの授業が2年生から4年生にかけて行われ、キャリアの形成を促進する。

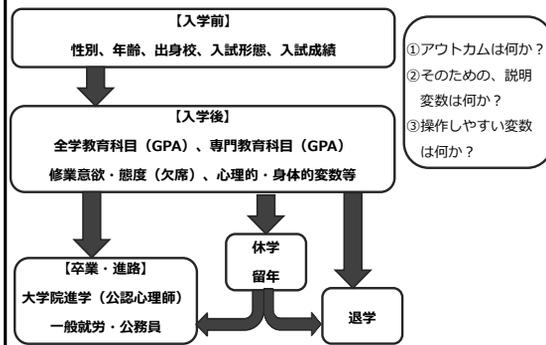
#### (3) 教育支援室の開室

- ・中央講義棟9Fに教育支援室を常時開室する。

#### (4) 障がい学生支援コーディネーターの設置

- ・障がい等を有する学生に対する支援、関係各所への連絡。

### 現状の学生支援体制とIR②



### これまでの休退学予防研究について

#### (1) 1年目のGPAから退学を予測できるか?

⇒研究1：全学教育実態調査（2007年）

#### (2) 健康診断の受診の有無がGPAを予測できるか?

⇒研究2：前向きコホート研究による大学入学時の健康診断とGPAの検討（2012）

#### (3) 援助を求めると行動がGPAと関連するか?

⇒研究3：学業成績、不安および抑うつと大学1年生の援助希求行動との関連（2015）

#### (4) 修学困難感とGPAの関連について

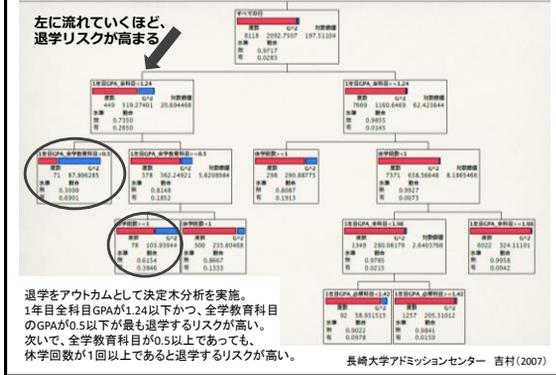
⇒研究4：修学困難感とソーシャルサポートが精神的健康と学業成績に与える影響：医療系大学生を対象とした横断的研究（2017）

### 指標：GPAの算出方法について

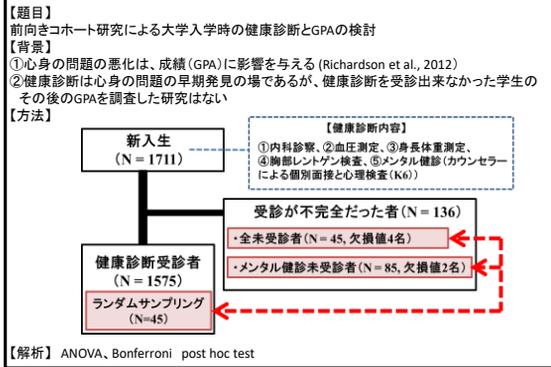
I教科の点数	評価	有効単位(4段階)
100～90	AA	4
89～80	A	3
79～70	B	2
69～60	C	1
59点以下	D	
失格	出席回数を満たさず、試験を受けることが出来ない	
欠席	試験を欠席	

$$GPA = \frac{(AA取得単位数 \times 4) + (A取得単位数 \times 3) + (B取得単位数 \times 2) + C取得単位数}{履修登録単位数}$$

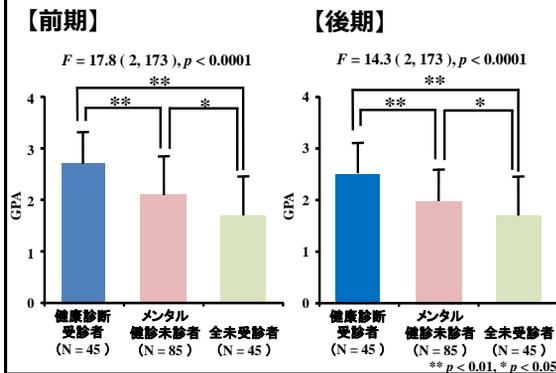
### (1) 1年目のGPAから退学を予測できるか？



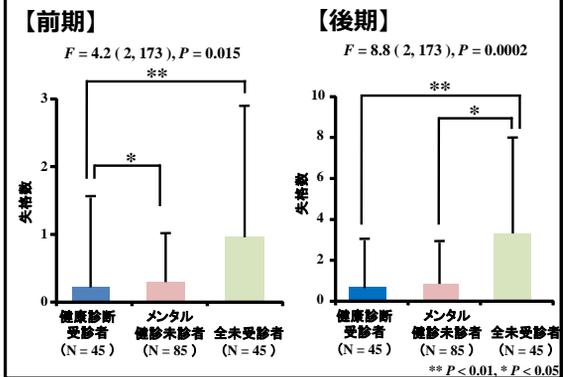
### (2) 健康診断の受診の有無がGPAを予測できるか？



### 健康診断受診者と未受診者の成績 (GPA)



### 健康診断受診者と未受診者の成績 (失格)



### (3) 援助を求める力と行動がGPAと関連するか？

【題目】  
学業成績、不安および抑うつと大学1年生の援助希求行動との関連

【背景】  
①精神障害は、大学生の休退学や修業に影響を与える (Richardson et al., 2012)  
②うつ病や抑うつ症状は、学業成績に影響を与える。(Hysenbegasi et al., 2005)  
③大学1年生はソーシャルサポートの欠如によるストレスによって成績不良や心理的苦痛につながる可能性がある (DeBerard et al., 2004)  
④日本では大学生の援助希求行動に関する研究は多少あるものの、学業成績との関連について調査した研究は少ない。

※「援助希求行動」人が悩みや心配事を抱えて自分ででは解決しきれないと感じた時に、誰かに相談したり、助けを求めたりする行動

【方法】  
対象: 大学1年生410名  
指標: 一般的援助希求尺度日本語版 (GHSQ)、学業成績 (GPA)、不安と抑うつ症状 (HADS)。

【解析】  
分析: 援助希求行動の高低によって、学業成績および抑うつ症状、不安症状に差があるかどうかを検討するために層別化解析をおこなった後に検定を実施した。また各変数の相関係数を算出した。

### 結果①

変数	(N = 343)	援助希求行動(悩み)		援助希求行動(希死念慮)	
		高群 (N = 171)	低群 (N = 171)	高群 (N = 171)	低群 (N = 171)
性別 (男性%)	61	55	64	43	63
年齢	19 ± 1	19 ± 1	19 ± 1	19 ± 1	19 ± 1
GHSQ					
援助希求(悩み)	29.2 ± 7.5	35.1 ± 4.4	23.3 ± 4.9**	32.4 ± 5.6	24.4 ± 4.9**
援助希求(希死念慮)	30.0 ± 9.8	35.5 ± 8.4	24.5 ± 7.7**	35.3 ± 5.7	21.0 ± 5.0**
HAD					
抑うつ	10.2 ± 3.1	9.7 ± 2.7	10.8 ± 3.4**	9.5 ± 2.5	10.9 ± 3.4**
不安	9.0 ± 3.4	9.2 ± 3.7	8.9 ± 3.2	8.7 ± 3.4	9.3 ± 3.3
学業成績 (GPA)					
Log 前期 GPA	0.40	0.41 ± 0.1	0.40 ± 0.1	0.42 ± 0.1	0.40 ± 0.1
Log 後期 GPA	0.38	0.41 ± 0.1	0.35 ± 0.2**	0.40 ± 0.1	0.36 ± 0.2**
Log 1年間総 GPA	0.40	0.42 ± 0.1	0.39 ± 0.1**	0.41 ± 0.1	0.39 ± 0.1

## 結果②

	援助希求 (悩み)	援助希求 (希死念慮)	抑うつ	不安	総GPA	前期GPA
援助希求 (希死念慮)	0.69**	—	—	—	—	—
抑うつ	-0.25**	-0.31**	—	—	—	—
不安	0.07	-0.13*	0.39**	—	—	—
総GPA	0.19**	0.07	-0.09	-0.09	—	—
前期GPA	0.09	0.04	-0.08	0.002	0.81**	—
後期GPA	0.19**	0.13*	-0.09	-0.003	0.85**	0.50**

## (4) 修学困難感はGPAと関連するか？

### 【題目】

修学困難感とソーシャルサポートが精神的健康と学業成績に与える影響：医療系大学生を対象とした横断的研究 (2017)

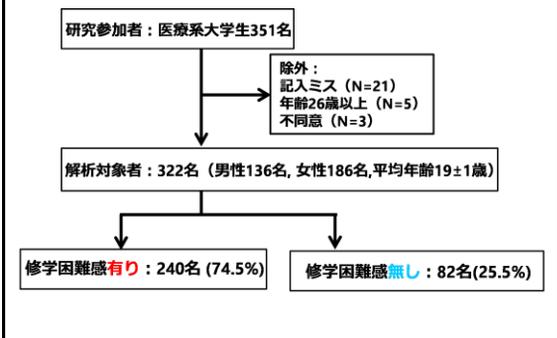
### 【背景】

- ①「学業意欲の喪失」が大学生の休退学理由として最も多い (全国大学メンタルヘルス研究会, 2016)
- ②修学集中困難感とは、修学に集中できていない状態のことを指す (Tayama et al, 2015)

### ◆修学集中困難感、ソーシャルサポート、学業成績、メンタルヘルスの関連について検討した【調査内容】

- 修学集中困難感の有無 (Tayama, et al., 2015)
  - 質問項目：修学には集中できていますか？
  - 回答方法：「はい」または「いいえ」
- ソーシャルサポートの有無 (Saito-Nakaya et al., 2006)
  - 質問項目：「現在、心配事などを相談したり気持ちを打ち明けたり、頼りにできる方がいらっしゃいますか？」
  - 回答方法：「はい」または「いいえ」
- 1年生の年間GPA (学業成績評価の平均点) をlogit変換し、分析に利用した
- メンタルヘルス指標
  - ・心理的苦痛 (K6) (Kessler, 2002)

## 結果① 図 対象者の選定



## 結果②

表 修学困難感有り群・無し群における各変数の比較

	全体 (N=322)	困難感有り群 (N=240)	困難感無し群 (N=82)	P value
性別：男性/女性	136/186	140/100	47/35	P < 0.01
年齢	19 ± 1	19 ± 1	19 ± 1	P = 0.74
ソーシャルサポート有り (%)		87	87	P = 0.97
logit変換-学業成績 (GPA)	0.44 ± 0.1	0.45 ± 0.1	0.44 ± 0.1	P = 0.69
心理的苦痛 (K6)	2.2 ± 3.0	2.0 ± 2.8	2.3 ± 3.0	P = 0.40

## 結果③

図1: 修学困難感有り群のソーシャルサポートの有無と学業成績の比較

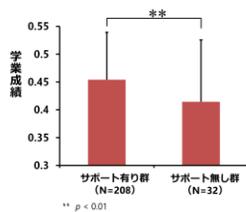


図2: 修学困難感無し群のソーシャルサポートの有無と学業成績の比較

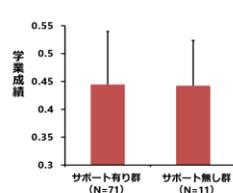


図1から、修学に集中できておらず、困難さを抱えていても、サポート体制が敷かれていれば、成績は落ちない可能性がある。

## 結果④

図3: 修学困難感有り群のソーシャルサポートの有無とK6得点の比較

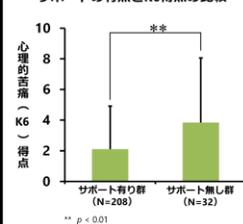


図4: 修学困難感無し群のソーシャルサポートの有無とK6得点の比較

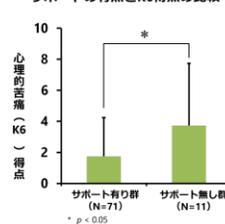


図4から、修学に集中できていても、ストレスを抱えている学生がいる可能性がある。

## 総合考察

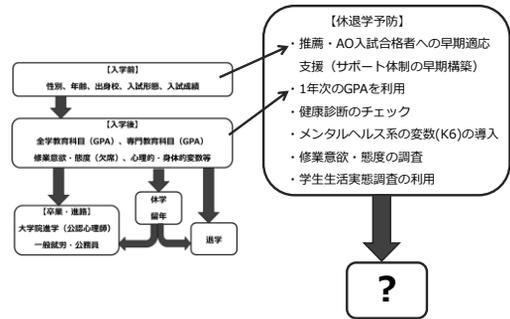
- (1) 1年目のGPAから退学を予測できるか？
- (2) 健康診断の受診の有無がGPAを予測できるか？

⇒1年前期で予測が可能だが、評価指標に何をを使うかは、あまり変動のない変数が望ましい。健康診断は医療人として必ず受診させるが、どこまで強制力を働かせるか？

- (3) 援助を求める力と行動がGPAと関連するか？
- (4) 修学困難感とGPAの関連について

⇒学内でのサポート体制は各学科において判断されるが、教育支援室やオフィスアワー、友達と勉強しやすい環境を整えるなどの工夫ができる。経験的には、まめな声かけだけで変わる（1年次から名前を覚える、休みがちになったら声をかける）

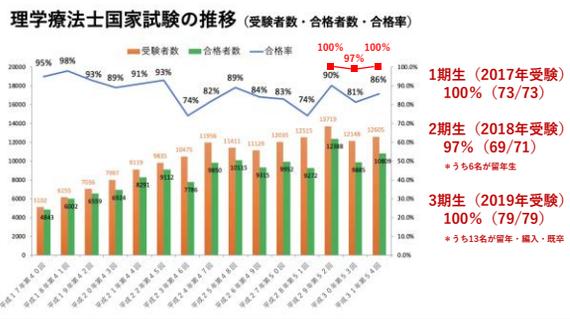
## 臨床心理学科におけるIRの利用



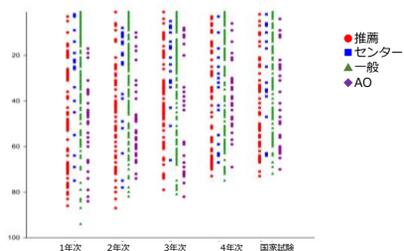
## 各学部における学生支援 の状況

リハビリテーション科学部 理学療法学科の事例

国家試験対策における要支援学生 事前抽出の試み



## 入試区分ごとの学内成績 (順位) の推移



リハビリテーション科学部 理学療法学科 (国試対策委員会) で運用している要支援 (要注意) 学生の選定基準

国家試験・模擬試験成績により判定

学内順位下位 20%  
全国順位下位 30%



**強制勉強会への参加義務を通通達**

**個人ごとに学習領域別の獲得点数 (得意・不得意科目) を精査し、  
学習指導をしていく (いわゆる個別対応)**

## ワークショップ

WS 1：オリエンテーション

WS 2：アイスブレイキング

WS 3：ワークショップのすすめ方

「IRを活用した学生支援の方法を考える」

全学FD研修 グループ編成

グループ(名称)	氏名【所属学部等】		FD委員
A ( ) 6名	柳川 芳毅 【薬学】	下山 美由紀 【福祉】	遠藤委員
	門 貴司 【歯学】	松本 望 【福祉】	會田委員
	西 基 【看護】	宮崎 充功 【理学】	
B ( ) 7名	小林 大祐 【薬学】	今井 常晶 【心理】	山口委員
	加藤 幸紀 【歯学】	西郷 達雄 【心理】	泉委員
	工藤 禎子 【看護】	坂上 哲可 【作業】	
	福間 麻紀 【看護】		
C ( ) 6名	高上馬 希重 【薬学】	竹生 礼子 【看護】	鎌田委員
	磯部 太一 【教推C】	西出 真也 【教推C】	野田委員
	中野 諭人 【教推C】	白鳥 亜矢子 【教推C】	
D ( ) 6名	町田 拓自 【薬学】	児玉 壮志 【作業】	長谷川委員
	石井 久淑 【歯学】	下村 敦司 【言語】	藏満委員
	唐津 ふさ 【看護】	吉田 繁 【検査】	
E ( ) 6名	藤崎 博子 【薬学】	長谷川 純子 【理学】	坊垣委員
	長澤 敏行 【歯学】	小林 健史 【言語】	森委員
	加藤 依子 【看護】	江本 美穂 【検査】	

グループの役割分担

【司会(リーダー)】WS作業の進行をリードする。

ゴールを把握して、進行スケジュールをデザインし、決められた時間内に作業が終了するようにリードする。

【書記(記録)】WS作業の進行で出てきた内容を記録(PC入力)して、作業に役立てる。

WSのプラダクトとなる発表内容を記録し、最終的に報告書の原稿となる資料を作成する。

\*後日、研修報告書の原稿として所定の期日までに事務課に提出する。

【発表者】各WSでのプラダクトを全体討論において発表する。

※: 発表・報告資料(原稿)の作成(まとめ)は、グループ全員が協力して行う。

司会	書記	発表者

## 2019年度 全学FD研修 <テーマ編>

学生を中心とした教育を  
すすめるために

- IRを活用した学生支援の方法 -



主催：全学FD委員会

共催：IR推進センター

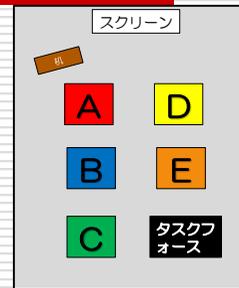


2019年8月9日（金） 当別キャンパス 中央講義棟

2019年度 全学FD研修（テーマ編）  
2019年8月9日（金） 当別キャンパス

各グループの場所にお座り下さい。

・お茶とお菓子は  
自由にどうぞ



主催：全学FD委員会

### 研修スケジュール

進行／荒川委員・會田委員

- 13:00 ワークショップ (C109)  
オリエンテーション、FD委員紹介  
アイスブレイキング (グループ作り)
- 13:40 休憩
- 13:45 「IRを活用した学生支援の方法を考える」  
グループワーク (110分)
- 15:35 休憩
- 15:45 グループ発表、全体討論
- 16:40 閉会・アンケート提出

### 研修スタッフ

学長	浅香 正博	北海道医療大学	学長
講師	安部 博史	北海道医療大学	教授 IR推進センター長
	タスクフォース		
	志渡 晃一	北海道医療大学	教授 全学FD委員長
	遠藤 泰	北海道医療大学	教授 全学FD副委員長
	泉 剛	北海道医療大学	教授 薬学研究科FD委員長
	會田 英紀	北海道医療大学	教授 歯学部FD委員長
	荒川 俊哉	北海道医療大学	教授 歯学研究科FD委員長
	森 伸幸	北海道医療大学	准教授 心理学部FD委員
	野田 昌道	北海道医療大学	教授 心理学研究科FD委員長
	山口 明彦	北海道医療大学	教授 リハビリテーション科学研究科FD委員長
	藏満 保宏	北海道医療大学	教授 医療技術学部FD委員長
	坊垣 暁之	北海道医療大学	教授 医療技術学部FD委員
	長谷川 敦司	北海道医療大学	教授 全学教育推進センター・薬学部
	鎌田 禎子	北海道医療大学	准教授 全学教育推進センター・看護福祉学部
事務局	三浦 清志	北海道医療大学	学務部長
	細川 洋美	北海道医療大学	学務部IR課

### 参加者のグループ分け

A	B	C	D	E
柳川教授 【薬】	小林准教授 【薬】	高上馬准教授 【薬】	町田准教授 【薬】	藤崎助教 【薬】
門准教授 【歯】	加藤講師 【歯】	竹生教授 【看】	石井教授 【看】	長澤教授 【歯】
西教授 【看】	工藤教授 【看】	磯部講師 【教推C】	唐津講師 【看】	加藤講師 【看】
下山講師 【福】	福岡講師 【福】	中野講師 【教推C】	児玉助教 【作】	長谷川講師 【理】
松本助教 【福】	今井講師 【心】	西出講師 【教推C】	下村教授 【医】	小林講師 【看】
宮崎准教授 【理】	西郷助教 【心】	白鳥講師 【教推C】	吉田教授 【医】	江本講師 【医】
-	坂上准教授 【作】	-	-	-

## アイスブレイキング



## アイスブレーキング

アイスブレーキングとは、初対面の人同士が出会う時、その緊張（アイス）をときほぐす（ブレーキング）ための手法。

集まった人を和ませ、コミュニケーションをとりやすい雰囲気を作り、そこに集まった目的の達成に積極的に関わってもらえるよう働きかける技術を指す。

アイスブレイクは自己紹介をしたり、簡単なゲームをしたりすることが多く、いくつかのワークやゲームの活動時間全体を指すこともある。

(Wikipedia)

## ウソ？ホント？① 作業解説

グループ単位で行います。

配布したシートに、自分の所属学部・氏名と、自分について知ってもらいたいことを3つ記入して下さい。ただし、3つのうちの一つは全くのウソを書き入れて下さい。（3分）

(例) わたしはとてもきれい好きです。  
わたしは辛い食べ物が苦手です。  
わたしは15歳までハワイに住んでいました。

あまりシリアスなウソは避けましょう。

## ウソ？ホント？② 作業解説

グループ内で一人ずつ自分の書いた内容を発表します。

他のメンバーは、3つの中からウソだと思う内容を考えながら話を聞きます。その後自由に質問して下さい。発表者は、質問に対して正直に回答して下さい（3分）。

講師の合図の後、メンバーはどれがウソだったか回答して下さい。全員の意見を聞き終わりましたら、発表者はどれがウソだったのかを話します（1分）

一人ずつ順番に行います。

それでは今から3分間で、自己紹介用シートに知ってもらいたいことを3つ記入して下さい。  
(必ずひとつはウソを記入してください)

発表順を決めてください。

「自己紹介と質問タイム」になります。開始の合図で「氏名、知って欲しいことの説明、引き続き質疑応答」を始めて下さい（3分間）。

「正解タイム」に入りましょう。メンバー全員の意見を聞いたら、本人は正しいものとウソを言って下さい。それではどうぞ！（1分間）

「ウソ？ホント？」の前と後で、メンバーの関係はどうなりましたか？

お互いの関係は変化したでしょうか。

各グループは、グループ名を決め、休憩に入ってください。

## 休憩



休憩時間 13:40~13:45

(時間厳守でお願いします)

**13:45** までに、

当会場へお集まりください。

# ワークショップ解説

## ワークショップの流れ

1. プレナリーセッション  
 全体 : 課題提示・作業解説  

2. スモールグループディスカッション  
 グループ : 課題について討論・プロダクト作成  

3. プレゼンテーション  
 全体 : 発表・討論  


## ワークショップの要件

1. 全てのメンバーが積極的な参加者になる
2. 参加者全員が Resource Person
3. 積極的に建設的、前向きな意見を述べる
4. どんな質問でも無意味ではない
5. あらかじめ決まった正解はない
6. 先生はいない
7. 開始時刻、発表時間を守る



## 役割

- 司会
    - グループ討論時の司会進行を行う。
  - 書記・PC入力
    - グループ討論時の書記（PC入力）を行う（プロダクト作成）
    - 作成したプロダクトはUSBに保存する。
  - 発表者
    - 全体発表時にグループプロダクトの発表を行う。
- 
- タスクフォース（TF）
    - グループ討論が効率的に討論・作業が進むように、サポートをする。
    - グループ討論のタイムキーパーも行う



役割分担をご確認ください。

セッション	司会	書記・PC	発表者
1	●●	▲▲	■
2	■	●●	▲▲
3	▲▲	■	●●

# 作業解説



## IRを活用した学生支援の方法を考える

- A. 卒業試験・国家試験合格率を上げるためのIRの活用
- B. 留年・退学・休学を減らすためのIRの活用
- C. 初年次教育をアジャストするためのIRの活用
- D. 全学教育から専門教育へスムーズに移行を図るためのIRの活用
- E. 臨床教育へのスムーズな移行を図るためのIRの活用

## IRを活用した学生支援の方法を考える

- 13:45~15:35 グループ討論(110分)
- 15:35~15:45 休憩
- 15:45~16:40 全体討論  
(発表5分、質疑2分×5グループ)  
(全体討論 20分)

## ワークショップ討論

- A. 卒業試験・国家試験合格率を上げるためのIRの活用  
→国試合格率の予想  
→国試の6年ストレート合格率の達成

## ベンチマーク (評価指標)

○第5学年での業者模試の偏差値を用いた要支援学生の抽出と早期対策



5年次にその後の経過を予測し、要支援学生を抽出することで本人および教員の気付きを促し早期に支援を行う事で合格できる軌道に乗せる。  
学年全体を年度比較することで、教育システムを早期に対応させる。

## ベンチマーク (評価指標)

6年次プレ模試全国偏差値と卒試国試の現役・卒延別結果					
◎過去2年分			◎過去1年分		
現役	89名				
5年次プレ模試偏差値50以上	45-49.9	40-44.9	35-39.9	35未満	卒延
87名	87名				
5年次プレ模試偏差値50以上	55-59.9	50-54.9	45-49.9	40未満	卒延
卒試	合格人数 55	11	1	2	卒試
	対象人数 59	15	12	10	
	合格率 93.2%	73.3%	8.3%	20.0%	合格人数 3
国試	合格人数 53	7	1	0	
	対象人数 59	15	12	10	
	合格率 89.8%	46.7%	8.3%	0.0%	対象人数 3
					合格率 66.7%

経過予測値 = 目標値  
教員も学生も目標を立てやすくなった

## まとめの表

解決する事項	使用するIRデータ	データの分析方法と結果	期待される結果
国試合格率の予想	5学年の業者プレ模試結果	偏差値分析(50以上)	国試合格率100%達成
	6学年の業者プレ模試結果	偏差値分析(50以上)	国試合格率95%達成
		偏差値分析(45以下)	国試合格率8%以下

## データベースの作成

### ○各学年での指標の探索

## まとめの表

解決する事項	使用するIRデータ	データの分析方法と結果	期待される結果
国試合格者の予想	CBTの結果	得点率 (75点以下)	国試合格 (不合格)
	1年前期の中間試験結果	得点率	国試合格
	卒試基準試験	得点率	国試合格

## ベンチマーク（評価指標）

### ○低学年での指標の探索

2013-2014		90以上	85-89.9	80-84.9	75-79.9	70-74.9	65-69.9	60-64.9	60未満
1年次中間平均得点率	ストレート人数	27	18	11	10	7	3	0	2
6年ストレート率	対象人数	28	23	14	14	15	9	9	17
	率	96.4%	78.3%	78.6%	71.4%	46.7%	33.3%	0.0%	11.8%
卒試合格率	合格人数	13	6	4	3	3	0	0	0
	対象人数	13	7	5	6	8	1	5	9
率	率	100.0%	85.7%	80.0%	50.0%	37.5%	0.0%	0.0%	0.0%
	合格人数	13	5	4	3	3	0	0	0
国試合格率	対象人数	13	7	5	6	8	1	5	9
	率	100.0%	71.4%	80.0%	50.0%	37.5%	0.0%	0.0%	0.0%

1年次の前期中間試験からその後の経過を予測し、今年度は夏季集中セミナーを実施  
各学年の指標となるデータを用いて、進級確率や卒試・国試合格確率を算出

## まとめの表

解決する事項	使用するIRデータ	データの分析方法と結果	期待される結果
国試の6年ストレート合格者の達成	1年の中間試験結果	平均点 (90点以上)	国試合格率 (100%達成)

# 休憩



休憩時間 15:35~15:45

(時間厳守をお願いします)

**15:43** までに、

当会場へお集まりください。

# グループ発表

## IRを活用した学生支援の方法を 考える

---

全体討論（15：45～16：40）

グループ発表 35分  
（発表5分、質疑2分×5グループ）

全体討論 20分

---

ワークショップ  
プロダクト・感想

### 【Aグループ感想】

今回のFD研修は「IRを活用した学生支援の方法」をテーマとしたものでAグループでは「卒業試験・国家試験合格率を上げるためのIRの活用」について討議された。

「IRとは大学の経営改善や学生支援、教育の質の向上のため学内データを収集・分析し、改善施策を立案、改善の実行・検証を行うといった広範な活動を指す」と午前中の講演で拝聴したが、具体的にはどういったものなのか、現時点においてどのようなデータがあり、どれくらいの蓄積があるのか、個人情報も含めどの程度利用可能なのか、データの信頼性はどの程度あるのかなど不明な点が多く、討議を進める過程において論点が二転三転し、まとまりのある見解がなかなか得られなかった。

国家資格の重要性、国家試験の難易度、国家試験対策については学部間で大きな隔たりがあり、IRの全学的に統一された活用形態を見出すのは困難であると感じた。国家試験を間近に控えた段階においては、全国を母集団とした学力を知る必要があり、直近の全国模試のデータを参考にすることが現実的であるというのが、本グループにおけるほぼ統一された見解であったように思われる。

薬学部 柳川 芳毅

### 【Bグループ感想】

今回で2回目となるFD研修であったが、昨年に比べると最初からテーマが振り分けられていたためか、スムーズに議論に入ることが出来た。WSに慣れている先生方が多く、役割分担もスムーズに進み、型にはまらないぎっくばらんな意見交換が出来たと思う。

Bチームのテーマは「留年・退学・休学を減らすためのIRの活用」であったが、休学や退学の原因が留年にあるとして対象を1.2年に絞っての議論となった。主たる要因を学業成績、出席状況、健康と生活、モチベーションにカテゴライズしIRを分析したが、現在不足している情報として、個別面談時に得られる個人情報と判断し全学統一の記名式アンケートを取ることを提案出来たことは今回の成果であったと思う。しかし、実行に移すには多くの壁を乗り越えなければならないであろう。

また、学生からの情報収集も大切だが、指導者側の姿勢についても議論に及んだ。特に喫煙や学生との対話など全学を挙げて取り込まなければならない課題も多いと感じた。この点については、教員一人一人の意識改革がカギとなるのではないだろうか。

リハビリテーション科学部 坂上 哲可

### 【Cグループ感想】

前半の講演会にて IR 推進センター長から IR の概要と学内外の動向、各学部から情報活用の実例の報告を受けた上で、WS では「初年次教育をアジャストするための IR の活用」について検討した。構成メンバーは全学教育推進センター教員 4 名と学部の専門の教員 2 名で各立場から活発な意見交換が行われ、初年度学生が抱えがちな生活面・学習面のトラブルに迅速に発見・対処するのに必要なデータを豊富なデータリストからピックアップできた。

当初、IR とは組織内の担当セクションが情報を一元管理し、すでに確立された手法に従って問題を発見し対応策を提言するものと認識していたが、本研修で実際は集約されたデータの運用・活用は各セクションに任されていることを知り、WS で行ったような個別のケース毎のデータ活用法の検討が重要であることが理解できた。

もし事前に IR について先進的な取り組みをしている大学での活用事例や、各学部における今後の IR 推進センターの情報の活用計画などについて情報提供があれば、WS での議論もより深めることができたのではないかと思う。

全学教育推進センター 中野 諭人

### 【Dグループ感想】

今回のFD研修のテーマは「IRを活用した学生支援の方法を考える」であったが、私はIRという言葉が最近知り内容は理解していなかった。講演を聴きIRの活用が学生、教員、大学を幸せにする可能性を感じた。その後、ワークショップに参加し「全学教育から専門教育へスムーズに移行を図るためのIRの活用」というテーマで各学部の現状や教員の考えを聞く事が出来た。学部は異なるが教育の課題は共通することが多いことから、IRを活用し課題解決のPDCAサイクルを回すシステムを構築することが本学の将来に大きく影響することを確信した。

しかしながら、膨大なデータの収集、管理、最適な統計手法の選択、データの解釈と活用方法など、僅かな教員の興味と善意では成し遂げることも持続させることも厳しいとも感じた。

今後、情報処理に長けた専任者の配置、環境整備など課題は山積だが、柔軟かつスピーディーに本学のIRが遂行されることを強く感じた研修会であった。

医療技術学部 吉田 繁

### 【Eグループ感想】

私たちの班は、IRから得られた情報をいかに有効に臨床教育と結びつけるかという課題に取り組みました。本学のように医療福祉専門職の有資格者を育てる大学においては、そもそも不本意入学の学生の場合、学習へのモチベーションが高まらないなどの問題が生じることがあります。また、個人的な要因等により学外での実習を持続できなくなる場合もあります。

特に臨床系の教員は、数値化し難い質的な点についても、学生をフォローしていく必要があると感じました。

リハビリテーション科学部 小林 健史

# **Aグループ 卒業試験・国家試験合格率を上げるための IRの活用**

**Aグループ**

**発表者:柳川(薬)**

**門(歯)、西(看)、松本(福)、宮崎(理)、下山(福)**

# 卒業試験・国家試験合格率を上げるための IRの活用 まとめの表

解決する事項	使用するIRデータ	データの分析方法と結果	期待される結果
国試・卒業試験の合格率の向上	<ul style="list-style-type: none"> <li>・直近の模試の結果</li> <li>・科目別の成績</li> <li>・CBTの結果</li> <li>・下級学年での成績</li> <li>・学生生活アンケート</li> <li>・欠席回数</li> <li>・精神面の把握テスト</li> <li>・入試選択科目</li> <li>・1年次の選択科目～化学、生物（看）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・模試の偏差値、得点率による選定</li> <li>・要支援学生の抽出、把握</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・支援方法の選択</li> </ul>

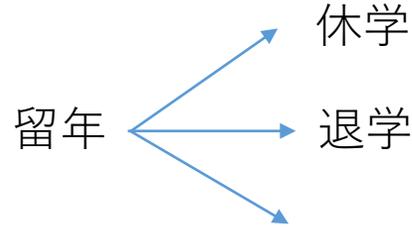
- \* どのようなデータが活用できるか判断したいため、使用できるデータを知りたい。
- \* 学部によって必要なデータが異なるため、自由に活用できるようなシステムを希望

未来・・・全データを集約してAIで分析・抽出 ？

# 留年・退学・休学を 減らすためのIRの活用

Bグループ

低学年（1, 2年生）の留年を減らす



留年の原因

1) 成績不振

2) 講義の欠席

3) 健康・生活

4) モチベーション

2) の原因  
アルバイト  
経済的状况  
奨学金

3) の原因  
喫煙  
病気（メンタル含む）  
友達関係（部活）  
援助希求

4) の原因  
満足度  
進路決定の方法

使用できるIR

入学時の成績  
高校での履修科目  
入学時テスト  
入学前教育の結果

学力  
アルバイト  
経済的状况  
奨学金

入学時全学共通アンケート（3、4）  
（記名式、担任対応時に数値化する）  
満足度  
不安度  
配慮して欲しいこと

前期試験、中間試験  
再試験数  
平均点  
順位

学生アンケート（記名式、健康診断と一緒に）

解決する事項	使用するIRデータ	データの分析方法と結果	期待される結果
1) 成績不振	入学時テスト結果 平均点 順位	前期試験、中間試験 結果との関係	不合格者の減少
	前期試験、中間試験 再試験数 平均点 順位	留年への影響 成績への影響	不合格者の減少

### 解決方法

リメディアル教育でリスクのある学生を早めに個別支援する。

解決する事項	使用するIRデータ	データの分析方法と結果	期待される結果
2) 講義の欠席	出席状況	留年への影響 成績への影響	欠席と留年、成績の関係が明らかになる
3) 健康・生活 4) モチベーション 勉強不安、相談必要性、経済的不安のある学生の抽出	入学直後アンケート結果 (新規、記名式、全学共通、担任対応時に数値化する) メンタルヘルス系の変数(K6)	カットオフを決める	留年、退学、休学に影響するリスクが明らかになる

### 解決方法

- リスクのある学生を早めに個別支援する。
- 相談しやすい状況をつくる。(声かけ、居場所を作る)
- 学生相談室の利用
- 担任の個別面談での活用

## 初年度教育をアジャストするためのIR活用(チームマンゴー)

解決する事項	使用するIRデータ	データの分析方法と結果	期待される結果
学力	1 高校の選択科目・成績 2 入試 3 入学時テスト 4 中間・前期定期	1 選択の有無・点数 2 区分、科目、成績 3、4 経年変化	低学力学生の早期発見 進級・国試合格率
生活	1 担任の面談 2 <u>勝ち負け表・志望動機</u> 3 入試形態 4 入学時テスト 5 入学前教育 6 高校の出席日数	1 数値化 2 3 -5 勉強のプランク 6	低動機学生の早期発見 心の問題

対策 カリキュラム作成・履修相談  
 教えあいによる学力向上と動機付け  
 学生相談室  
 専門教員との連携・早期体験（初年度教育と専門教育との関連）

## まとめの表（Eグループ）

解決する事項	使用するIRデータ	データの分析方法と結果	期待される結果
実習のドロップアウトを未然に防ぐ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ストレスチェック</li> <li>・メンタル検診</li> <li>・健康診断未受診</li> <li>・メンタルヘルス指標</li> <li>・出席日数, 遅刻</li> <li>・内申書の出席状況</li> <li>・奨学資金の情報</li> <li>・OSCE</li> <li>・自宅もしくは一人暮らし</li> <li>・担任が把握している生活状況（質的データ）</li> <li>・教員が気がかりと思うこと（質的データ）</li> </ul>		実習のドロップアウトがゼロ

# F D 委員感想

今回のFD研修は本学IR推進センターとの共同開催で行われた。IR推進センターは様々な教学情報を管理、収集、分析し、その結果を教育・研究・学生支援のために、数値化、可視化することを目的として2018年度に設置された。しかしながら具体的にどのような情報を取り扱っているかなど本学教員も知らないことが多いため、午前中はIR推進センター長の安部博史教授からIR推進センターの活動状況についてのレクチャーがあり、引き続き各学部における学生支援状況をIR推進センターが持つ各種データとの係りを示しながら話題提供がなされた。学部によって積極的にデータを取り教育支援に活用しているところ、少しずつ始めたところなどがあり、あらためて各学部で教学情報の取り扱いの違いを知ることができたことは有意義であった。

午後からは「IRを活用した学生支援の方法を考える」というテーマでのワークショップ(WS)で5つのグループに分かれて小グループ討議を行った。いつも同じテーマで議論することが多いが、今回は5つのグループが別々のテーマで議論された。1グループ6から7名の小グループ討議であったが、例年グループワークの時間が短いなどの理由でプロダクトが不完全なところもあるが、今回はすべてのグループのプロダクトに関して完成度の高いものになったと思う。

各グループともIR推進センターへ収集してほしい教学データやその取扱いについてのプロダクトが作成され、今後のIR推進センター事業への参考になったのではないかと思う。

(薬学部 遠藤 泰)

今回のFD研修は、「学生教育を改善するためにどのようにinstitutional research(IR)を活用するか」というテーマで行われた。まず、午前中に、IR推進センターによる取り組みに次いで、各学部でのIRを利用した取り組みについて発表がなされた。それを聞いて、留年、休学・退学、国家試験合格率など各学部で共通の問題が存在することを知った。他学部の内情についてまとまった発表を聞く事ができたのは初めての経験であり、大変、興味深かった。

午後にはグループに分かれてテーマ別にワークショップが行われ、私は、「留年・退学・休学を減らすためのIRの活用」というテーマの討論に参加した。討論の結果、「留年と相関するリスク因子を発見するためにIRを用いた分析を行い、学習支援などの早期介入を行うことで留年を防ぐ。」というIRの活用法が結論された。今後の学生教育を考える上で、とても有意義な体験であった。

(薬学部 泉 剛)

8月9日令和最初のFD研修テーマ編が「IRを活用した学生支援の方法」を

サブテーマに開催されました。IR推進センター委員長の安部先生と各学部の学習支援の担当者からこれまでの取り組みが紹介された後、さらに各学部からの先鋭部隊により、「卒業試験・国家試験合格率を上げるためのIRの活用」など5つのワークショップテーマで活発な討論が行われました。

とにかくFDというと、取りあえず行って、その後は何の活用もされないと言うことがこれまでの常でした。そのためFD自体が形骸化していました。それを打開するのがFD委員会の新たなミッション(私の個人的なミッションかもしれませんが)で、昨年度より進めてまいりました。今年はIR委員会との共催で、まさにすぐに実行できるテーマになりました。様々な教務問題が蓄積されてきている中で、IRの利用はその解決策の重要なツールである事は間違いありません。今回はその活用法を十分に議論できたのではないかと感じています。

後は実行あるのみです。実行するかどうかは本気度の問題です。各学部に戻って更なる議論が展開されることを願っております。

(歯学部 荒川 俊哉)

全学FD研修<テーマ編>へのタスクフォースとしての参加は、今年で2年目であった。今回は志渡委員長を中心としたコア・メンバーによる企画と事前準備が素晴らしく、テーマの選択とグループ編成が絶妙だったため、どのグループも活発にディスカッションが行われていた。また、IR推進センターとの共催ということで、安部センター長がグループワークの時間帯も参加してくれたため、その場で質問や要望を話すことができたのはとても有意義であった。

一方で、学部・学科間での温度差を感じる場面も散見されたが、今回のように学部横断的に教員が集まってグループワークをする機会は本学の継続的な発展のためにもとても重要であると感じた。その意味でも、去年までのようにグループ毎に顔をつきあわせて昼食(お弁当)をとることができなかったのはとても残念である。限られた予算であることは理解しているが、必要な経費を削減すべきではないと考える。

(歯学部 會田 英紀)

今年度は「学生を中心とした教育をすすめるために」-IRを活用した学生支援の方法」と題して行われた。私はEグループ担当のファシリテーターであり、「臨床教育へのスムーズに移行を図るためのIRの活用」という課題でワークショップが行われた。

課題に対する達成度に関しては、多くの情報を活用し対策を考えるというIRの役割が各教員に意識されたという点で成功ではないかと感じた。

これまで幾度か全学FDに参加して毎回参考になっているのは、各学部の生の

状況を知ることができるという点で、今回も、ある学部では「朝〇〇時に駅前のローソンに集合させて、朝の起床から指導をしている先生がいる」というお話が印象に残った。そこまでするのか、ということも感じたが、そうすればいいのかという方向のようなプラスの面を感じた。

今回は IR 推進センターとの共催であったが、IR 推進センターに対しては、多くのデータからある問題に関して作用している要因を示してくれたり、ある要因の変化（＝対策）が実際に有効であったかなどを吟味してくれたりしてもらえると助かるのではないかという期待を感じた。

（心理科学部 森 伸幸）

大学での IR はまだ馴染みは薄いところですが、参加者はみな興味を持って研修に取り組んでおられました。留年、退学、休学、学業不振・・・、重たい言葉が飛び交いましたが、それらを何とかしたいという思いがモチベーションになっていたのでしょう。

各学部からの話題提供では、留年、休学などの「不都合な真実」に関する明確なデータが示され、危機感が強められました。ワークショップでの討論も活発になされましたが、ついついあのデータも欲しい、このデータも必要だと話が広がっていき、かえって分析が大変ではないかとの声も聴かれました。あるいは、学生の個別の事情を重視した質的データの重要性も議論されましたが、そのデータの収集、記録化のためには担任教員の負担が増加し、かえって十分な教学の実現を妨げるのではないかといった懸念も指摘されました。IR の難しさを感じさせられました。

本学の IR 活動はまだ緒に就いたばかりですが、今後ますますその必要性が高まっていき、このテーマの研修の継続実施も重要になってくるだろうと強く実感されました。

（心理科学部 野田 昌道）

テーマ自体が初めて取り上げられたものであり、IR 推進センターとの初めての合同開催ということで、まず、手探りの中進められたところが印象的でした。薬学部、歯学部で個人もしくは組織としてまとめられていたデータが提示され、いずれも定期試験や模試の段階で下位のグループの国家試験合格率が低いことが示されていました。感覚で感じていたことが可視化され、全学共通試験や各学部での同様の検討の必要性を感じました。また、入試形態で AO 入学者の増加と成績低下の増加が提示されましたが、相関のある現象であるのか否かの検討を IR 推進センターなどで検討していただきたいと思いました。両者に相関が認められるのであれば、入学後の教育では留年者、退学者、国家試験不合格者の

減少は不可能であり、入試制度自体の変更が必要となると感じました。

今後、同様の研修が行われるのであれば、IR 推進センターでの詳細な解析結果を基にしなければ無意味であると思います。

(医療技術学部 坊垣 暁之)

今回は IR の活用ということで FD を行った。今回の研修でもっとも役に立ったのは、安部教授から IR 推進センターが収集しているデータがどのようなものかのレクチャーがあったことである。どのようなデータを使い、どのように活用していくかは今後の課題にはなると思うが、とりかかりとしては、どんなデータが現状収集されているかを認識しておく必要があるため、今回のレクチャーは有意義なものであったと思われる。

WS については、活発な意見が出ていたようで、参加者にも有意義なものであったのではないかと思われる。

(全学教育推進センター 長谷川 敦司)

今年度の FD 研修テーマは、「IR を活用した学生支援の方法」であった。午前に実施された各学部における学生支援の取り組みは、それぞれの学部が様々な学生、問題に対して色々な工夫を行っている現状が理解でき、とても参考になる内容であった。

ワークショップでは、「IR を活用した学生支援の方法を考える」というテーマに対して、国家試験対策から留年・退学・休学対策に至る 5 つの異なる目的のグループを作成し、議論が展開された。どのグループにおいても、学生の学力を知る資料だけでなく、性格など学生の生活全般がわかる広範囲の資料の必要性をあげていた。

時間的制約があり、大まかな意見として提案がされたため、今後 IR 推進センターがどのように本研修会の意見や各学部の意見を吸い上げ、具体的な活動としてどう反映させていくのか、見えない部分があると同時に難しい部分であると感じた。

(全学教育推進センター 山口 明彦)

# アンケート

2019年度 北海道医療大学 全学FD研修 参加者アンケート

今回のFD研修について、次の項目にお答えください。

1. 今回のFD研修の日程と時間配分は適当であったか、ご意見をお書きください。

●日程について \_\_\_\_\_

●時間配分について \_\_\_\_\_

2. ワークショップについてご意見をお書きください。

---

---

3. 今回のFD研修でよかった点、悪かった点をお書きください。

---

---

4. 今後のFD研修に向けて、取り上げるべきテーマなどご提案をお書きください。

---

---

ご協力ありがとうございました。

## 2019年度 北海道医療大学FD研修(テーマ編)

### 参加者アンケート集計結果

研修参加者 48 (内アドバイザー4名、FD委員:12名)  
アンケート回収 29 (FD委員を除く)

1. 今回のFD研修の日程と時間配分は適当であったか、ご意見をお書きください。

#### ●日程について

「良い」「適切」・・・20

##### <改善要望・意見>

- 日程のアナウンスをもう少し早めにいただけると助かります。
- 9月の方が出席できる教員が増えるのではないか。
- 連休前、成績締め切り前で参加が大変でした。(2件)
- 夏期休業の直前でない方がよいのでは？(2件)
- もう数日、早くてもよいかもしれない。
- 昨年も申し上げましたが、この時期は一年の中でも最も忙しい時期ですので、お願いですから時期等を考えてください。

「無記入」・・・1

#### ●時間配分について

「良い」「適切」・・・19

- ちょうど良いです。
- 適当でした。

##### <改善要望・意見>

- 長い。(3件)
- ワークショップが短いと感じた。
- ワークショップは長い上、休憩時間が間にないため疲れるのではないか。
- 討論時間が少し長かった。
- 長すぎ。(半日で終わらせて)
- 前半も後半も、全体的にもう少し時間が短い方が望ましいと思います。(30分くらいずつ短めに…)
- 時間管理をもう少しきちんとしてください。

「無記入」・・・1

## 2. ワークショップについてご意見をお書きください。

### <肯定的意見・感想等>

- 学部横断で議論する機会はとても良いと思います。
- いろんな人が自由に意見できる展開となり、とても有意義だった。
- 時間、内容ともに充実していて、有益だと思いました。
- 今回、他学部の先生と意見交換・共有ができて非常に有意義でした。(2件)
- プロダクトの実現化が進むと良い。
- IRについて知れて良かった。
- 良いと思う。
- 他学部の教員と話し合え、新たな視点が深められた。
- 学生教育で抱えている問題が共通していることが分かり、良かった。
- IRについて今まで知らなかったなので、参加して良かったです。
- 他学部の状況を聞くことができて良かった。IRについてはまだまだできる事があると感じたので、今後より活用される事を願います。
- むずかしいテーマでしたが、データの活用の必要性を理解できました。
- ワークショップは他学混成でさまざまな意見や状況を聞くことができて、良好であった。
- 他学部の取り組みが参考になった。
- アイスブレイクの後、色々話せるようになり良かった。
- グループの人数や時間配分も適切であった。
- 未知のテーマだったが、勉強になった。アイスブレイクも盛り上がり、楽しかった。
- 各学部の先生とのディスカッションがとても刺激になりました。
- IRの活用を中心にしての今回のWSは、良かったです。

### <改善要望・意見>

- 議論が活発だったが、内容が幅広なので何か一つを例にして、課題解決するようなネタでもよかったのではないか。
- テーマがIRしばかりで難しかった。
- 意見交換ができるのは良いが学部毎で状況が違うので、着地点を見つけるのが難しい。
- 対象者を少し絞ると良いかもしれません。
- テーマが漠然としていて、かつ、似かよったテーマがあったため、そことの相違をどのように出すか、難しかった。
- 長いです。
- 事前にテーマを知らせていただき、ある程度意見を持ち寄って話し合えると同じ時間内でプロダクトの質が向上すると思います。

「無記入」・・・2

3. 今回の FD 研修でよかった点、悪かった点をお書きください。

#### <肯定的意見・感想等>

- 良かったのはアイスブレイク。
- 先生方から沢山の話を聞いたのがよかった。勉強になります。
- 他学部の現状が分かって良かった。(2件)
- 全体的に IR の概要を知ることができ、有意義でした。(3件)
- 他学部の取り組みを聞くことで、自分の学部でも検討すべきことが見えました。
- テーマが一つでしたので、時間的にちょうど良かったです。
- テーマ別に行ったので、スムーズに進んだ。
- 他の学部の先生と話す機会ができてよかった。(4件)
- 午前中の講義の内容が午後のワークを考える上で大変参考になり良かったです。
- 各学部の卒試、国試対策がみられた。
- 午前中では各学部での具体的な取り組みが興味深かったです。
- 日ごろ感じていたことが、他の教員も同様であった。
- ディスカッションができ、有効だった。実現化できたらなお良い。
- IR について改めて考えることがよかった。
- とても明るく、楽しい雰囲気だった。
- 各学部における学生支援の状況の歯学部（門先生）、心理科学部（西郷先生）の報告がとても参考になった。IR というテーマも操作的でよかった。
- 各グループのテーマが明確でした。良かったです。

#### <改善要望・意見>

- 悪かったのはワークショップの時間が短いこと。
- 悪かった点は、長い。
- 昼休みの時間はもう少し長い方が良いと思います。(1時間15分とか)
- 午前中、人選をよく考えた方が良いと思います。(看護)
- 他学部の状況がもう少し具体的に聞けたらと思いました。
- C31 のプロジェクターの光が弱くて見づらかった。
- 各班、別テーマだったので全体討論しにくかったと思います。
- テーマによって、現状の IR で対応が難しいこともあったこと。
- お昼休みが短かったため、戻ったところ研究室で TEL 対応しているうちに昼食をとることができませんでした。
- 他大学の IR 活動について知りたかった。
- アドミッションポリシーについて考えることがなかった。

4. 今後の FD 研修に向けて、取り上げるべきテーマなどご提案をお書きください。

- 「学生の居場所作り」のアイデアなど。
- 障がい学生支援、授業計画、シラバスの作り方など。
- 全体的に学力低下が著しい中でのカリキュラム、教授方法についての検討。
- 学生への禁煙指導の具体策について。(悩みです)
- 学生の精神的サポートに必要な教員側スキルについて。
- 学生の資質向上。(情意面、生活面 etc.)
- 教員のモラル。(ハラスメントへの認識 etc.)
- 最近の学生に合った教育法など。

- 効果的な教育支援方法。
- 臨床教育の方法について。
- 授業の質向上に対する取り組みなど。
- 授業内容をIDに基づいて振り替えられるようなテーマ。
- 学修理論について。
- 全学教育のあり方。
- 医療大独自の授業の構築に関するFD等。
- 多職種連携教育、働き方改革、ワークライフバランス、教職員の健康。
- 実際にIRデータを利用した実例を講演いただいた上で、今回の研修を再度できればよいかもしれませんね。
- 臨床実習の評価について。

# ア ル バ ム

## アルバム



開会式

## レクチャー

「本学における教学 I Rの整備・活動状況と今後について」

I R推進センター長 安部 博史 教授



話題提供

「各学部における学生支援の状況」



薬学部 木村 真一 准教授



歯学部 門 貴司 准教授



看護福祉学部 西 基 教授



心理科学部 西郷 達雄 助教



リハビリテーション科学部 宮崎 充功 准教授

## ワークショップ② アイスブレイキング（グループづくり）



Aグループ



Dグループ

## ワークショップ③ ワークショップのすすめ方



Aグループ



Bグループ



Cグループ



Dグループ



Eグループ

## グループ発表・全体討論







閉会式





学務部 教務企画課 〒061-0293 北海道石狩郡当別町金沢 1757

TEL:0133-23-1211 / FAX:0133-23-1669

URL:<http://www.hoku-iryu-u.ac.jp/>